

R756.6-F66ㄅ  
1200500767582

R756.6  
66  
ㄅ



始





非  
R7566  
F66  
⑦

上海商務印書館

日  
平  
工  
錄  
典

十  
二  
月  
第  
一  
卷



### 菊御作

長くも後鳥羽上皇に置かせられては刀劍御鍛錬に御興味を持たせられ給ひ全國から優秀鍛冶を御選抜相成り月番を定めて上洛せしめ御鍛錬御相手を命じ給ふ、これ等光榮の刀工を世に御番鍛冶と唱ふ、最高貴の御身にして刀劍製作に當らせられ給ひしことは當時、青天の霹靂であつたに違ひない、後故へありて隱岐國に御遷幸の後も、この御鍛刀を以て御心を慰め給ひしと云ふ、世上にはその御作を拜することは至難であらう。

上皇御自から刀劍製作に御關心を持たせられ給ひしことは一般刀工の地位とその刀劍技術を高め、更に又一般諸將士の刀劍尊重の念を深めた、現代なほその精神が刀劍に拂はれてゐることは、實にこのゆへあるためである。

はしがき

古刀篇が漸くこゝに完成を見るに至つた。

本辭典は所謂辭典として相應はしからぬかも知れぬが、其内容も従來の刀書とは趣きを異にしたもので所謂私流の古刀新解譯であるが、こゝに此の書の特質があると思ふ。

これが努力は既刊新刀篇以上であつたが、果して讀者の皆様はどう響くか此の点一抹の不安を禁じ得ない。

日本刀工辭典は是を以て一先完了したが、自分年來の研究は決して古刀篇を以て終るものではなく、更に一層の精進を以てすべき決意を自覺してゐる。

藤代義雄

昭和十三年七月十七日

## 凡例

一、本書は作刀の實在を本位として編輯したものであつて、銘鑑のみ名を留め實在しないものは簡畧にした。

一、双文圖は可成く之を掲げ、無銘古刀鑑別に便ならしめ、師弟關係は新解釋のものと、舊說に従つたものがある、従がつてこれの時代的連絡の不合理はこの新舊の對立のために因ると御想像願ひたい。

一、本古刀篇は便宜上左記の三ツに傾ちた。

古刀 (天慶……文保)

中古刀 (元應……長祿)

末古刀 (寛正……文祿)

一、刀工の位列は古書によらず現在著者の私見に基いて之を附したもので、御参考に御覽願ひ度い。

「最上作」「上々作」「上作」「中上作」「中作」

一、本書に收められた業前は山田淺右衛門吉睦の古今鍛冶備考撰に據るものである。

「最上大業物」「大業物」「良業物」「業物」

一、本辭典掲載の押形は何れも正眞と認めたものゝみである、御不審の点に付いては理由を附して御教示あり度い。

一次目篇刀古一

是	冬	藤	昌	將	政	正	泰	康	安	月	軍	國
二九四	二九三	二九三	二九二	二九二	二九〇	二七三	二七一	二六一	二五五	二五四	二五三	二〇九

義	鬼	清	金	西	左	實	眞	眞	定	秋	顯	在	有	照
三三五	三三五	三三七	三三七	三三六	三三三	三三二	三三二	三〇六	三〇三	三〇一	二九九	二九九	二九九	二五五

久	秀	平	門	寬	弘	廣	實	壽	鎮	重	道	通	光	幸	行
三六二	三七九	三七六	三七六	三七六	三七六	三六五	三六五	三六四	三六三	三五三	三五三	三四四	三四四	三四四	三六六

末	相	資	祐	助	千	師	基	元	森	守	盛
四五五	四五五	四五四	四三九	四二二	四一九	四一七	四一四	四一〇	四一〇	三九九	三六四

\*

一次目篇刀古一

外	遠	具	朝	倫	利	俊	友	實	入	日	治	春	家	一
三	三	三	三〇	元	七	六	九	八	八	八	六	四	四	一

賀	能	義	吉	岩	景	金	兼	包	勝	力	良	了	周	近	道
二二六	二二七	二二三	二〇八	一〇七	九	九	五	四	七	七	六	五	五	三	三

成	直	續	次	貫	綱	經	常	恒	爲	武	雄	忠	高	大	仍	祥
一五三	一五二	一五二	一四七	一四六	一四四	一四〇	一四〇	一三七	一三六	一三五	一三五	一三三	一三三	一三〇	一三〇	一九

延	信	憲	教	法	則	雲	氏	村	統	宗	仲	永	長	業
二〇七	一九七	一九七	一九六	一九五	一八六	一八四	一八二	一七九	一七七	一七〇	一七〇	一六八	一五五	一五四

引索工刀名著

山城國	栗田口久國	三三三
	栗田口國綱	二一七
	栗田口吉光	一一八
	綾小路定利	三〇三
	來國行	二二三
	來孫太郎國俊	二一〇
	了戒	三五
	來國光	二二六
	來國次	二一八
	長谷部國重	二四一
	左衛門尉信國	二〇〇
	平安城長吉	一五五
大和國	龍門延吉	二〇七
	手搔包永	四六
	尻懸則長	一八八
保昌貞吉		三〇六
手搔包真		五一
伊勢國	千子村正	一七八
	千子正重	二八七
相模國	藤源次助真	四三一
	備前三郎國宗	二二三
	新藤五國光	二二七
	相州行光	三三八
	五郎入道正宗	二八一
	相州廣光	三七四
	相州秋廣	三〇一
	相州廣正	三七一
美濃國	志津三郎兼氏	六八
	和泉守兼定	八〇
孫六兼元		九三
陸奥國	奥州實壽	一八
越中國	吳服郷則重	一九三
加賀國	藤島友重	二四
伯耆國	大原安綱	二五七
石見國	石州直綱	一五一
備前國	古備前包平	五三
	古備前助平	四三七
	古備前友成	二一
	古備前正恒	二七七

引索工刀名著

一文字助宗	四二七	
一文字助包	四二一	
一文字吉房	一一六	
一文字助守	四三八	
長船光忠	三四五	
長船長光	一六二	
長船真長	三一七	
左兵衛尉景光	一〇一	
畠田守家	三九九	
長船兼光	九三	
長船倫光	二九	
長船義光	一二三	
長船長義	一五九	
鶴飼雲次	一八四	
長船元重	四一一	
長船近景	三二	
右衛門尉康光	二六五	
修理亮盛光	三九三	
右京亮勝光	三八	
次郎左衛門尉勝光	四一	
與三左衛門尉祐定	四三九	
五郎左衛門尉清光	三三一	
備中國	青江守次	四〇五
	青江恒次	一三七
	青江助次	四二五
	右衛門尉吉次	一一一
	大隅權介貞次	三〇八
	青江次直	一四九
	青江次吉	一四七
備後國	古三原正廣	二八八
長門國	左安吉	二五五
筑前國	入西	一八
	西連	三二六
	筑州左	三二三
筑後國	三池元真	四一〇
豐後國	豐後行平	三四二
	高田庄友行	二三
薩摩國	波平行安	三三七
肥後國	延壽國時	二〇九
	延壽國資	二五〇

日本刀工辭典 古刀篇

◇一文字福岡

〔承元前後—備前〕

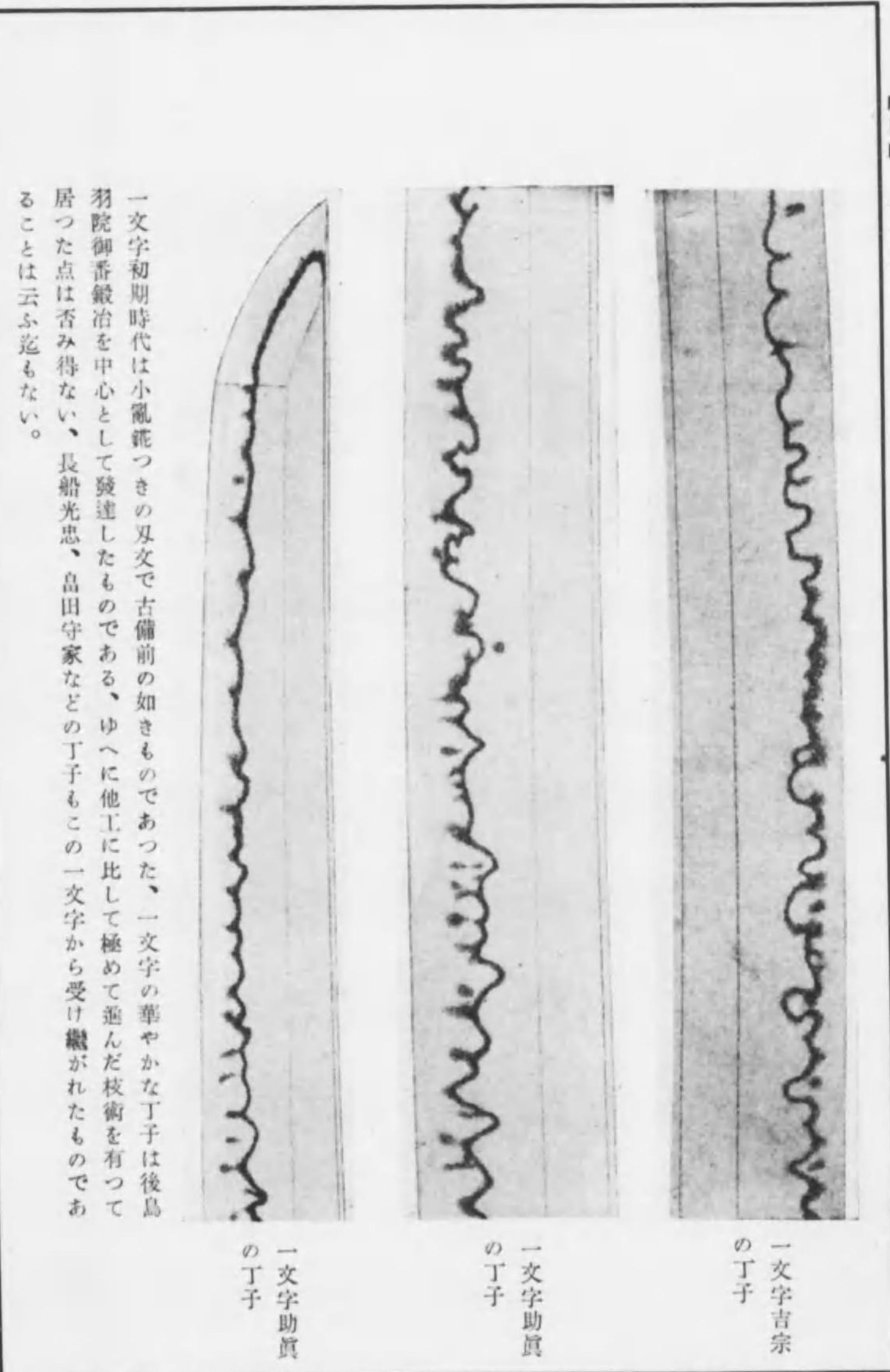
古刀上々作

一を切るものは福岡一文字派中、誰彼とハツキリしたものではない、一を切るに鑑を用ひたものと鍛で切つたものと二色ある、前者こそ福岡一文字の起りをなしたもので、その作も古備前の如き小亂蹴付きと思はれる、後者はそれ以後の所謂福岡一文字の特徴を遺憾なく發揮したる丁子刃の時代に相當する、大丁子の華やかなもの程、一文字としてはその末期に近い文永、弘安時代であると考へられる。

刻銘「一」







一文字初期時代は小亂疵つきの刃文で古備前の如きものであつた、一文字の華やかな丁子は後鳥羽院御番鍛冶を中心として發達したものである、ゆへに他工に比して極めて進んだ技術を持つて居つた点は否み得ない、長船光忠、島田守家などの丁子もこの一文字から受け繼がれたものであることは云ふ迄もない。

◇ 一文字吉岡

〔元徳前後—備前〕

中古刀 上々作

吉岡一文字派は「一」の字の外に自己銘を長々と添へたるもの多く是が摺上の場合に「一」の字のみ残れるものを往々見る「一」のみを見るに福岡一文字末期（文永、弘安）と變らない、其の作品直丁子又は直刃に足入り、福岡一文字に比して非常に淋しいものである、總じて此の時代の長船物に變らない。

刻銘「一」



この他一文字と稱する一派は、片山一文字、正中一文字がある、前者は一を切つたものは見ない後者は一を切りて備州岩名莊云々と切るも作刀は極めて妙い。

岩崎航介氏は一文字の「一」を「無敵」と説明してゐる、…「無敵」は刀工銘ではなく刀への贈名と云へる、…「無敵」の刀を帯びて戰場への臨んだ古武士、…如何に力強さを感じ士氣が鼓舞されたかは想像に難くない。

◇ 一乘法華

〔應永—備後〕

中古刀 上作

法華鍛冶の名がある、出家とも云ふ、備後三原の一派であるが作品は極めて妙い。

刻銘「備後國住一乘」「法華一乘」「一乘」

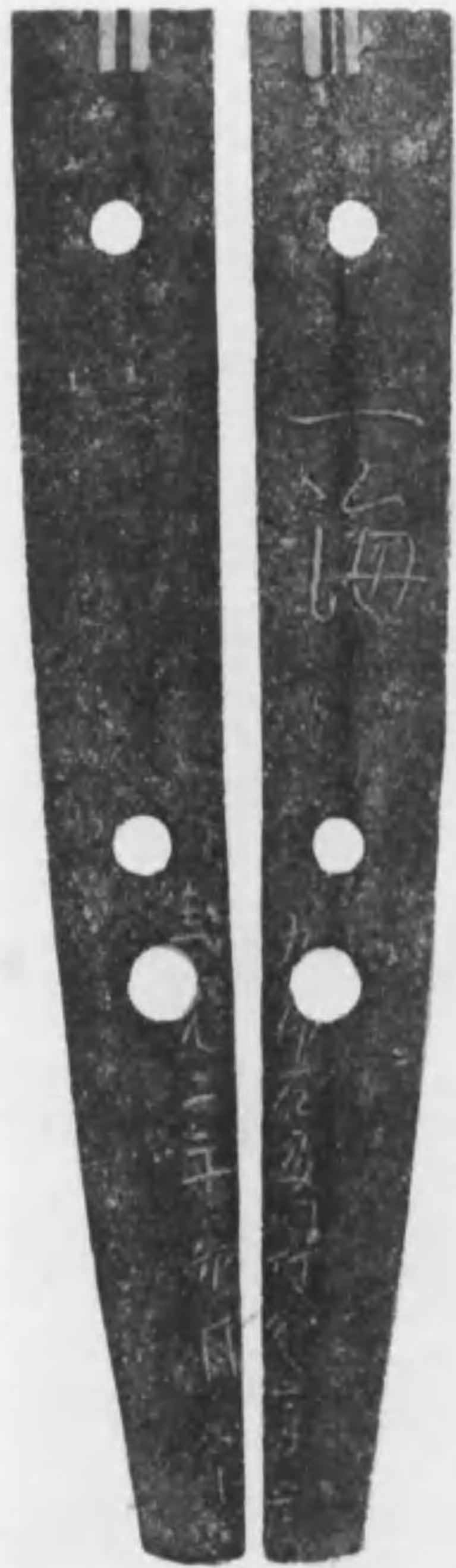
◇ 一海 九郎左衛門尉

〔嘉元—山城〕

古刀 上作

了戒は九郎右衛門、一海は九郎左衛門と稱し久信と銘することはこの押形を以て明らかである、古來久信は了戒子又は孫と云ふ、併し作品時代を同うするのと右衛門、左衛門と號するを以て見れば兄弟若しくは子の何れかであらう、その作柄はすべて了戒同様來一派と見るべきものである。

刻銘「一海九郎左衛門尉久信作」



一海は法名にして、久信は刀銘ならん、了戒の代銘代作をなしたと云ふ説がある、これは了戒晩年期に於てであらう、こうした問題は他工にも往々に見ることの出来る例であつて決して神經を尖らすべきではない、了戒、一海の場合これが表面化したと云へよう。

◇ 家吉 加州

〔寛正—加賀〕

末古刀 中上作

越前家吉同人ならんかと考へられる。

刻銘「家吉」

◇ 家吉 越前

〔文明—越前〕

末古刀 中上作

千代鶴一派、作風藤島友重に似る。(業物)

刻銘「家吉作」



◇ 家能 了戒

〔文明—豊後〕

末古刀 中上作

初め山城住後豊後に移る、その作品は平安城長吉の風情がある。

刻銘「了戒家能作」



了戒の一族が豊後へ移つてこの地に榮えた、初祖了戒の名を姓の如く用ひて了戒何々と名乗る、其の作柄各工共大体に於て同様である。

◇家忠 一文字

〔永仁―備前〕

古刀 上作

一文字家則孫に當る、その作品直丁子、又は直小足入りにして長船景光に似る。

刻銘「家忠」「家忠作」



銘鑑に因ると一文字、長船等がハツキリ區別されてゐるが、一文字がそれのみにて終つたのではなく、一文字時代から長船時代(長光、景光)へと繼續してゐるので、一文字の作風と長船の作風とがハツキリ區別を附し難いものがある、例へば一文字の大丁子は、光忠、守家の大丁子時代と接近してゐるし、又一文字の直丁子は景光の直丁子に接近してゐると考へられる。

◇家次 青江

〔建久―備中〕

青江守次弟子であるが作品を見ない、加賀に同銘ありて世上青江家次と稱せらるゝ作品の多くは加賀家次と見て誤りはない。

刻銘「家次」

◇家次 片山

〔應安―備中〕

中古刀 上作

片山一文字派、小反備前の如く小銘に「備中國住家次」と切る、吉房とも銘すと云ふ、作品逆丁子烈しきものがある。(大業物)

刻銘「備中國住家次」

◇家次 加州

〔永正―加賀〕

末古刀 中上作

國次子、眞景を初祖とする此の一派は橋爪派と稱せられ又加賀青江とも云ふ、若州、越前にて造る。(業物)

刻銘「家次」

◇家次 加州

〔弘治―加賀〕

末古刀 中上作

加賀青江とも唱へられるのは作柄に於て、銘に於て青江物を想像されるためであらう、故に加賀家次が備中家次に間違へられる事が屢々ある。(業物)

刻銘「家次」



よく「青江家次」があるとの照會に接するが十本が十本共、加州家次か或は偽銘である、世上稀れに見られる「青江家次」は殆んどみな小銘にて「備中國住家次」とある、尙加州家次は二人以上あつたらしい。

◇家 永 加州

〔享祿―加賀〕

末古刀 上作

橋爪に住す、加賀初代家次子又は弟子と云ふ、越前にも住し作風は宇多國宗等に似る。

刻銘「加州藤原家永」



刀工は「源、平、藤原、橘」の何れかの姓を持つてゐた様である、そして藤原は代々藤原を名乗る風があつたが、後世は勝手にこの姓を替へた、(例、新刀期の初代忠吉、津田助廣など)。

◇家永大石

〔享祿―筑後〕

末古刀 上作

筑後大石に住し、左貞行流、大石左と云ふ、藝州にても造る、作品に短刀あるも左文字の風情は見られない。

刻銘「筑州住大石家永」

◇家則一文字

〔貞應―備前〕

古刀 上作

一文字助則諱と云ふ、家真、家忠等の祖をなす、作品直丁子など長船ものに近いものがある。

刻銘「家則」

◇家信一文字

〔仁治―備前〕

古刀 上作

一文字宗家子、その作一文字風丁子であるが焼崩れありて異風に見ゆ。

刻銘「家信」



◇家貞雲州

〔天正―出雲〕

末古刀 中上作

雲州忠貞一派、従つて双文小五ノ目等作風相似る。

刻銘「雲州住家貞作」



◇家重長船

〔應永―備前〕

中古刀 中上作

義景弟子にて、作風同時代の康光、盛光に似る。

刻銘「備州長船家重」

◇家重小田

〔永祿―備中〕

末古刀 中作

三原もの一派にして備中小田へ移りしものか。

刻銘「備州小田住家重作」



◇家秀 加州

〔文亀〕加賀

橋爪住家永等の一派であらう、双文五ノ目丁子匂出来。

刻銘「藤原家秀作」

末古刀 中上作



加州刀工には「藤原」を名乗るものが多い。

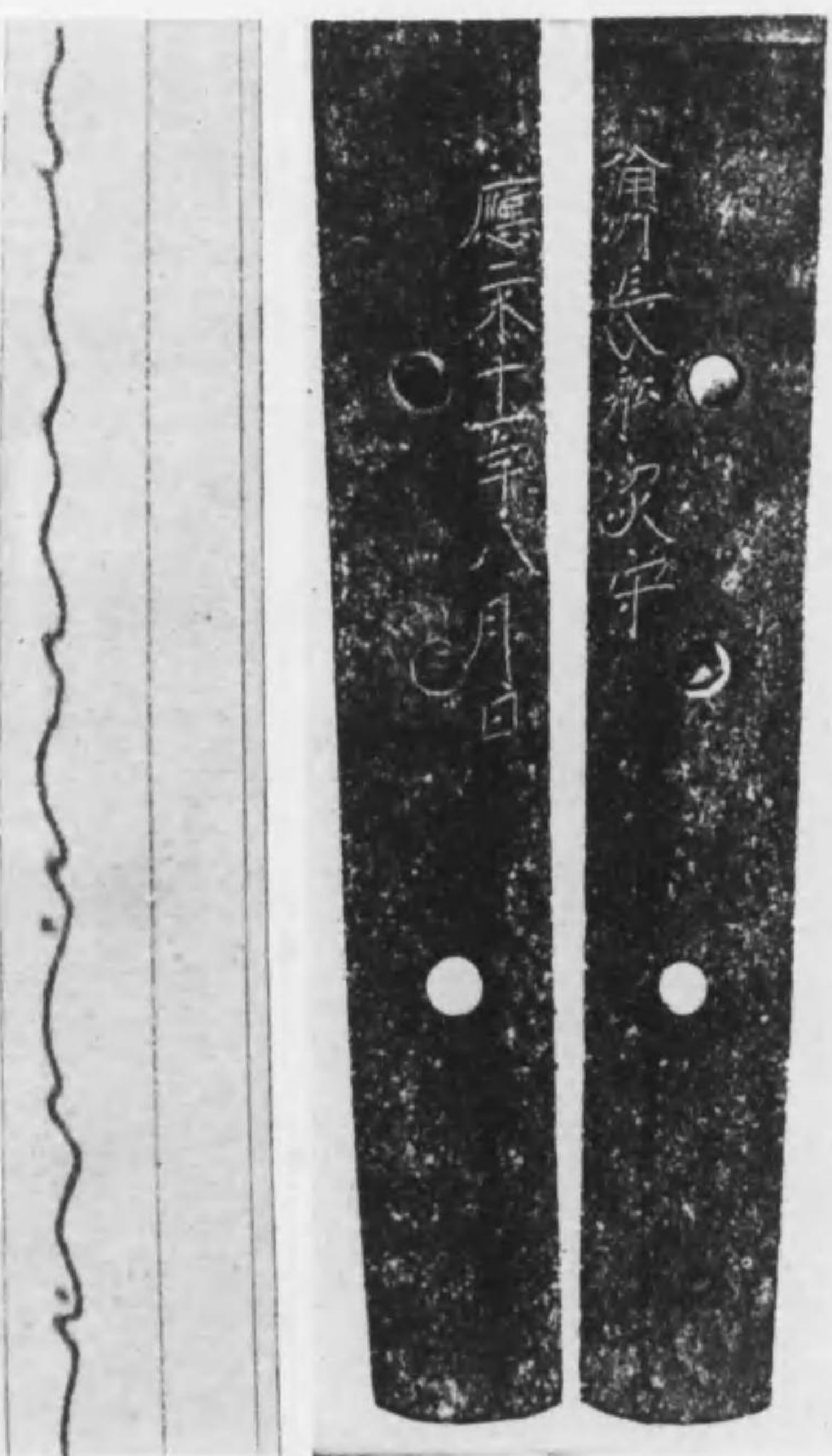
◇家守 小反

〔明德〕備前

義景弟子、小反備前派中最名高い、作品小五ノ目丁子が多い。(大業物)

刻銘「備州長船家守」

中古刀 中上作



小五ノ目  
丁子

地板目、双文小五ノ目丁子匂締りて淋しきもの多い、これは小反備前全般に亘る特徴である、兼光弟子筋にもこの作風がある。(小反備前II成家、家守、光守、光弘、光重等)

◇家助 島田

島田守家子、作品を見ない。

〔文永―備前〕

刻銘「家助」

◇家助 長船

〔應永―備前〕

中古刀 中上作

應永と永享に家助があるが、これを初二代に區別するのは無理であらう、初期應永の十年頃から始る、作品小脇差、寸延短刀多く、刀は稀れである、刃文五ノ目丁子、大目肌現はれ地映りつくくと云つた風。(業物)

刻銘「備州長船家助」



一圖

家助に限らず應永備前は刀が極めて少く小脇差又は短刀が多い、ゆへに刀の鑑賞のみが極めて厚い。

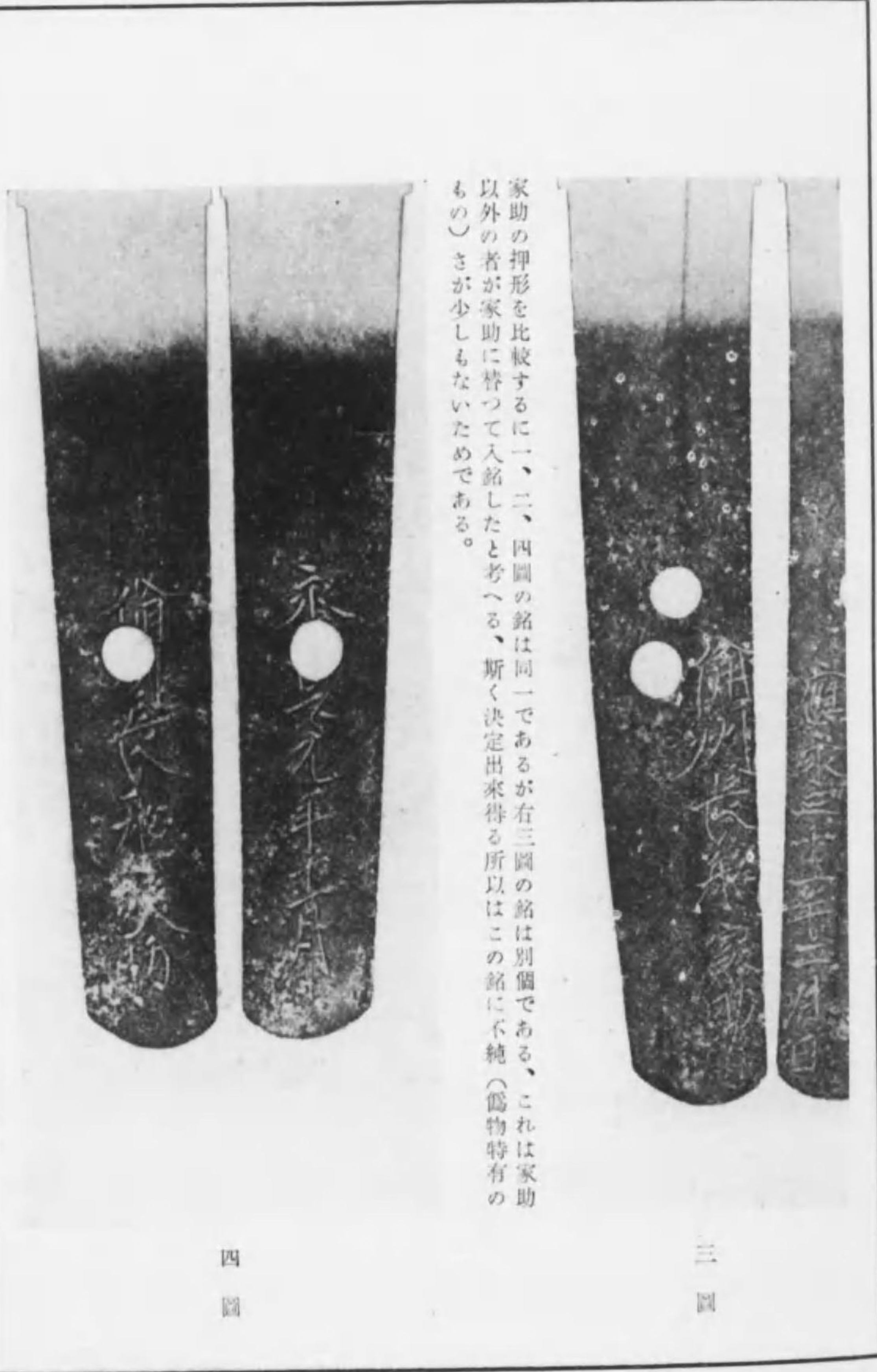


二圖



三圖

家助の押形を比較するに一、二、四圖の銘は同一であるが右三圖の銘は別個である、これは家助以外の者が家助に替つて入銘したと考へる、斯く決定出来得る所以はこの銘に不純(偽物特有のもの)さが少しもないためである。



四圖



小反備前に比して大模様、華やかである、技術的にも進歩を見てゐることがわかる、應永備前全般の特徴である。

五ノ目丁子

◇ 家助 長船

〔文明—備前〕

末古刀 中上作

作品少く出来も亦應永家助には遠く及ばない。(業物)

刻銘「備前長船家助」

◇ 春風

〔弘安—下野〕

相模にも住すと云ふ、此工の如きは記録にのみ名を留め、作品恐らく見ることは不能であらう。

刻銘「春風」

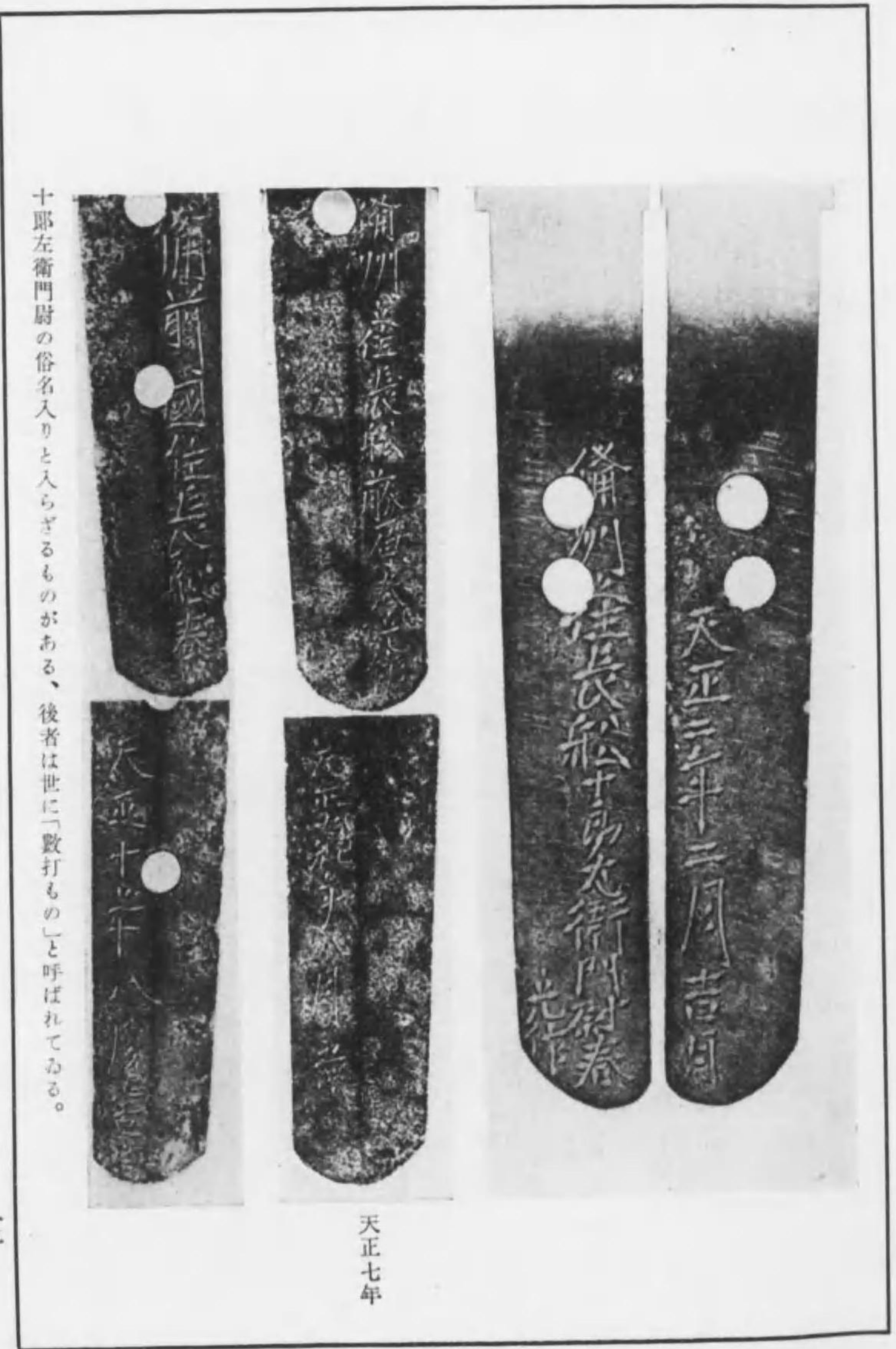
◇ 春光 十郎左衛門尉

〔天正—備前〕

末古刀 中上作

享祿より天文初め迄新二郎と打、以後十郎左衛門と打つ、次郎兵衛尉治光男にして長壽なりと云ふ、作品刀、短刀寸詰り中心長い、兩刃造りなどもあり、双文直崩れにて末備前風。(業物)

刻銘「備州之住長船十郎左衛門尉春光作」



天正七年

十郎左衛門尉の俗名入りと入らざるものがある、後者は世に「數打もの」と呼ばれてゐる。

【は】 春光・春盛・治國

◇春光 五左衛門尉

〔天正―備前〕

十郎左衛門春光の弟ならんか、作風は同様である。

刻銘「備前國住長船五左衛門尉春光」



末古刀 中上作

◇春盛

〔建長―下野〕

五左衛門尉は五「郎」左衛門の畧ならんか。  
春盛とも打つ、相模、越後にも住すと云へど春風と共に作品は見えない。

刻銘「春盛」

◇治國 菊池

〔天文―肥後〕

延壽の末、作品短刀多く回田貫上野介等に似たる風。

刻銘「菊池住治國」

末古刀 中上作

◇治光 次郎兵衛尉

〔天文―備前〕

次郎左衛門尉勝光子にして父子合作が多い、其の作品五ノ目丁子、直刃等すべて父に似る、劍卷籠等の彫物もある。(良業物)

刻銘「備前國住長船次郎兵衛尉治光」「備前國住長船治光」

末古刀 上作



鐵の深いしつかりした彫物にて所謂刀匠影である、末備前刀工は全般に發達した技術を有してゐるし、彫物の余技を有する者も相當にあつたことは考へられる、彫物が各工同じ調子であることは同流派なるがためであらう。

◇治光 十郎左衛門尉

〔天正―備前〕

子治光にして十郎左衛門春光の兄ならんか。

刻銘「備前國住長船十郎左衛門尉治光」

末古刀 上作

【は】 治光



◇日乗 伯耆

〔不明—伯耆〕

刻銘「伯耆國一宮日乗」

◇入西

〔永仁—筑前〕

古刀 上作

良西子、法師にして刀を打つ、一説良西同人とも云ひ、後安藝に移る、其の作品は地鉄板目肌荒く、双文小亂淋しきものなるを常とす。

刻銘「入西」



刀工が佛門に入ると云ふことは古今を通じて澤山ある、一例としては刀工が自己職業から受ける影響に依るものと思はれる、精神を養ふことを忘れなかつたことが非常に良い。

◇寶壽 奥州

〔貞應—陸奥〕

古刀 上作

その作品は地鉄大板目肌弱く荒い、双文直ほつれ肌からむ、劍卷龍などの彫物を多く見る。

刻銘「寶壽」

寶壽の作は眞の時代より古く見えることが普通であらう、それは僻遠の地に於ては時代の風潮に同化しきれないものがあるからである、かゝるものは多くは古くからの作風を繼續する。



◇寶壽

〔應永—陸奥〕

中古刀 中上作

何代目の寶壽であるか、必ずしも代々の繼續と考へられない、古人の名を追慕して復活せるものであらうか、後備前、備後に移る、その作品綾杉肌立ち双直肌からむ、劍の彫刻が多い、地鉄弱きため中心朽込多く時代古く見ゆるものがある。

刻銘「寶壽」



◇友吉 甘呂

〔至徳—近江〕

中古刀 中上作

甘呂俊長門、時代貞治とあるも師の時代延文に對して此工を至徳と見るが穩當。

刻銘「江州甘呂友吉」「友吉」

【と】 友綱・友次・友成

二〇

◇ 友綱 當麻

〔文和—大和〕

中古刀 上々作

當麻一派、友清の子、作品妙い。(良業物)

刻銘「友綱」

◇ 友次 古宇多

〔永徳—越中〕

中古刀 中上作

古宇多の一派である、則重の次に隆盛を見た一派であるが比較的認められてゐなかつた、双文小亂、地鉄板目肌現はれ則重を偲ばしむ。

刻銘「友次」



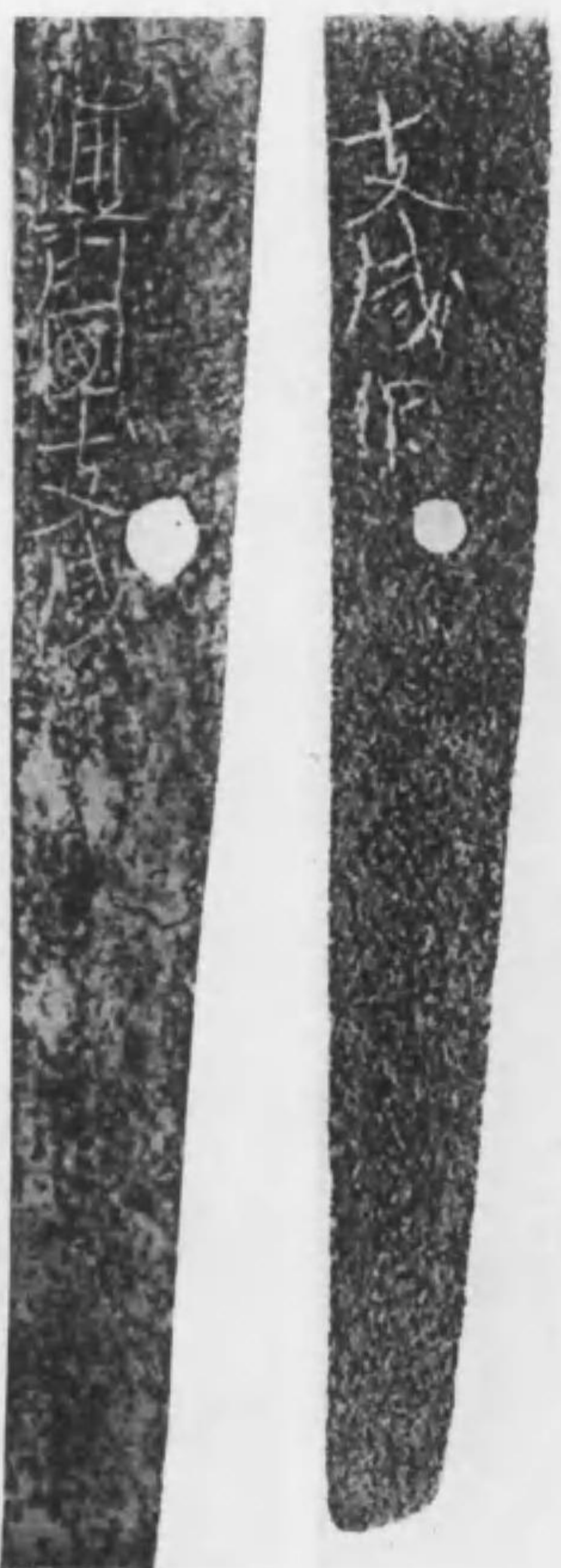
◇ 友成 古備前

〔寛弘—備前〕

古刀 最上作

父實成と共に一條天皇の御召に應じ、永延二年天皇の御劔を鍛へ奉ると云ふ、ゆへに通常時代を永延としてゐるが、只一つ嘉禎年號入りの友成がある、前述の傳を信ずれば明かにこれは別人であるが、銘振りから見ればそうとは考へられない、こゝに大なる疑問がある、其の作品反高く姿良い、地大板目肌現はれ、双文は小亂鈍付にして秀でたる作が多い。

刻銘「友成」「備前國友成」「備前國友成造」



劍話録、今村長實翁談に「御維新の際、嘉禎季五月日友成とある刀を萬屋六兵衛(刀屋)と近江屋嘉助(實屋)等が買つて居りましたして「嘉禎」の年號があると古備前になりませぬからとて悪いことに「嘉禎」の年號を潰して仕舞ひました……」と、この刀の上みの出来は小亂鈍付きの古備前作風、銘字も従来の友成と變らない、ゆへに従来の友成は時代釣上げの疑が充分にある、刀劍書と「嘉禎」年號が相違あるためにこの作品が古備前友成でないと弾り去ることは出来ない。

疑問に對する解答に限り古備前の友成が嘉禎の時代に及んでゐたとすると、一文字期宗等の御番鍛治時代と附合する、一文字の初期、即ち御番鍛治時代と云ふものは矢張り古備前の如き鈍付きの小亂又は小丁子の場合が多い、そして一文字獨特の華やかなる丁子は御番鍛治の一文字を中心として發達し、それ以後に及んだものではなかつたらうか。

古備前刀工全部が小亂鈍付のものではない、この作風は古備前初期の刀工に多く、古備前刀工中にも丁子、直丁子などがある点は古備前の末期が長船長光、景光時代にまで及んでゐる証據ではあるまいか。

【と】 友成

二

【と】 友成・友長・友則・友安・友清



小籠刃

肌目に順應して砂流が躍り、流が一面に働く、古備前全体の特徴である。

◇ 友長 當麻

〔正平—大和〕

中古刀 上々作

當麻友清子。(業物)

刻銘「大和國住友長作」

◇ 友則 古宇多

〔貞治—越中〕

中古刀 上作

時代建武宇多貞宗子と云ふ、その他種々の事情に基き此工時代建武を貞治と改めた。

刻銘「友則」

◇ 友安 遠州

〔應安—遠江〕

中古刀 上作

元暦頃御番鍛治に遠州友安があり、此處に又同銘がある、一寸奇異の感じを受ける、これを同銘異人と見ること出来得るが、時代の誤認からも生ずることがあり得る。

刻銘「友安」

◇ 友清 當麻

〔元應—大和〕

中古刀 上々作

當麻國行子、この一派は作品が極めて妙い。

刻銘「當麻友清」

◇ 友行 高田庄

〔貞治—豊後〕

中古刀 上々作

高田友光子と云ふ、作品年號は正平、貞治である、故にこの頃が鍛刀の中心時代であったことが知られる、相州貞宗弟子は賛成出来難い、作品先反短刀のみあり、双文小五ノ目丁子が多い。

刻銘「豊州高田庄藤原友行作」「豊州住藤原友行」



小五ノ目  
丁子

五ノ目の揃った点は長船基光等に近いものがある。

【と】 友行

【と】友光・友重

◇友光 當麻

〔應永—大和〕

中古刀 上作

當麻友行子、古來有名なれども作品を余り見ない。(業物)  
刻銘「和州住友光」

◇友重 藤島

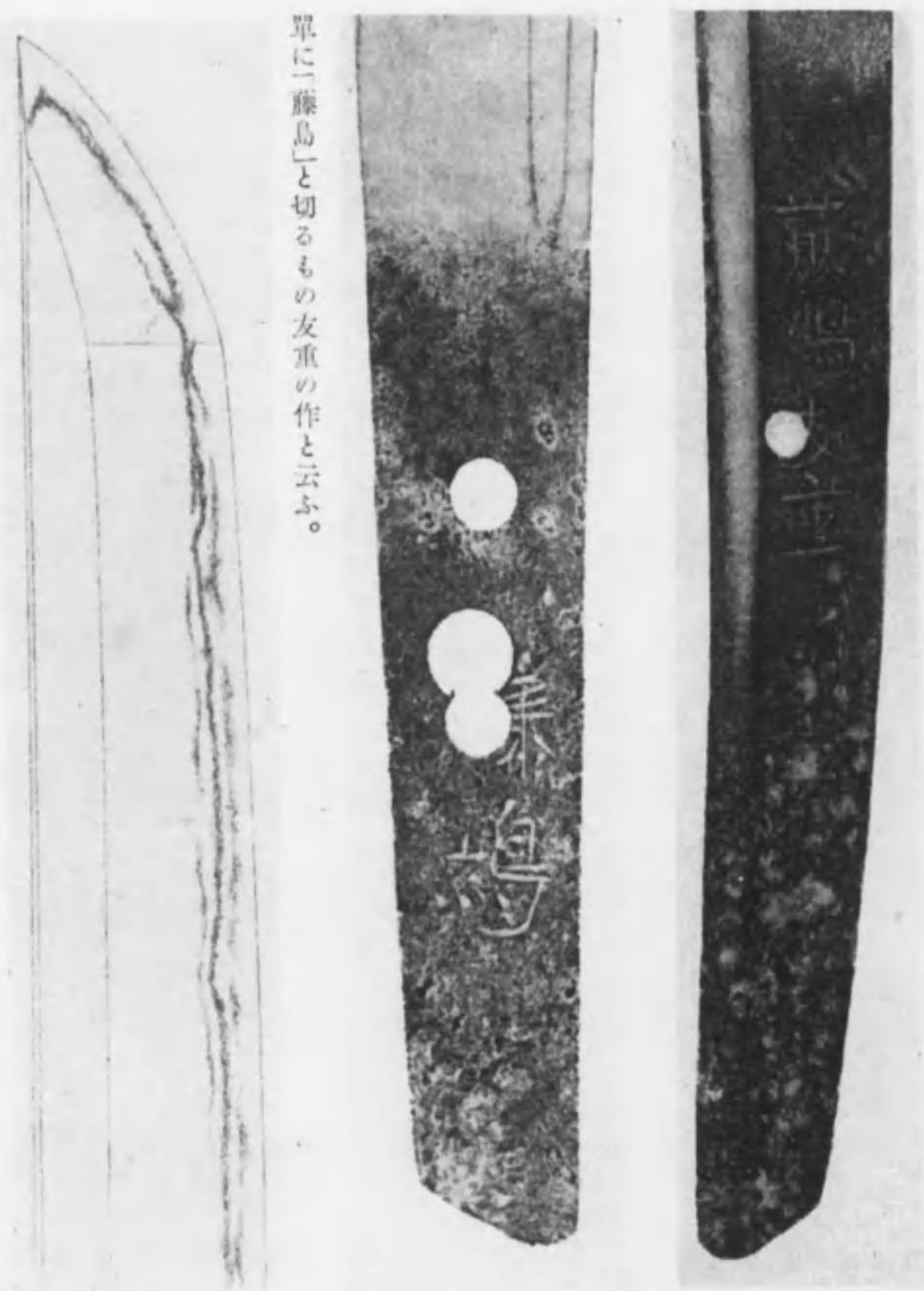
〔應永—加賀〕

中古刀 中上作

來國俊門と云はれたるも此の説現在では認められない、友重實在刀の最古く見ゆるものが時代應永頃である、作品姿良く刃小五ノ目にして備前物に近い出来である。  
刻銘「藤島友重」「友重」「賀州藤島友重」



應永頃の作品には脇差が多い、脇差はこの時代から積極的に造られた。(例、藤島友重、備前康光、盛光、長州顯國等)



單に「藤島」と切るもの友重の作と云ふ。

直はつれ

その噴進刃、二重刃などは大和、山城の刀工に見受ける出来である、末備前ものにもある、鑑定上大和に見へ又備前に見へるものは藤島であると。(類似工 長州顯國、宇多國宗一派)

【と】友重

【と】友重・俊次

◇友重 藤島

〔永正―加賀〕

末古刀 中上作

藤島友重二代目、作刀姿良く、その小五ノ目及五ノ目丁子は末備前に似る、但し幾分双文崩れ氣味の處が異なる。

刻銘「友重」「藤島」



◇俊次 青江

〔建曆―備中〕

古刀 上々作

青江守次子、三郎と稱し、頼の一字のみも銘すと云ふ、小亂又は小丁子にて古備前風の作品を造る。

刻銘「俊次」



◇俊長 甘呂

〔延文―近江〕

中古刀 上作

天九郎、高木貞宗門と云ふも研究の余地がある、江州蒲生郡住、後越後にて造る、時代を元享又は建武とするも押形の年號から見て時代延文が最適切である。

刻銘「江州甘呂俊長」「江州高木住俊長」

◇俊行 當麻

〔永仁―大和〕

古刀 上作

當麻國行弟である。

刻銘「大和國俊行」

◇利恒 古備前

〔元暦―備前〕

古刀 上々作

古備前正恒系、光恒子と云ふ、作品姿優美にして双文小亂鈍つく。

刻銘「利恒」



◇利延 三池

〔嘉保―筑後〕

元眞子、後豊州に住す、作品おそらく現在は見られないであらう。

刻銘「利延」

【と】俊長・俊行・利恒・利延

【と】 利光

◇ 利光 當麻

〔文安—大和〕  
當麻の系統と云ふも作風は同時代の手搔一派に近い。(業物)

刻銘「利光」

中古刀 中上作

三

◇ 利光 小反

〔至徳—備前〕  
長光系、俊光子と云ふ、作品李目肌、小五ノ目丁子に焼く總べて小模様である。

刻銘「備州長船利光」

中古刀 中上作



◇ 利光 長船

〔永享—備前〕  
小反利光子ならん、家助の作風に似る、祐光の父と云ふ。(業物)

刻銘「利光」「備州長船利光」

中古刀 中上作



◇ 倫國 來

〔元應—山城〕  
來國俊子、作品は妙い。

刻銘「來倫國」

中古刀 上作

◇ 倫光 長船

〔貞治—備前〕  
兼光子と云ひ、俗にリントモと稱せられる、康安、貞治、應安頃盛んに鍛刀せしものである、古刀銘盡大全に文保二年生、康暦元年死六十二歳とあるは注目に値する、作品刀もあるが短刀多く双文五ノ目丁子句締る。(良業物)

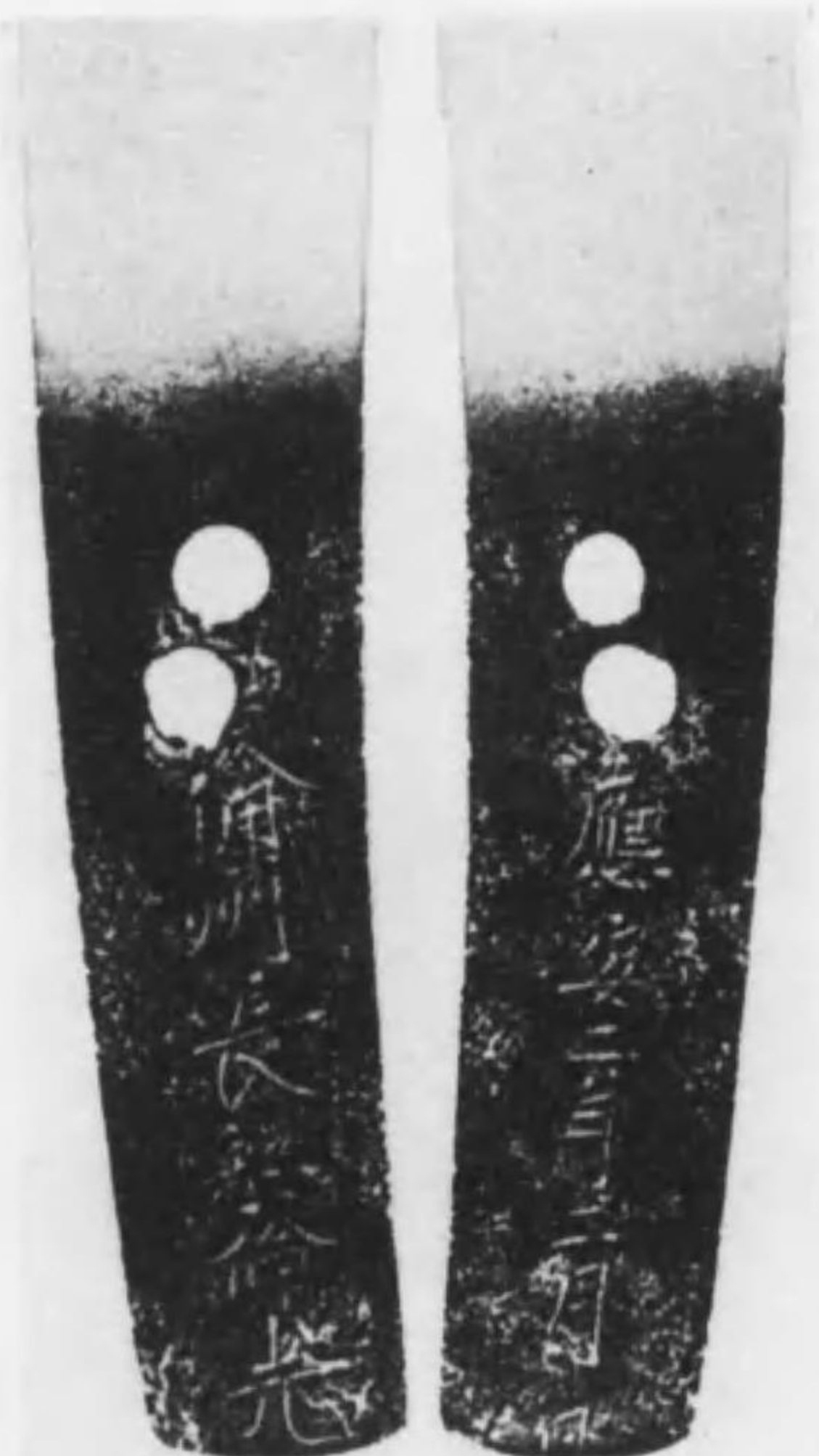
刻銘「備州長船倫光」

中古刀 上々作

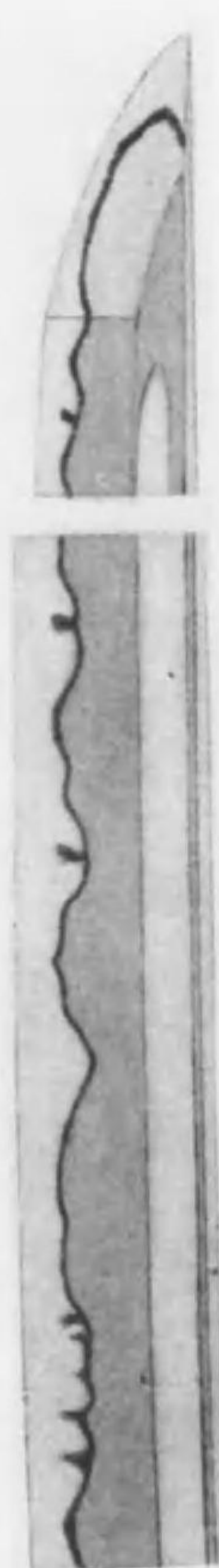


【と】 倫國・倫光

三



後期銘



五ノ目丁子

五ノ目丁子句締る、淋しき風これ兼光後期よりその一門に見られる作風である。

◇朝忠 古美作

〔元暦—美作〕

後鳥羽院御番鍛冶奉仕の一人と云ふ、備前にも住すと云ふが作品を見ない。

刻銘「朝忠」

◇朝助 一文字

〔建仁—備前〕

後鳥羽院御番鍛冶の一人と云ふ、作品が見られない。

刻銘「朝助」

◇具衡 岐阜

〔大永—美濃〕

末古刀 中上作

刻銘「濃州岐阜住具衡」

◇遠近 古備前

〔建久—備前〕

古刀 上々作

古備前正恒系、恒遠子、作品姿優しく双文小丁子足入り。

刻銘「遠近」



◇外藤 濃州

〔建武—美濃〕

中古刀 上作

古美濃刀工として著名、時代を随分古い所へ持つて行つた書もあるが實物に接すると精々延文、貞治頃である。

刻銘「外藤作」

或人曰く「君の見た外藤は銘鑑にある外藤ではない」と、かくして外藤の時代を異にし同銘別人が創作されるおそれがある。

◇道印 千手院

〔文明—美濃〕

末古刀 上作

赤坂國長の子と云ふ、時代文暦頃に道印、國長あるも、時代的に不審である。(業物)

刻銘「濃州千手院道印」

\* 虎明 高天神兼明參照

◇近包 古備前

〔正應—備前〕

古刀 上々作

古備前近房系、近則子と云ふ、時代的に見れば長光時代である。

刻銘「近包」



古備前、一文字、長船もの等の區別は余り明瞭でない、明瞭でないことが本當であるかも知れない、丁子龍が一文字の專賣ではなく、古備前にも、長船鍛冶にも立派な丁子がある、それは弘安、正應頃の備前鍛冶一体である。

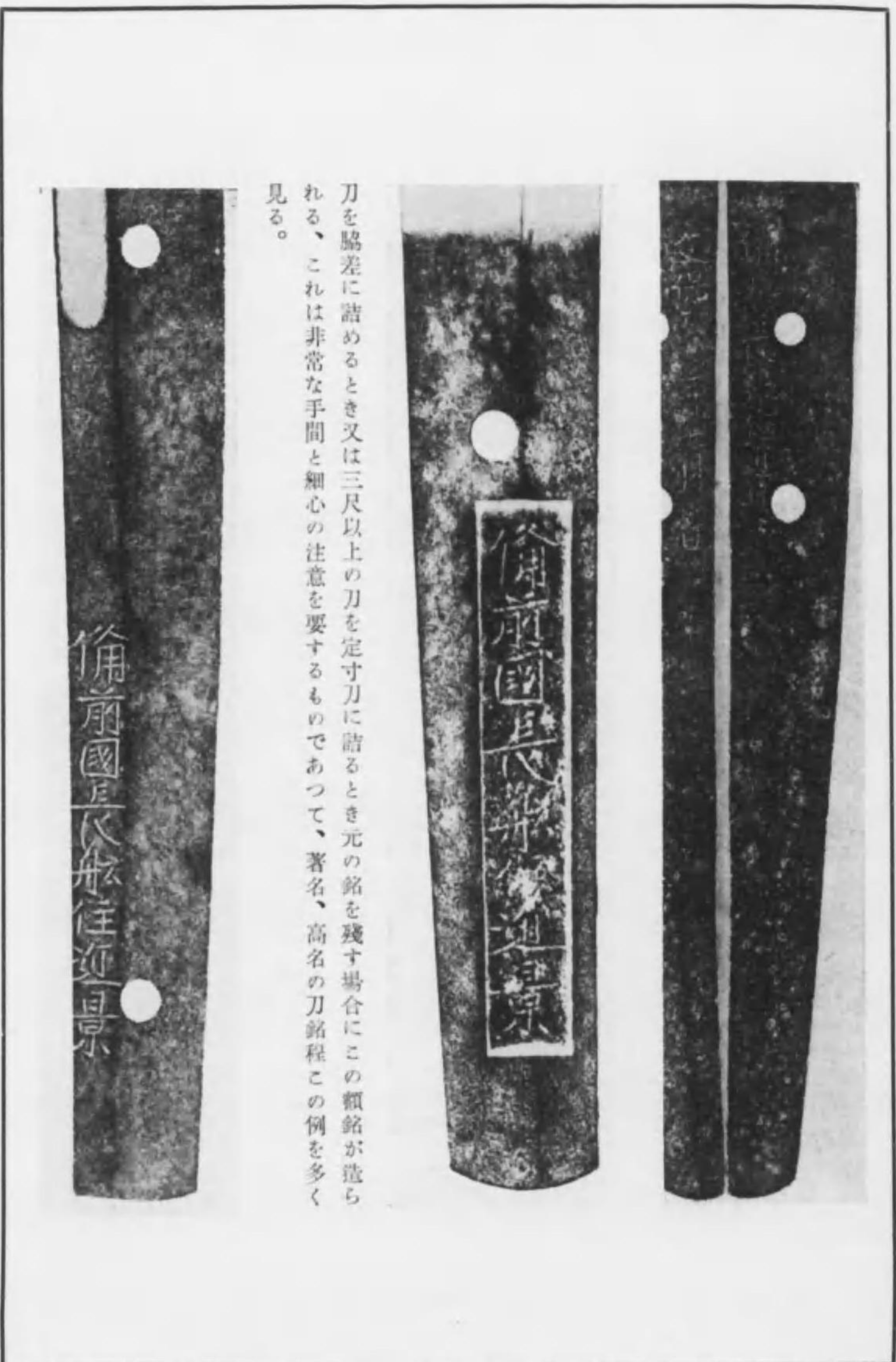
◇近景 長船

〔元應—備前〕

中古刀 上々作

三郎左衛門尉と稱し、近恒子、長光弟子となる、その作品文保から暦應頃まで見る、小丁子又は直足入り双文淋しく同門景光よりは寧ろ元重に似たる点が多い。(良業物)

刻銘「備前國長船住近景」 「備州長船住近景」



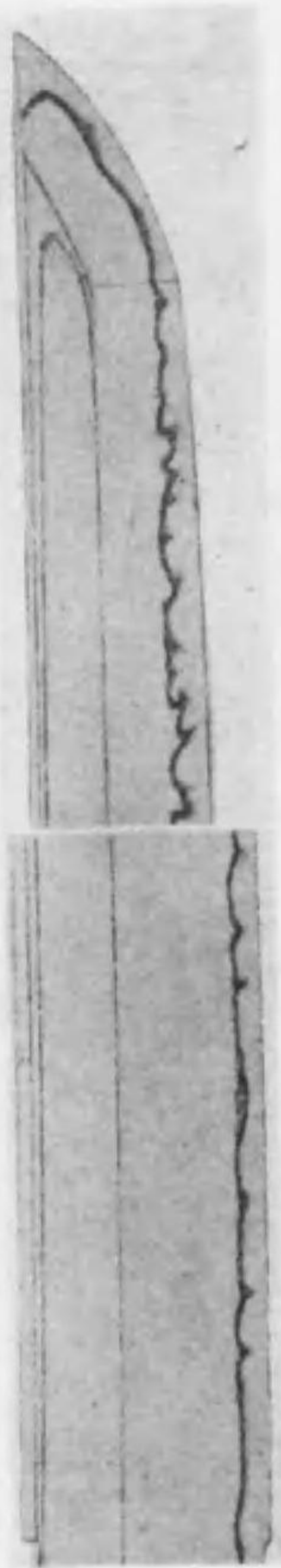
刀を脇差に詰めるとき又は三尺以上の刀を定寸刀に詰るとき元の銘を残す場合にこの類銘が造られる、これは非常な手間と細心の注意を要するものであつて、著名、高名の刀銘程この例を多く見る。







延武前後



直小丁子

この刃文はこの時代の仕儀である、ゆへにこの作風(匂)縮りたる直小丁子を具備したものはこの時代に相当した刀工と云へる、例へばこの時代の長船もの、正中一文字等又は鶴飼雲生、雲次などがあるがこれに近い刃文を焼いてある。

◇近村三條

〔長久―山城〕

古刀 上々作

三條吉家子、福岡一文字に同銘がある。

刻銘「近村」

◇近則月山

〔永正―出羽〕

末古刀 中上作

作風末備前勝光の如きものあり、月山と二字に切る刀工に比して精錬された技術をもつ。

刻銘「出羽國住人月山近則」

◇周重下原

〔天文―武藏〕

末古刀 中上作

山本氏、武藏恩方村に住し、下原鍛冶の初祖をなす。

刻銘「下原住周重」

◇了戒山城

〔永仁―山城〕

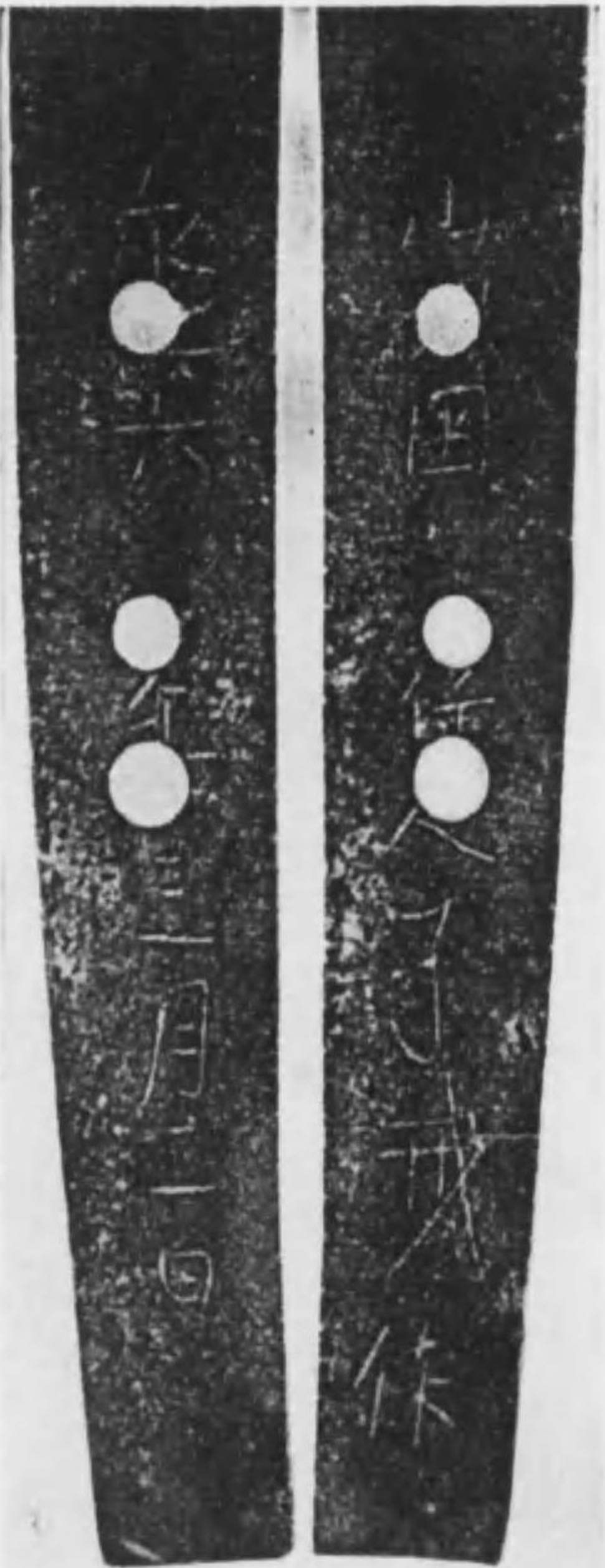
古刀 上作

來國俊十七歳の子と傳へらる、作銘に九郎右衛門と切つたものがある、綾小路定利弟子と云ひ、來光重と切るもの同人なりと、もし然れば作品時代から見ても光重は晩年のものである、作品太刀、無反短刀あり刃文直小足入りが多い。(大業物)

刻銘「了戒」「山城國住人了戒作」



刀劍の製作と云ふものは一個人では出来難い、助手即ち協力者があつて速やかに造られる、要するに表面に立つもの、裏面に立つものがある、表面に立つものは大部分嫡子系のもものが多く、弟子筋は裏面に立つものが多い、かくして表面に立つものは一個人の能力以上の作品を世に現す、裏面のものは銘鑑に名を留むのみにて終る場合の多いことが考へられる。



右了戒に三ツの目釘穴がある、内一生目釘穴は中央である、銘を先に切り後から穴を開けることを本則とする、了戒もその例である、國と住、六と年の間が特別に開いてゐるのは後から開ける目釘穴を豫算に入れて刻銘した爲めである。



◇良西 筑州

〔文曆—筑前〕

筑前高綱子、是介とも云ふ、一説入西同人とも。

刻銘「良西」

古刀 上作

◇力王 千手院

〔承元—大和〕

千手院金王子、力直とも銘すと云ふ、その作刀反高く双文直足入又は小亂がある、短刀もある、時代承元とあるが正應時代より古くは見へない。

刻銘「力王」「大和國住人力王」

古刀 上々作



今日傳はる妻の短刀の起りは弘安頃以降に涉つてゐる、力王もその範圍である。

◇勝家 加州

〔元龜—加賀〕

元祖は越前來國安の流れと云ふも實際はこの元龜、天正の頃のものが多い、作刀身巾あり姿良い、双文五ノ目丁子末備前の如くなるも心持崩れる風がある。(良業物)

刻銘「勝家」

末古刀 中作





◇ 勝貞 雲州

〔永祿―出雲〕

末古刀 中作

刻銘「雲州住勝貞」「勝貞」

◇ 勝光 加州

〔天正―加賀〕

末古刀 中作

勝光と二字、一見末備前風、幾分身巾の廣いものもある。  
刻銘「勝光」



◇ 勝光 右京亮

〔文明―備前〕

末古刀 最上作

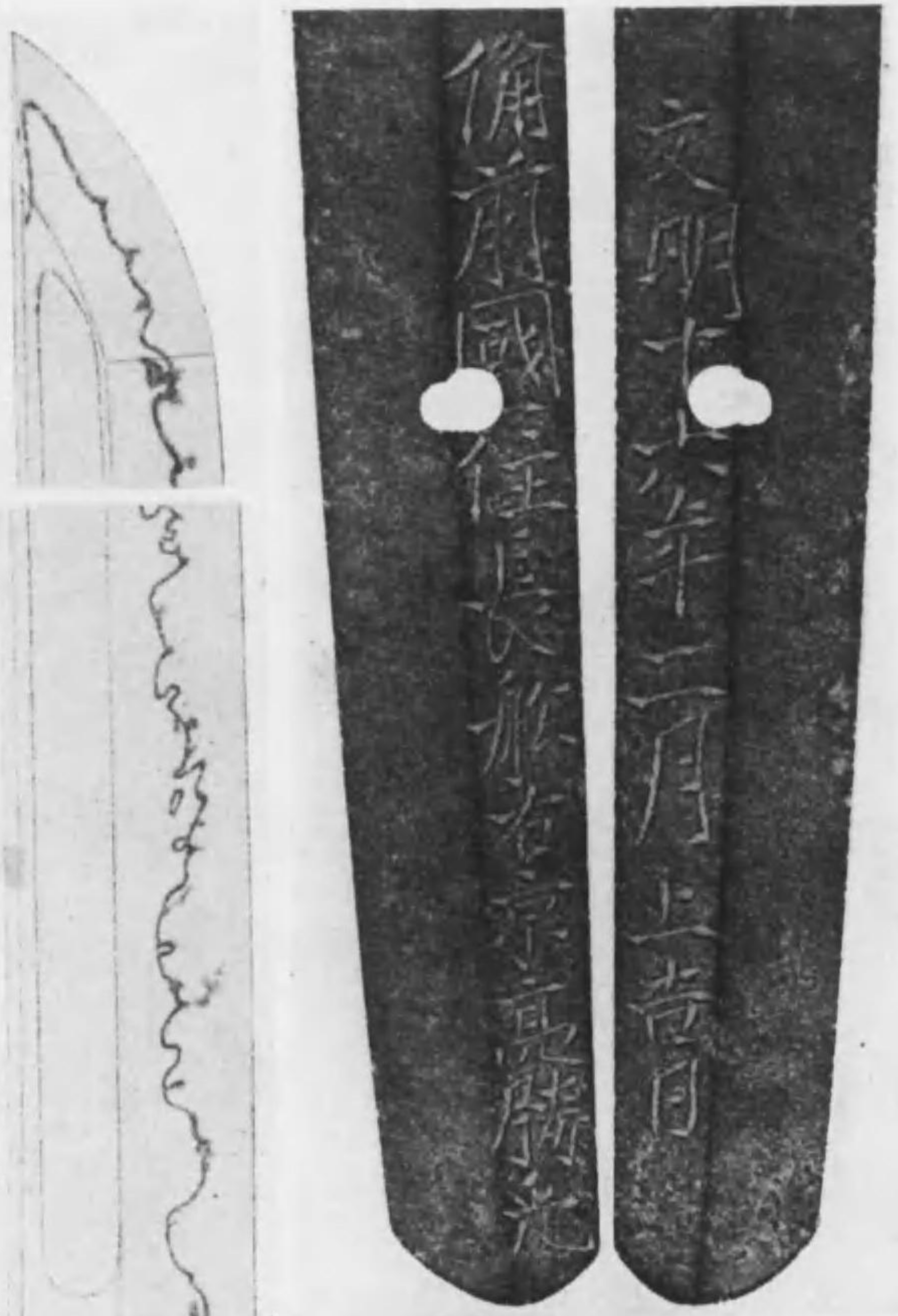
右衛門尉勝光子と云ふ、右京亮勝光と稱し文明から延徳にかけてその作を見る、美作  
兒島、備中草壁等諸方にて造る、弟左京進宗光との合作あり、双文五ノ目丁子多く、  
梵字、刻字、素劍等の彫物を見る。(大業物)  
刻銘「備州長船勝光」「備州長船右京亮勝光」「備前國住長船右京亮勝光」



この刀は俗名(右京亮)が添記なくも快心作たることは銘字を通じて判明せられる、この反對に四十一頁の明應勝光は仕入れ打である、それは銘字の勢が過ぎ稍亂暴に近い。

天下 貴萬福 皆令 満足  
天下 泰平 國土 安穩

昔の文字は非常に立派なものが多く、とりわけ右京亮にはそれがある、こゝに掲げた文字は刀身にある彫物にて、その文字及彫刻も右京亮自身のものであらう。



五ノ目丁子

則光、祐光等が文安から寛正頃へかけて盛んに鍛刀してゐた、文明頃に至り右京亮勝光、彦兵衛祐定等が興り、この頃が末備前鍛冶發達の先驅をなしたのである、思ふに應仁、文明の亂などが刀工の隆盛を導いたのであらう。

◇勝光 次郎左衛門尉

〔大永 備前〕

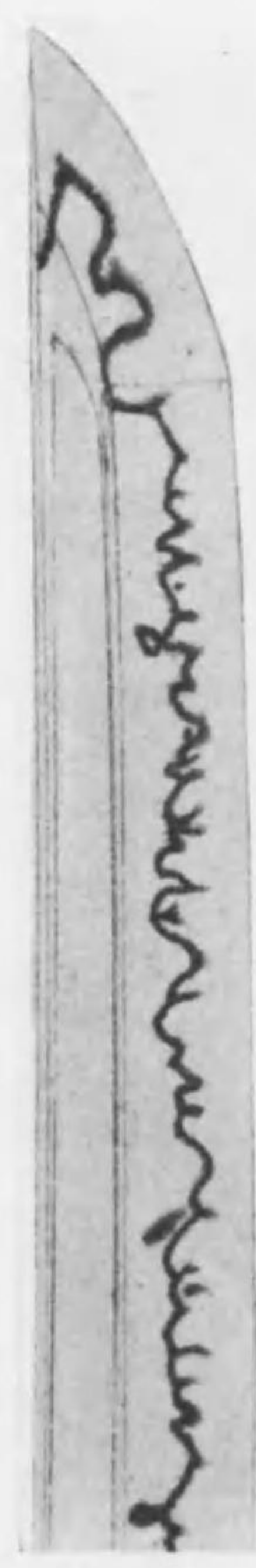
末古刀 最上作

右京亮勝光孫と云ふも子ならん、(時代的に、そう考へることが出来る)、父勝光没後に叔父左京進宗光の協力を得たるものゝ如く、初期永正五年の頃左京進との合作を見る、この銘は宗光が之を切り、永正八年の作品に獨力自作をなしたるもの有り、作風父勝光に比して双文五ノ目丁子細かくなる、又劍卷龍、獨銚劍、梵字、刻字等の彫刻がある。(良業物)

刻銘「備前國住長船次郎左衛門尉勝光」「備前國住長船勝光作」「備前國住長船二郎左衛門尉勝光」

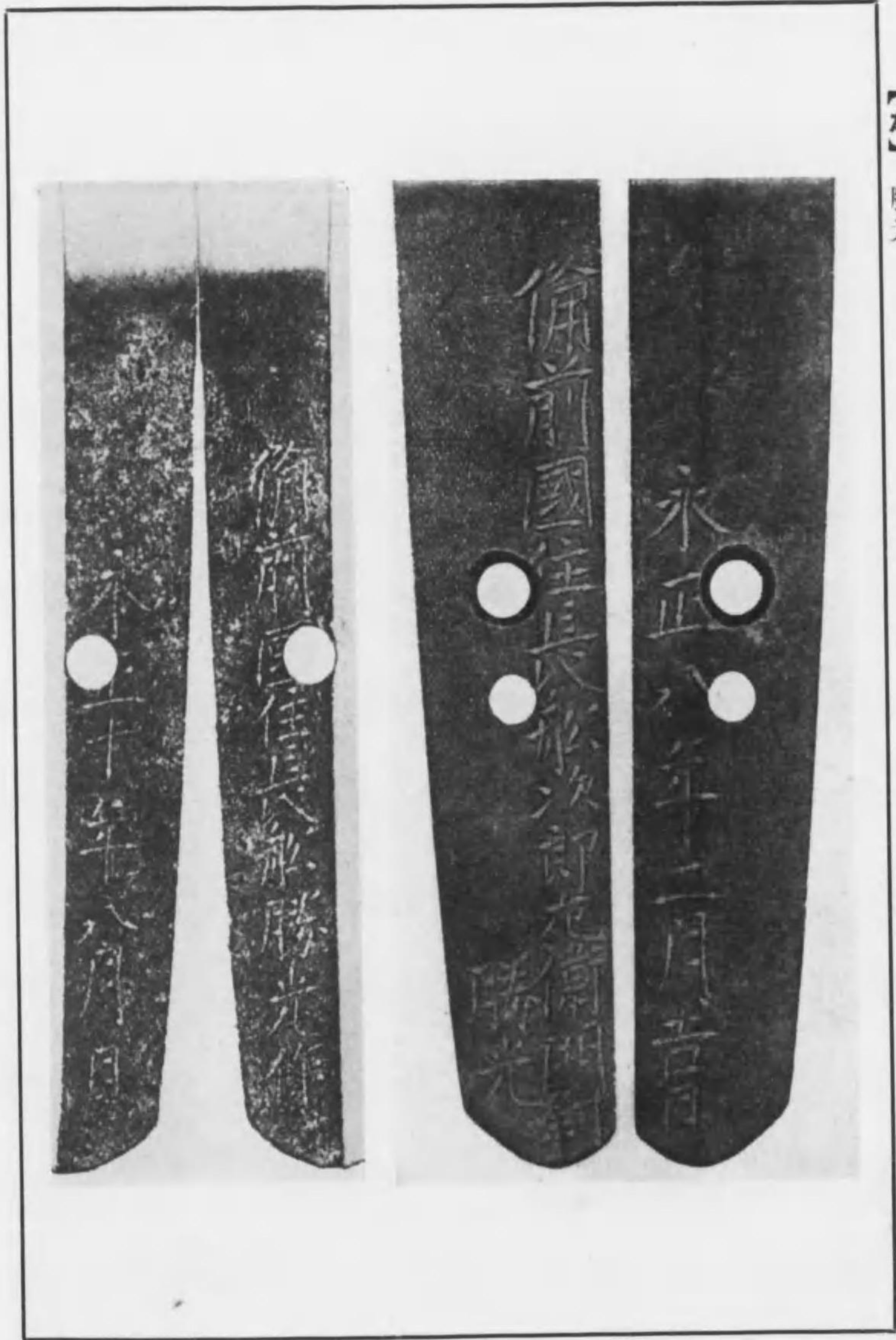


大量打



五ノ目小  
丁子

次郎左衛門尉に五ノ目小丁子が多い、これも末備前全体に及ぶ作風であらう、地刃の非常に強いもの即ち健全なものと地刃の弱いものがある。



合作（全部  
次郎左衛門  
の切銘）

親次郎左衛門尉と子修理亮勝光との合作である。



文明頃から始まる備前刀工に彫刻入りの刀が比較多い、自身彫か、別に彫物師があつたかと云ふ問題であるが、私は刀工にして彫物の余技をも心得てゐたものと考えへる。

【か】 勝光・包俊

◇ 勝光修理亮

〔天文〕備前

末古刀 上作

次郎左衛門尉勝光子、父との合作がある。  
刻銘「備前國住長船修理亮勝光作」

◇ 勝光彦兵衛尉

〔大永〕備前

末古刀 上作

右京亮次郎左衛門を正統とする勝光の一族である。(業物)

刻銘「備前國長船彦兵衛尉勝光」 「備州長船勝光」

◇ 勝光太郎兵衛尉

〔永祿〕備前

末古刀 上作

正統勝光の一族である。

刻銘「備州長船勝光」 「備州長船太郎兵衛尉勝光」

◇ 包俊手搔

〔享徳〕大和

中古刀 中上作

手搔一派、短刀のみ多く造る、双文直双など。(業物)

刻銘「包俊」



大和鍛冶は美濃鍛冶と同様年號入りが少いため推定時代が概して古くなつてゐる、これは古來「古きもの程貴ばれた」觀念に大いに支配されたのであらうと思ふ。

◇ 包近古備前

〔承久〕備前

古刀 上々作

後鳥羽院御番鍛冶奉仕の一人と云ふ、作品姿優しく双文小亂鈍崩れる。

刻銘「包近」

◇ 包吉手搔

〔永和〕大和

中古刀 上作

手搔包永弟子、文珠四郎と稱す、包次とも打と云ふ。(大業物)

刻銘「包吉」

◇ 包吉手搔

〔明應〕大和

末古刀 上作

前項包吉の續きならん、世上包吉作品の多くは本工に屬すと思はる。

刻銘「包吉」 「藤原包吉作」



◇ 包次手搔

〔建武〕大和

中古刀 中上作

時代手搔一派初期に當り、後包吉と銘すと云ふ、作品無反短刀などあり包永と作風が近す。

刻銘「包次」

【か】 包近・包吉・包次

◇包次青江

〔建曆—備中〕

古刀 上々作

守次子、銘太く、作風は古備前のやうである。

刻銘「包次」

◇包永手搔初代

〔正應—大和〕

古刀 上々作

手搔の名稱に付て内田疎天氏は「古書には天蓋、轉礎、輓礎、手貝とも書いてある、奈良東大寺の西大門を輓礎門と云ひ、其門前に住したから訛つて手搔派と云ふ、もとは東大寺所屬の劍工團であらう」と云はれてゐる、包永は手搔一派の祖にして平三郎と稱す、古書は例の如く時代釣上げが感じられる、包永の時代は先づ備前で云へば景光時代であらう、作品鎬高いものもあつてそれは特に鎬巾が廣い、地鐵板目柃交り、刃文は直にして鈍崩れる、又五ノ目足入り所々揃ひたるものなどあり玉垣刃との別稱がある、銚子焼詰、砂流交りたるものもある。(大業物)

刻銘「包永」



包永に鎬の巾廣いものがある、これは鎬が高いために鎬巾の原型が維持されたと云へよう、刀は砥數に當る程鎬巾が狭まつて行く、其が鎬の低いもの程著しい、鎬(鎬筋)の高いものは鎬が移動し難いから原型のままの廣さで今日に傳はる。



右包永は額銘である。



包永が何れも磨上つてゐることは包永の原寸が一樣に長かつた爲めである。



通説包永は初代貞應、貳代正應、參代建武と同銘が三代續くとなつてゐるが、實物に因ると二字銘の刀(右三圖)と貞和頃の年號入り短刀(四八頁參照)との二種の様である。



直小亂

小亂の裡に喰違刃ある刃文が地鐵に關係してゐることは云ふ迄もない、即ち喰違刃は地鐵が柃目であるためにその肌目に添つて生ずる、これは包永初め大和ものに多く見受ける。

◇包永手搔貳代

〔貞和—大和〕

中古刀上々作

從來の刀劍書が初代包永の時代と云ふものを裏年號を以て決定したのではない、而して貳代包永と稱せられるものには貞和年號入りの無反短刀作品が多い。(良業物)

刻銘「包永」



右銘字は「貞和〇年五月日包永」この作に偽物の有るのが注目される。

◇包永末

〔大永—大和〕

末古刀中作

古包永の佛は微塵もない、末手搔の風情を見るのみ。

刻銘「包永」



この末包永は他のこの時代の手搔ものより出来劣る、銘字に於ても趣味多分にして「作が若いから代下り」と簡単に云へないものである。

◇包長雲林院

〔天文—伊勢〕

末古刀上作

本國大和手搔、後離れて伊勢雲林院に住す、作風大体同時代の手搔物に似る。

刻銘「勢州雲林院住包長」「包長」



◇包貞手搔

〔文明—大和〕

末古刀上作

手搔一派、この派の隆盛は文明頃からであらう、作品短刀が多く不動尊の彫刻など。

刻銘「包貞」





不動尊などの小締りした彫物がある、包貞自身のものであらう、この時代は他國でもこの彫刻と云ふ業に精通してゐる者が多い、目的は神佛を刀に安置する觀念であらう。

◇包貞南都

手搔包貞の子ならんか。

〔永正—大和〕

末古刀 中上作

刻銘「南都藤原住包貞」「包貞」



◇包貞手搔

〔永享—大和〕

中古刀 中上作

包長子又は包吉弟子と云ふ、包貞と共に榮ゆ、作品短刀が多く、白けうつりがある、細直に砂流交り、又は小足入り。

刻銘「包貞」



◇包貞南都

〔享祿—大和〕

末古刀 中上作

手搔包貞の子ならんか、和泉にても造る、作品手搔包貞に似る。

刻銘「南都住藤原包貞」「包貞」「泉州住包貞作」



南都から和泉へと需要の地へ移りし事實を作品によつて窺ふことが出来る、斯く刀工が轉地を行ふ例はこの時代以降に多く、古い時代には余りこの居住地を替へなかつた様である。



一刀書に大和包真と泉州包真と別人に載録してあるために別人となつてゐるが、兩者の銘比較に依つて同人たる事が明白である。

◇包清手搔

〔永正〕大和

作品刀もあり、直双尋常なるもの。

刻銘「包清」



末古刀 上作

◇包行手搔

〔永享〕大和

手搔包光子と云ふ、作品短刀多く、寸延びたるものもある。

刻銘「包行」



中古刀 中上作

◇包平古備前

〔永延〕備前

古刀 最上作

助平、高平と共に備前三平の名がある、後河内へ移る、一説に河内秦包平とも切ると云ふ、時代永延とされるがそんな古いものではないと思はれる、作品太刀姿優しく反高い、双文小亂鏝つく。

刻銘「備前國包平作」「包平」



左の中心の型を雉子股と云ふ、双棟の部分が外装の金具と一致しないために摺られたもので後天的の場合もある、決して作者自身の好みから生れた中心ではない。

◇包平 秦

〔不明—河内〕

河内國秦包平と切るものが往々にしてあるが正作と思はれない。

刻銘「河内國秦包平」



◇包久 手搔

〔文明—大和〕

手搔一派、作品短刀多く刀は鈔い、双文は匂締りたる直ほつれ白けうつりなどがある。

(良業物)

刻銘「大和國住藤原包久作」



◇包元 手搔

〔元龜—大和〕

末手搔一派ならんと思はれる。

刻銘「包元」「包元作」

末古刀 中上作

◇包守 手搔

〔元龜—大和〕

刻銘「包守」

末古刀 上作

◇包氏 大和志津

〔延文—大和〕

古刀銘盡大全には後美濃志津住兼氏と打、弘安七生康永三死六十歳とあるが、光山押形にその後の年代に於ける觀應元年と延文〇年の年號入り包氏銘の二刀がある、又兼氏銘に康永〇年の作がある、「大全」記載の生年没年が信じられるもの、信じられぬとがある、この場合私は包氏、兼氏は之を別人と見たい、……包氏は包永の一派であらう、作品は稀である、先反巾廣の短刀を造つたのもその時代が觀應延文頃であるため、時代の一般的要求になるものであると思はれる。

中古刀 上々作

◇兼家 關

〔永祿—美濃〕

末關の一派である、作品短刀が多い。

刻銘「兼家」

末古刀 中作



【か】 兼岩・兼春・兼辰・兼俊

五

◇兼岩關

〔天正—美濃〕

末古刀 中作

刻銘「兼岩」

◇兼春關

〔弘治—美濃〕

末古刀 中作

末關一派の末、作品地拵目、鍛粗なるものが多い、双文匂出来小亂尖り双を交へる。  
刻銘「兼春」



◇兼辰關

〔永祿—美濃〕

末古刀 中作

刻銘「濃州關住兼辰」

◇兼俊直江志津

〔應安—美濃〕

中古刀 上作

志津三郎兼氏弟子、時代建武と云ふが、師の兼氏がその建武以後の康永であるから、順序としては本工時代應安頃と想像される、さて本工の在銘が一本も見えない、無銘にて直江志津と鑑定が付たものを澤山見るが疑はしいものが多い、しかし延文、貞治頃に多く見る、三尺以上の豪刀のみを多く造つたと考へれば兼俊無銘は肯定出来得る。  
刻銘「兼俊」

◇兼利關

〔天文—美濃〕

末古刀 中作

直江志津の系統であるがこの時代となれば末關の作風と變らない。

刻銘「兼利」

◇兼友直江志津

〔應安—美濃〕

中古刀 上々作

志津兼氏弟子、豪刀又は先反短刀のみが稀れにある、作品は極めて妙い。(大業物)

刻銘「兼友」

◇兼友關

〔寛正—美濃〕

末古刀 中上作

時代寛正頃かと推定せられる、直江兼友の續きならんか、兼國等と共に末關一派の原流をなす、身巾の優しいものが多い、双文は小五ノ目亂。

刻銘「兼友」



◇兼友關

〔大永—美濃〕

末古刀 中作

純然たる末關の作柄、短刀が多い。(業物)

刻銘「關住兼友作」

【か】 兼利・兼友

五

【か】 兼音・兼若

◇ 兼音 衛門尉

〔文明―美濃〕

兼國の子と云ふ、末關初期に活躍せる刀工の一人である、双文直刃など。  
刻銘「兼音」「濃州關住衛門尉兼音」

末古刀 中上作

五



七十四歳の作

◇ 兼若 四方助

〔天正―美濃〕

時代天正前後頃の人、志津三郎兼氏の末と云ふ、美濃關に住し、後尾州犬山に移住す、加州甚六兼若の父親、作品若狭守氏房などに近い。(大業物)  
刻銘「兼若」

末古刀 中上作



【か】 兼音・兼若

◇ 兼涌 關

〔元龜―美濃〕

末關末期の刀工、作風純然たる末關一門の出来、兼房風の短刀が多い。  
刻銘「兼涌」

末古刀 中作



◇ 兼門 關

〔永祿―美濃〕

末關末期、作品先反短刀、双文小亂匂縮り尖刃を見せる、地蔵鉈子に成る、兼門のみならず一体に末關にはこの地蔵鉈子が多い。  
刻銘「兼門」「濃州關住兼門作」

末古刀 中作



末關末期、即ち兼房、兼景、兼春時代は末關の一番發達した時代である、しかし刀の作品が少く先反短刀の多いことは残存せる先反短刀の不足を補つたためであらう。

【か】 兼涌・兼門

五九

◇ 兼方 關

〔永正―美濃〕

末古刀 中作

末關中期の刀工、後甲州へ移りしかと思はれる節がある、作風兼常の如くである。  
刻銘「濃州關住兼方作」



◇ 兼景 小十郎

〔天正―美濃〕

末古刀 中作

末關末期の刀工、後作州へ移りしものと思はれる。  
刻銘「濃州關之住兼景」「兼景」「濃州岐阜兼景作」



◇ 兼吉 善定

〔文明―美濃〕

末古刀 中上作

古來の手搔包吉の子と云ふが「末關初期」に興りし刀工である、短刀の作多く双文句縮りたる直双、白けうつりあるものが多い。(業物)  
刻銘「兼吉」「兼吉作」



末關初期とこゝに云ふは文明から明應頃迄の時代である、兼國、兼吉、初代兼定、兼延、それに兼吉等がその末關初期の刀工である、末關中期(和泉守兼定、孫六兼元等)に於けると同様に良工が多くよい作品がある。

◇ 兼義 關

刻銘「兼義」

〔永正―美濃〕

末古刀 中作

◇ 兼善 關

刻銘「兼善」

〔天文―美濃〕

末古刀 中作

◇ 兼谷 善定

〔明應―美濃〕

末古刀 中上作

善定兼吉子、末關初期末期の一派に比して流石に上手である。(業物)  
刻銘「濃州關住兼谷」「兼谷」

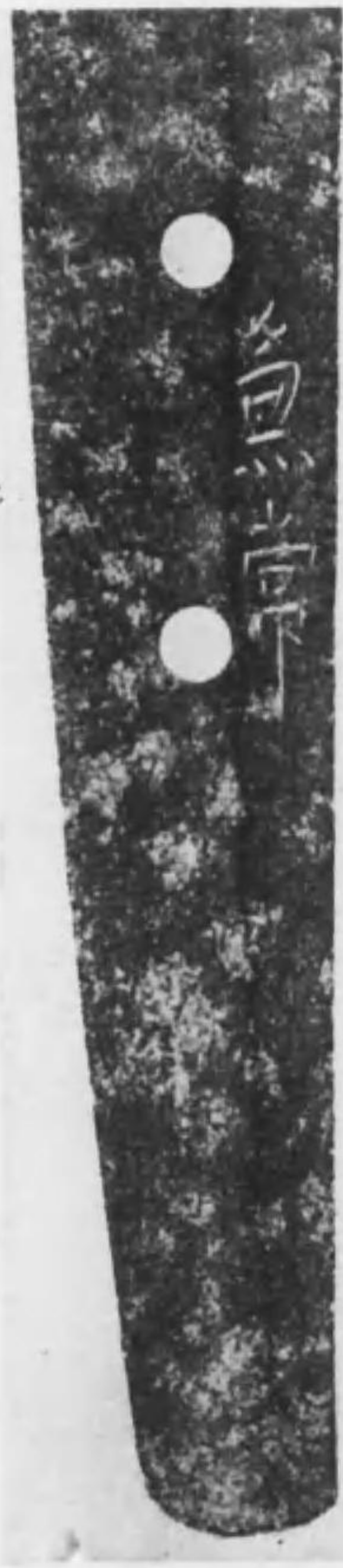
◇ 兼常關

〔永正—美濃〕

末古刀 中上作

關兼常の子、兼元、兼定に次ぐ末關中期に於ける良工、直刃が得意である。(業物)

刻銘「兼常」「濃州住兼常作」



末關中期と云ふは永正、天文頃の時代を指す、本工兼常、孫六兼元、兼定(之定)等これを代表する、優秀なる刀工の輩出したる時代である。

他國に於ても永正、天文頃は同様優秀なる刀工が現れてゐる、こゝにそれを上げれば山城の平安城長吉、大和の包貞、包貞、伊勢の村正、備前の與三左衛門祐定、次郎左衛門勝光、越中の宇多國宗、豊後の平長盛、相模の康春、綱廣、駿河の義助等がある。

直五ノ目

◇ 兼常關

〔天正—美濃〕

末古刀 中作

末關獨特の刃文であるが同時代の伊勢正重等、相州康春等、又は下原康重等にもこれがある、何れも先反短刀に多く見受ける。

作中直刃、尾張に移りし政常の前銘ならんか。

刻銘「濃州關住兼常作」「兼常」



◇ 兼綱石州

〔不明—石見〕

直綱弟と云ふ、作品を見ないが周囲の事情から見ると建武時代のものではなく、もつと時代は下ると思ふ。(業物)

刻銘「兼綱」「石州出羽兼綱作」

◇ 兼綱 初代

〔明應—美濃〕

末關初期時代の刀工、作品に大和風の古雅な直刃がある。  
刻銘「兼綱作」

末古刀 中上作



◇ 兼綱 關貳代

〔天文—美濃〕

作品短刀多く刀もある。五ノ目尖刃等すべて末關の作柄を具備する。  
刻銘「美濃關住兼綱」「兼綱」

末古刀 中作



◇ 兼次 直江志津

〔應安—美濃〕

志津兼氏子、たま〜短刀がある、直江志津中では作品の有る方である。  
刻銘「兼次」

中古刀 上作



短刀に無反と先反がある、前者は建武頃迄造られ後者は吉野朝以降に造られる、皆反は無反短刀から變化した後天的のもので共に身巾狭目の所謂山城傳である、又先反は寸が延び巾も廣くなつてゐて所謂相州傳である、この兩者の造込みの變化も以上の如く時代的に見ることが出来る、ゆへに建武以前から出發した作者は無反から先反へ移つてゐる一例として來國光、志津兼氏、長船兼光、元重等。

◇ 兼辻 關

〔弘治—美濃〕

末關末期の刀工、作品短刀が多い。(業物)  
刻銘「濃州關住兼辻」「兼辻」

末古刀 中作

◇ 兼榮 關

〔永祿—美濃〕

刻銘「兼榮」

末古刀 中作

◇ 兼長 長船

〔貞治—備前〕

長義系、作品中廣にして重ね薄、寸延先反短刀多く、刃文五ノ目丁子崩れたる異風のもの。(大業物)  
刻銘「備州長船住兼長」

中古刀 上作





◇ 兼 永 五 條

當時の多くの備前刀工は北朝方に終始したが長義一門が南朝年號を使つてゐる、それだけに作風と銘字が備前刀工と異つた感を受ける、長義一門も正平終り頃から北朝年號に變つてゐる、これは長義一門の問題ではなく當時の大勢が北朝に移つて行くことを物語るものと云へるであらう。

〔長元―山城〕

古刀 最上作

三條有國子、山城五條住人、時代長元と云ふも古備前物と同じ時代と思はれる、作品姿優しき太刀多く地板目、双文小亂銚付足入り。

刻銘「兼永」

◇ 兼 永 關

作柄末關一流、關兼光の子、作品直双又は五ノ目亂双が有る。

〔天文―美濃〕

末古刀 中作

刻銘「兼永」



【か】 兼永・兼氏

◇ 兼永 雲州

〔天正―出雲〕

末古刀 中作

生國美濃、後出雲に移りしならん、作柄末關同様。

刻銘「雲州住兼永」「兼永」



◇ 兼氏 志津三郎

〔康永―美濃〕

中古刀 最上作

大和包氏とは同人に非ざる点「包氏」の項に説いた、志津三郎と稱し正宗十哲の一人と云へる説は疑はしい、時代建武と云ふも裏銘に唯一「康永年號」が見られる、又この短刀作品が巾ある先反りの造込みから判断して、年代は康永以降に多く作品が造られたと考へる、刀もあり、地板目、双文五ノ目失りたる双、砂流も交るが古書に喧傳せられる如き華やかなるものではない、兼氏に貳代有りとの説は信ぜられない。(大業物)

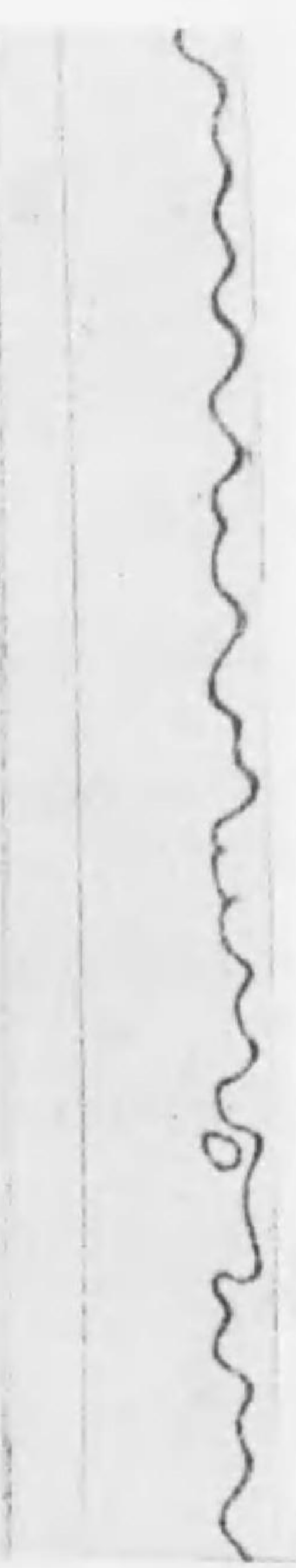
刻銘「兼氏」「美濃國住兼氏」「美濃國住人兼氏」



六



昔聞いた話「刀を強く物に打込んだ所が上みには少しも異常を認めなかつたが、柄木の潰れしを覺へた、中心を外して見ると、中心双棟に刺が這入つて少し口が開いてゐた、即ち中心の刃切れである、大体この中心の銘字が太く大きく中心一杯に取ひろげられてあつて、「双棟の刺れ」もその銘の横線の二つへ這入り込んでゐたのを發見した、銘は中心の刃切を誘導する場合もあるから刀工もこの点に留意する必要があるだらう」とこの点から考へて見て吉野朝時代に於ける兼氏、及兼氏一門、大左、長義、長義一門の細銘や兼光一門、小反備前の小銘は既にそうした点に注意を拂つた銘であると考へることが出来る、又總じて業物の發達した時代である。



所謂相州傳は吉野朝時代、全國に起つた必要上の作風なのである、要は造込みの變化であつて即ち「巾を廣目、寸長めに、重ねは薄目」に造ることは鍛冶修得者にあつては極めて容易であらう。

【か】 兼氏

六九

五ノ目



五ノ目亂

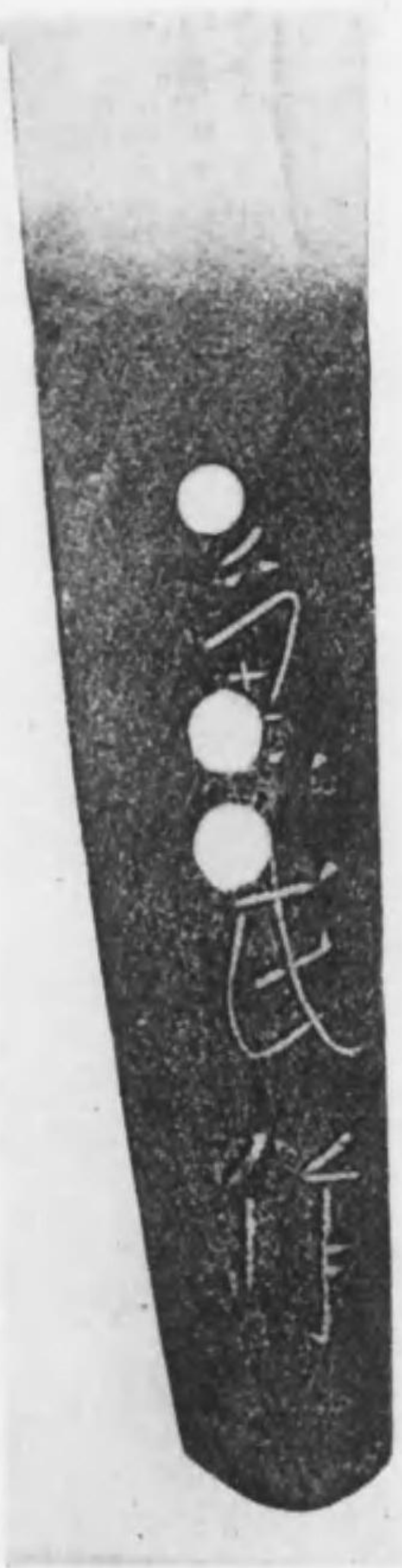
五ノ目亂尖り匂締り刃文大模様である、末關初期、中期にこの作風見られるも小模様となる。

◇兼氏赤坂

〔永正―美濃〕

末古刀 中上作

赤坂千手院一派、兼氏とあるも志津兼氏からの連続ではない。(業物)  
刻銘「兼氏作」



美濃鍛冶にあつては延文、貞治の頃志津三郎兼氏等起りて盛んに鍛刀した、その後應永時代から應仁頃迄の刀工は余り振はなかつた、文明頃から兼吉、兼定、兼延等が起り再び隆盛を見るに至つた、元龜、天正には非常な勢ひをもつて美濃刀工の大發達を見た、これを歴史の上から見ると兼氏は吉野朝時代、兼吉等は應仁の亂以降の發達、元龜、天正は戰國時代。

◇兼氏末

〔天正―美濃〕

末古刀 中作

赤坂千手院の一派と云ふ、志津三郎兼氏の名聲が末關刀工をしてこの名を復活せしめたと考へられる、作品刀もあり、短刀は先反短刀にて、五ノ目亂匂出來締りて所謂相傳上位を偲ばしむ。

刻銘「兼氏」



◇兼則關

〔永正―美濃〕

末古刀 中作

末關中期の刀工、兼房に似、兼房に優る。  
刻銘「兼則」



【か】 兼則・兼法

◇ 兼則 關

〔天正—美濃〕

末關末期、越後へ移りたるは本工ならんか。  
刻銘「兼則」「越後國春日住兼則」



末古刀 中作

三

◇ 兼法 關

〔文祿—美濃〕

兼常子とも又は孫とも云ふ、越前兼法の父である。(良業物)  
刻銘「兼法作」



末古刀 中作

末關と單に輕視される美濃關刀工が古刀末期から新刀初期にかけて各地へ移り新刀鍛冶の源となつたことを考へれば美濃鍛冶の意義は非常に深い。

◇ 兼信 關

〔文明—美濃〕

◇ 兼延 志賀

〔明應—尾張〕

尾州志賀住(現西春日井郡金城村と云ふ)、美濃より此の地に移る故志賀關と稱せられる、作柄矢筈亂又は直、直に腰刃などあり末關一門の風なれども出來其等に優る。  
刻銘「兼延」



末古刀 中作

末古刀 上作



初め

後ち

【か】 兼信・兼延

三

【か】 兼國・兼宿

◇ 兼國關

〔永享―美濃〕

中古刀 中上作

この頃美濃ものは兼吉を初めとし木工并びに兼友など、質に於てよいものがある、併し數に於て振はない。

刻銘「兼國」

◇ 兼國關

〔弘治―美濃〕

末古刀 中上作

末關一派の作風、一見大和風の細直刃などもある、總じて兼國の作品は尠い。

刻銘「兼國」



裏の「慶應二年八月藤原是一磨上之」は藤原是一が兼國の刀を拵上げたときそれを記したもので藤原是一は運壽是一のことである。

◇ 兼宿關

〔天文―美濃〕

末古刀 中作

末關中期、兼門等と作風似る。

刻銘「兼宿」



◇ 兼安五條

〔永承―山城〕

山城五條兼永門、實物の見られない刀工の一人である。

刻銘「兼安」

◇ 兼安三原

〔應安―備後〕

中古刀 中上作

作品寸延巾廣き短刀多く刃文直匂縮る、時代を同じうするだけに備前秀光等に似たる風がある。(業物)

刻銘「備州住兼安」



備州住と切るものは備前、備中、備後の何れかと迷はされるが單に「備州住」の場合は備後、備前は備州長船住、備中は備中國住と切る場合の多いことを心得て置くと好都合である。

【か】 兼宿・兼安

◇ 兼町 關

〔永祿—美濃〕

末古刀 中作

末關末期の刀工、兼房の如き五ノ目亂を焼く。  
刻銘「兼町」

◇ 兼正 關

〔文明—美濃〕

末古刀 中作

末關としては初期時代である、小振りの短刀が多い、小銘に切る。(良業物)  
刻銘「兼正」 「兼正作」

◇ 兼正 關

〔永祿—美濃〕

末古刀 中作

刻銘「兼正」

◇ 兼房 關

〔永祿—美濃〕

末古刀 中作

兼常門、若狭守氏房父と云ふ、この他にも兼房數人ありて鑑別し難いが作柄そのもの  
よみを尋ねれば何れも同一である、平造小脇差多く、双文は勻締りたる五ノ目亂、俗  
に云ふ兼房亂とて獨特の風情がある。  
刻銘「兼房」



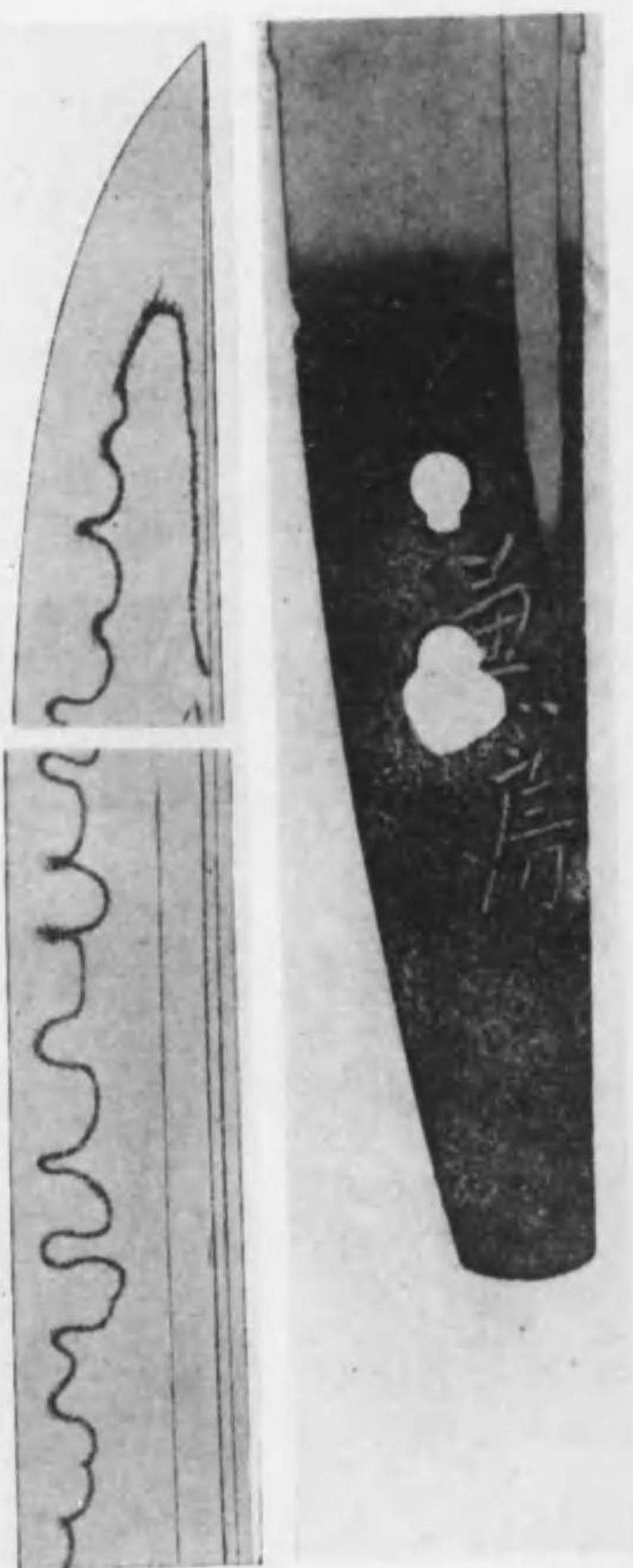
◇ 兼明 高天神

〔文明—遠江〕

末古刀 上作

美濃から移る、作品委やさしく、双文小亂末關風なれども出来優る。(業物)  
刻銘「兼明作」 「兼明」

勻の締りたる五ノ目亂双文が明瞭である、兼房亂とも云はれ末關末期にこの作風が多い。



五ノ目亂



【か】 兼明

◇ 兼明 高天神

〔天文―遠江〕

末古刀 上々作

右衛門四郎と稱し駿河にも住す、武田信虎より一字を授けられ虎明とも切ると云ふ、作品文明兼明の如く、又平造脇差の五ノ目亂尖りたる純末關風のものもある。

刻銘「高天神兼明」「兼明」



七

◇ 兼秋 關

刻銘「兼秋」

〔天正―美濃〕

末古刀 中作

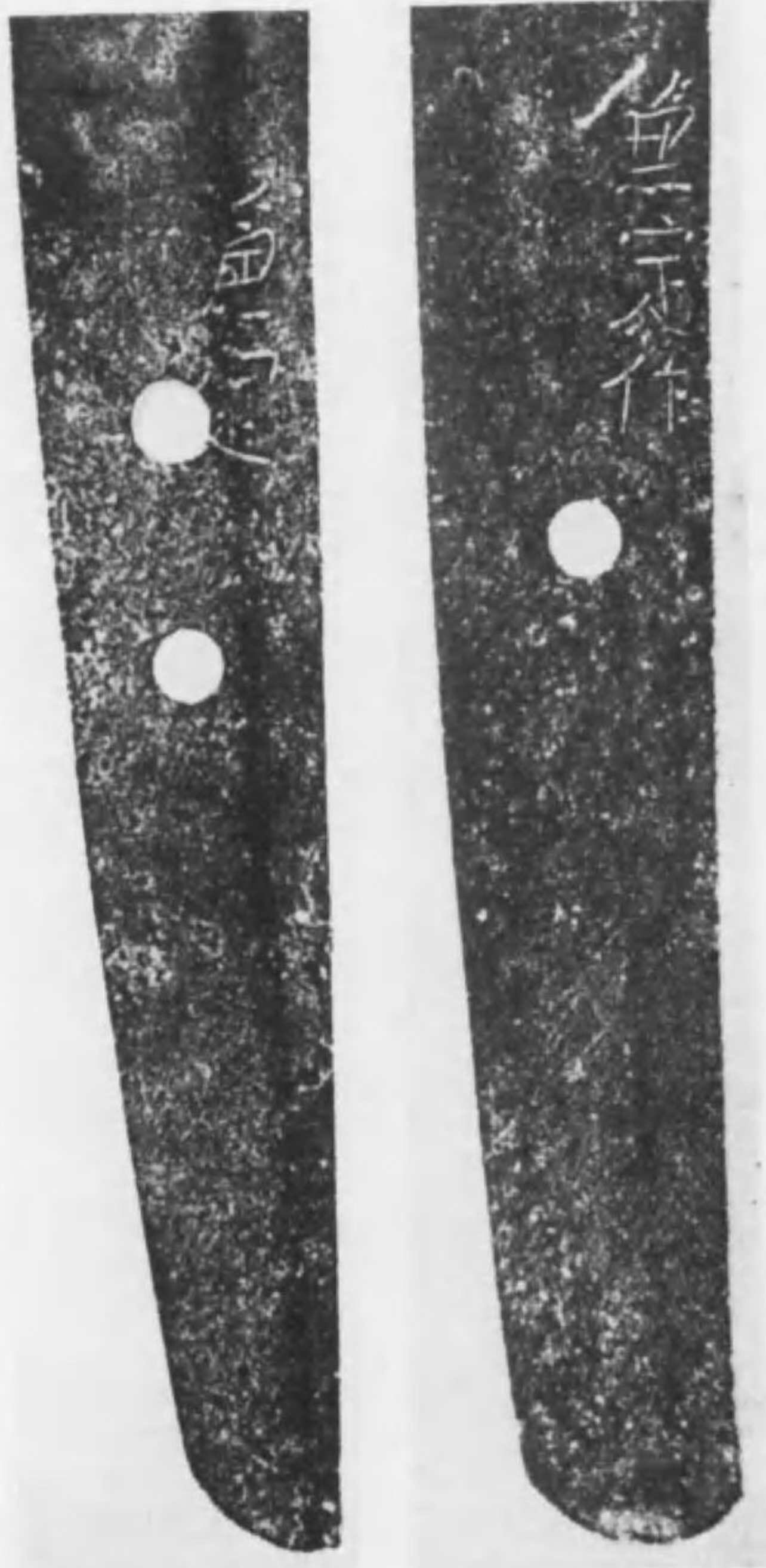
◇ 兼定 初代

〔文明―美濃〕

末古刀 上作

志津一派の流れ、赤坂に住す、初代兼定即ち和泉守兼定（之定）の父也、本工も和泉守を切ると記されてゐるがこれは子の之定から始まつたものでこの初代兼定は和泉守とは切らないと思ふ。（大業物）

刻銘「兼定」「兼定作」「濃州住兼定」



晩年か

【か】 兼秋・兼定

七

◇ 兼定 和泉守

〔永正—美濃〕

末古刀 最上作

初代兼定子、吉左衛門と稱したらしい、明應の頃兼定と眞に切ると云ふ、永正の始めより定の字を草に切る、是は冠下が之の字の如くなる故「之定」と稱せられる、和泉守受領はその後である、孫六兼元と共に美濃關を代表する刀工、勢州山田にても造りしことありと、作品均縮りたる直に元五ノ目亂の腰刃あるもの、灣心の大亂もありて作風多様なれども尖双心は免れ得ない。(最上大業物)

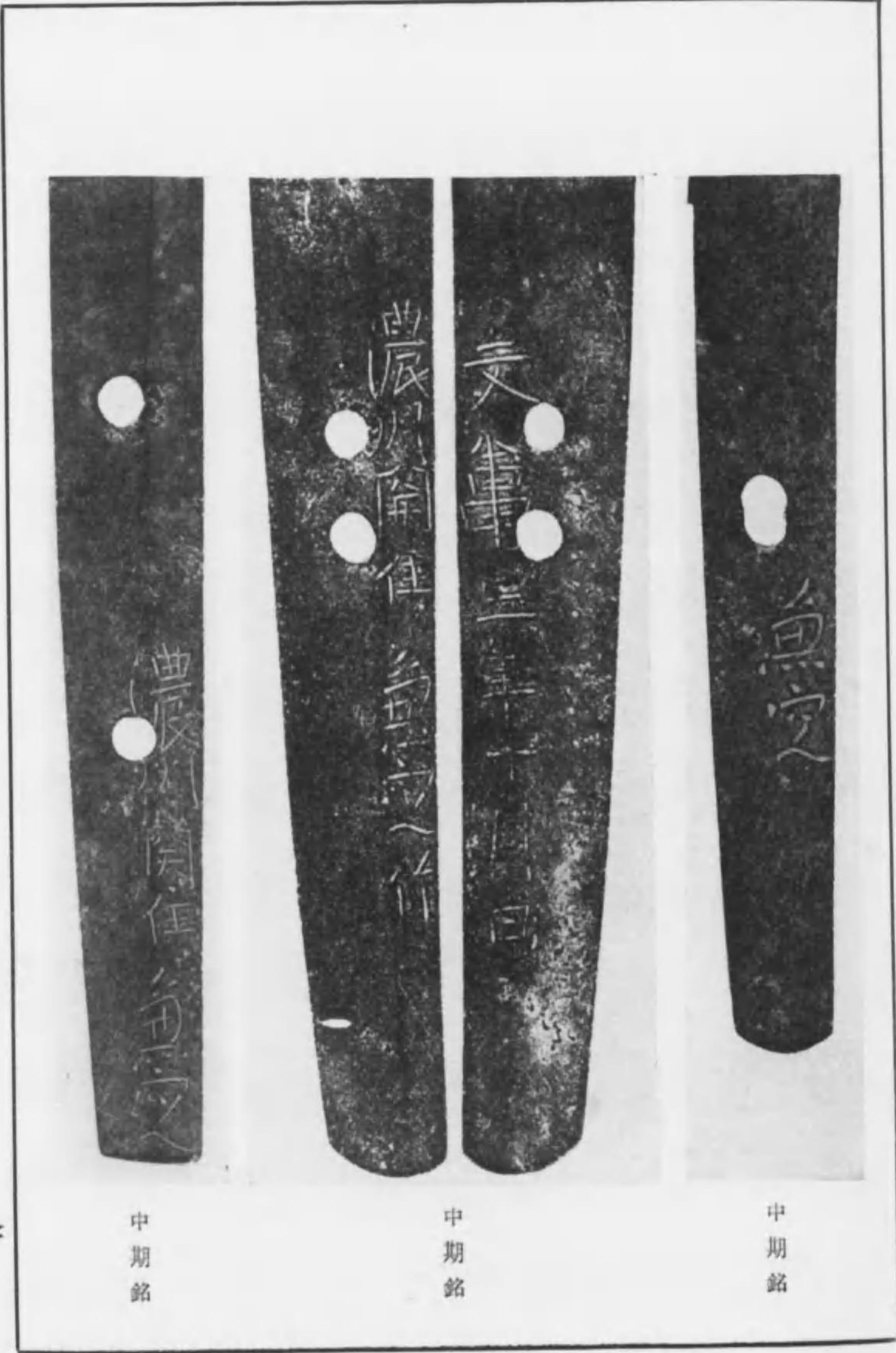
刻銘「濃州關住兼定」「和泉守藤原兼定作」「和泉守兼定作」「兼定」



初期銘

初期銘

以上の兼定は楷書に切り、これより後は(次頁)草書に切る、定の字の冠下が「之」の如くなるためにこの銘字を「之定」と稱す、和泉守受領は後々のことでありて、守受領は作品を通じての事實は之定を以て嚆矢とするであらう。



中期銘

中期銘

中期銘





後期銘



後期銘

和泉守受領は既に永正八年頃なること作品を通じて知られる。

この銘を見るに銘極めて弱、これは兼定の老齢なるがゆへである、大永年間が終年であつたらうか。

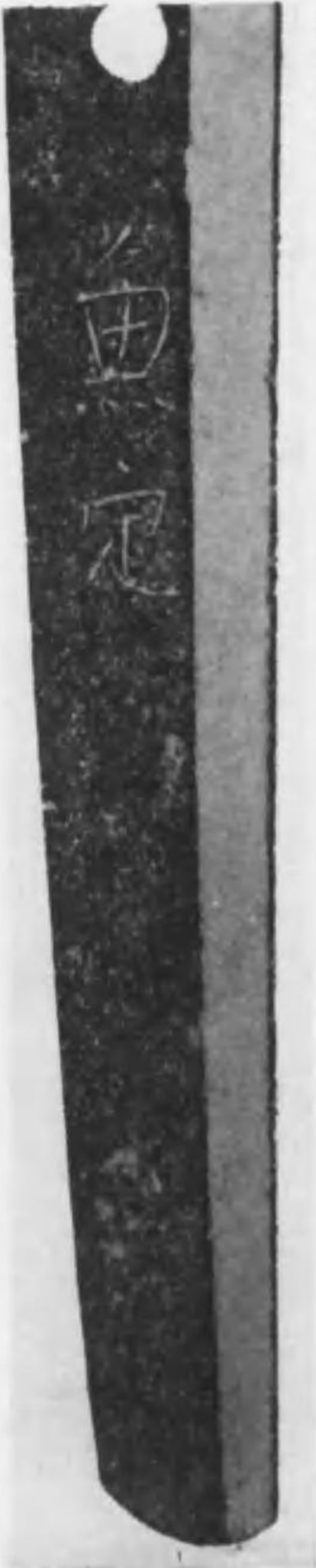
◇ 兼定 參代

〔天文—美濃〕

末古刀 中上作

三代目兼定、定の字ウ冠下を疋と切る故「疋定」と唱ふ、作品享祿、天文頃、和泉守を受領とあるがその作品を見ない。(大業物)

刻銘「濃州關住兼定作」「兼定」



和泉守受領銘は「之定」以外に見られない、そして仕入れ偽銘に和泉守兼定の五字銘がある、これを混合してはならない、若し「之定」以外に「和泉守」受領があつたとしたら、その受領銘が刀の銘字を通じて現れなければならない。

◇ 兼定 關

〔天文—美濃〕

末古刀 中上作

和泉守、兼定門と云ふ初め利隆と云ふ。

刻銘「濃州關住兼定」



【か】 兼貞・兼先

◇ 兼貞 蜂屋

〔永正―美濃〕

末古刀 中上作

この蜂屋一派はもと京の達磨一派から出たと云ふ、末關中期の兼元、兼定、兼明に次ぐ良工である。

刻銘「兼貞」



◇ 兼先 關

〔大永―美濃〕

末古刀 中作

作柄末關中期、關兼永の續きと云ふ、後因州へ移りしか、兼先はこの流れならんか。

(業物)

刻銘「兼先作」



◇ 兼岸 關

〔大永―美濃〕

末古刀 中作

刻銘「兼岸」

「濃州關住兼岸」

◇ 兼幸 關

〔天文―美濃〕

末古刀 中作

刻銘「兼幸」

◇ 兼道 關

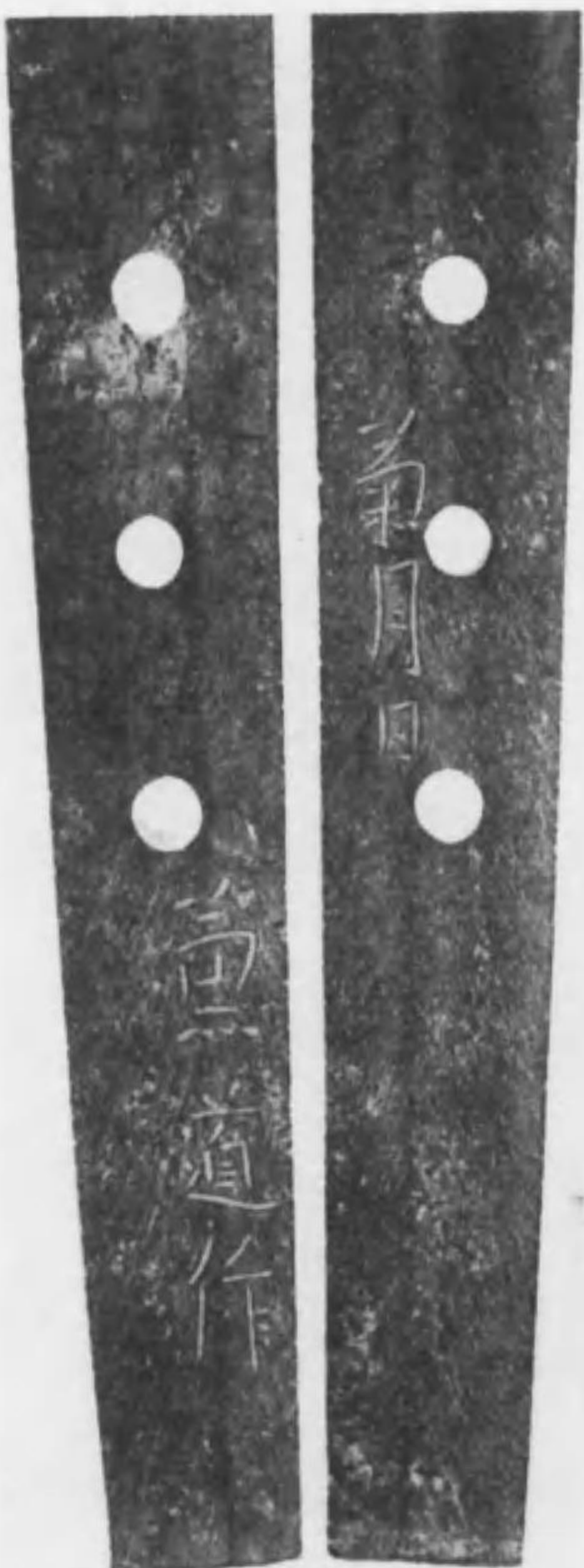
〔天正―美濃〕

末古刀 中作

末關一派、天文兼道の子であらうか、伊賀守金道、丹波守吉道等の父にして、志津三郎兼氏九代之孫と云ふ、後上京して洛陽に住す、作品末關風。

刻銘「兼道作」

「濃州關住兼道」



裏の「菊月日」陰曆九月を云ふ。

【か】 兼岸・兼幸・兼道

◇ 兼光長船

〔建武—備前〕

中古刀 最上作

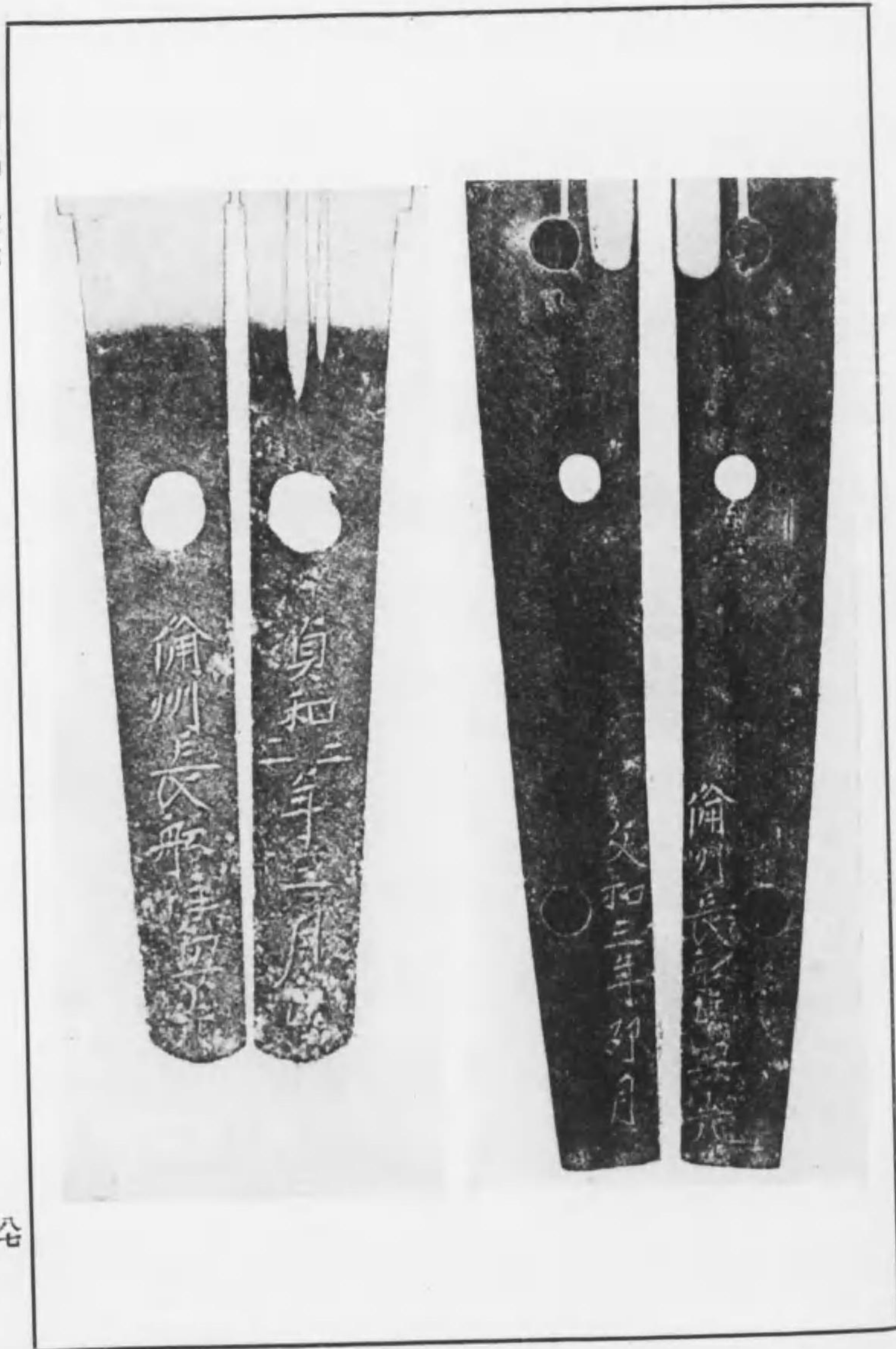
景光嫡男として生れ、孫左衛門と稱す、「弘安元年生、延文五年死、八十三歳」と古刀銘盡大全に記載せられたるは傾聽すべきである、從來延文時代の兼光を貳代とせるもこれは初代建武頃からの延長であり同人であると思はれる、「相州正宗弟子四十二歳時元應に歸る」は信じ難く、むしろ所謂相州傳は兼光がその魁をなせると思はれる諸事實がある、作品姿優しい太刀が多い、短刀は無反筈反にして、康永頃より先反の短刀を造る、又長巻、豪刀もある、身巾廣き摺上げ無銘の多きは三尺以上の豪刀を摺上げ結果に因る、双文は多く鋸刃、晩年は五ノ目丁子、兜割、石切、鐵砲切等の異名の如く古來業物を以て名高い。(最上大業物)

〔刻銘〕「備前國長船住兼光」「備州長船住兼光」「備州長船兼光」



初期銘

兼光の作品時代は正中又は嘉暦から初まつて延文年間に及んで居る、右押形を嘉暦時代と推定したことは銘の變遷を基礎とした爲めであり、兼の字の變化は六種に分つことが出来る。(名刀圖鑑第廿二輯兼光の銘の變遷参照)雲智明集に兼光時代文永頃のものが掲げられてあるが裏年號通じてこれを見ない、多分この兼光初期作の時代約上りに基因する想像より起るものであらう。





晩年銘

吉野朝時代が所謂相州傳の起りし時代である、兼光は無反短刀を造つてゐたが吉野朝時代に至つて先反短刀(巾廣寸延重薄)に一變した、太刀も同時に巾廣のものが造られ、長卷(刃長二尺七八寸)豪刀(三尺二寸)も造られた、この要求は全國に及んだ、兼光などは他に先じて造つた、その事實はこの頃の刀工作品を通じて知るわけである。



鋸刃

逆五ノ目、鋸の刃に似てゐるので鋸刃とも云ふ、兼光の最も得意としたもので兼光一門にその作風が及んでゐる、この刀身は長卷直しである、即ち吉野朝時代(建武以後)の作品である、一見所謂相州傳の造込の如く見へるのもそのためである。

◇兼光關

〔明應—美濃〕

末古刀 中上作

末關初期、此の兼光を備前兼光にもつて行き度がるが注意すべきである。  
刻銘「兼光」「濃州關住兼光作」



◇兼光關

〔天文—美濃〕

末古刀 中作

末關中期、明應兼光子ならん、貳代孫六兼元に似る。  
刻銘「兼光」

逆五ノ目

◇兼重 山田

〔享祿—尾張〕

兼延子、志賀より山田に移りしか、山田關とも、志賀關とも。

末古刀 中上作

刻銘「兼重」

◇兼重 長船

〔應安—備前〕

光長子、長義の兄と云ふ。(古今銘盡所載)

中古刀 上々作

刻銘「備前國兼重」

◇兼久 關

〔文明—美濃〕

直江志津兼久續きならん、兼久中にて此工最古いと思はれる、文明頃の所謂末關初期に當りすぐれたものを造る。

末古刀 中上作

刻銘「兼久」



◇兼久 關

〔天正—美濃〕

末關末期である、文明兼久の續きならん。

末古刀 中作

刻銘「兼久」「濃州關住兼久作」



◇兼基 關

〔享祿—美濃〕

孫六兼元の弟と思はれる、兼元同人との説あれど銘字の連絡なく別人たることは確い、作風五ノ目尖り小亂、三本杉風にて眞の三本杉にはならない。

末古刀 上々作

刻銘「兼基」





◇ 兼元 關

〔明應—美濃〕

末古刀 上作

兼國子とも、兼宗子とも云へど不詳、作刀身巾優しきもの多く、地板目立ち、双文小五ノ目尖り双。(業物)

刻銘「兼元」



從來兼元の代々と云ふものは孫六兼元のみは明瞭なれど他は附に落ちないものがある、孫六でないから孫六貳代であらう！は心細い、こゝに掲げた小銘兼元は在來別人兼元と見なされたものがあるが、孫六同様に濃州赤坂住兼元と切り明應、永正年號がある、即ち孫六の始る前に作品がある故孫六より明らかに一代先輩である、こゝに孫六の親也と記す理由の一半である。

◇ 兼元 孫六初代

〔享祿—美濃〕

末古刀 最上作

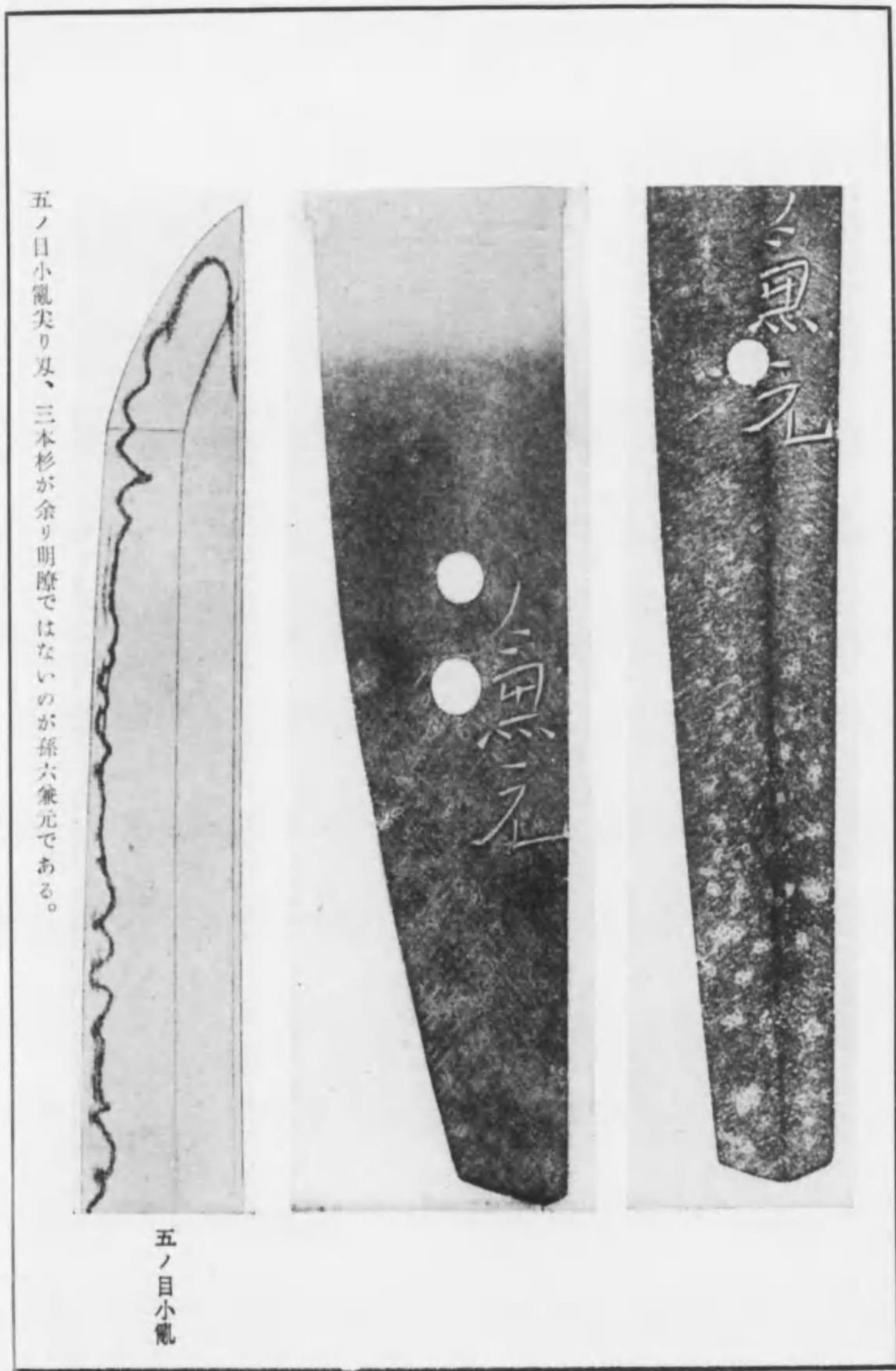
初代兼元子、俗名孫六と稱す、ゆへに兼元貳代、孫六初代と區別されて呼ばれる、兼元作品の名聲も本工に基因する、和泉守兼定と兄弟の約を結んだと云ふ傳説もある、濃州赤坂に住した、双文三本杉で有名であるがむしろ眞の作は五ノ目尖り双が多く、眞の三本杉には到らない、双が馳出してても切れると云ふ程業物の名聲は大きい、が事實そうである。(最上大業物)

刻銘「兼元」「濃州赤坂住兼元」

和泉守兼定(之定)と兄弟の約を結んだと云ふことは美濃刀工として名聲が併び鑑賞せられたために基因するならんか、之定の作品年代は明應、大永間に及、終りの大永年間は相當なる高齢者である、孫六の隆盛はむしろこの以降に涉つてゐる。

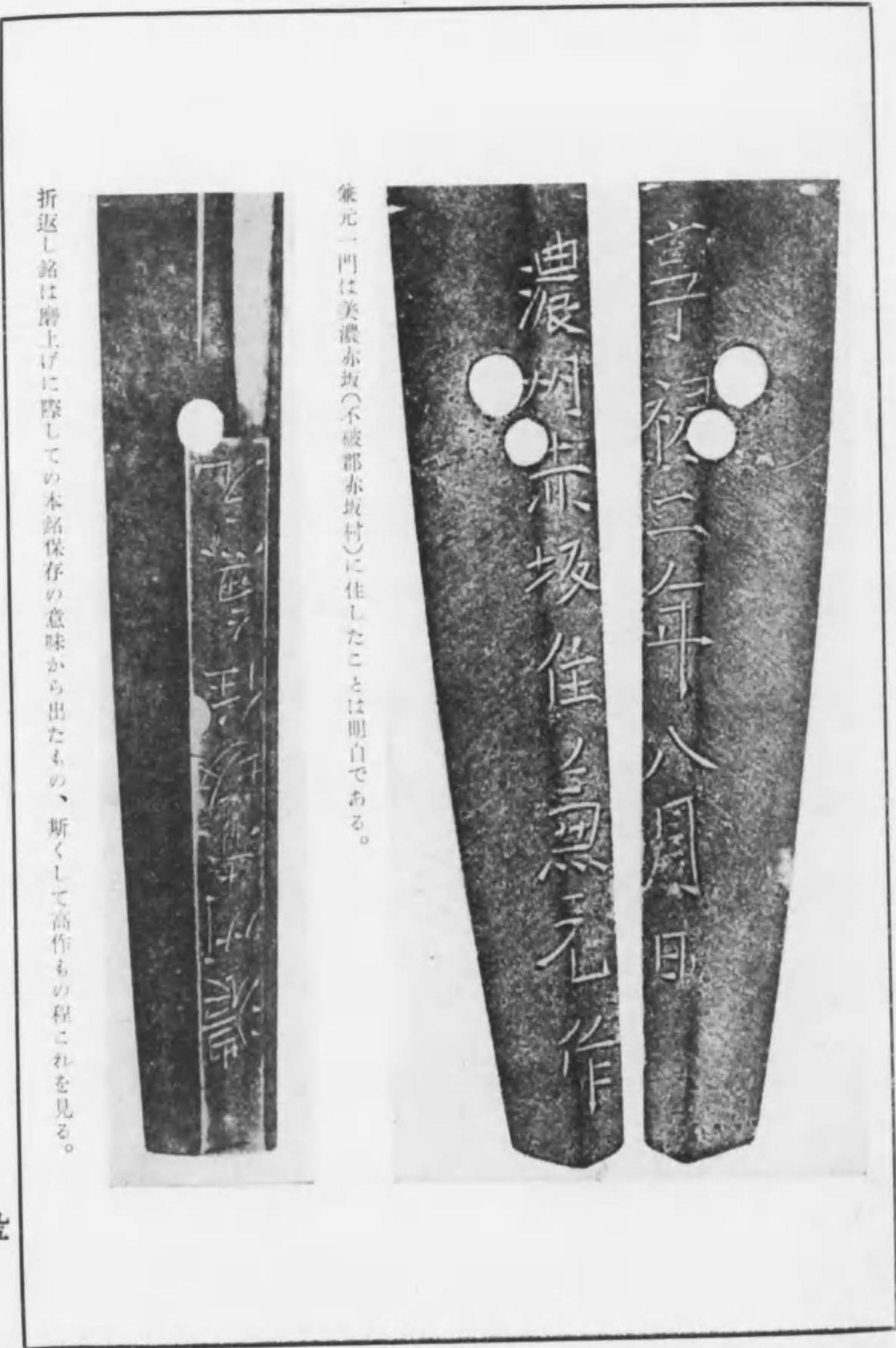


初期銘



五ノ目小亂尖り刃、三本杉が余り明瞭ではないのが孫六兼元である。

五ノ目小亂



折返し銘は磨上げに際しての本銘保存の意味から出たもの、斯くして高作もの程これを見る。

兼元一門は美濃赤坂(不破郡赤坂村)に住したことは明白である。

◇兼元 孫六貳代

〔天文―美濃〕

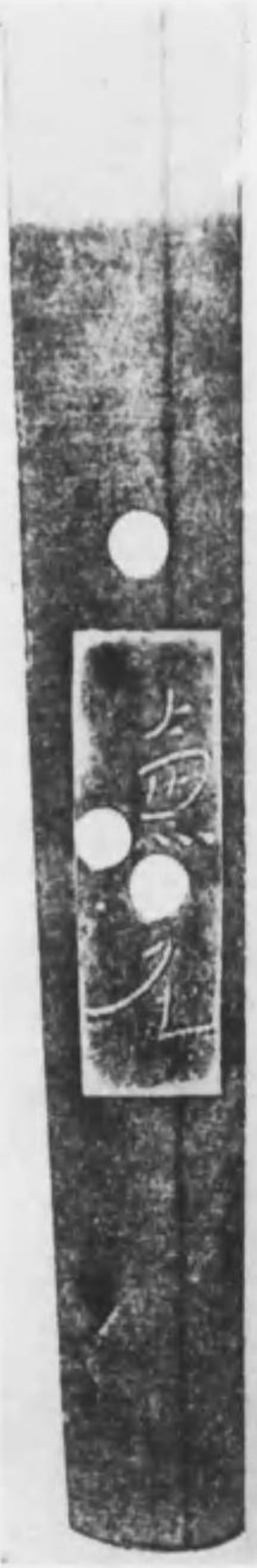
兼元銘三代、孫六兼元から見て貳代である、双文三本杉は孫六初代よりハッキリしたものが多い。(大業物)

刻銘「兼元」



末古刀 上々作

一流所の刀銘には偽物が多いことは當然であるが、中にも最も偽物の多い刀銘は古月朔全群を通じて一文字の「一」と正宗「貞宗」郷義弘「長光」兼元「村正」の七工であらう、兼元の偽物は濫く程である、その多くが孫六初代を狙って偽作をしたものと思はれる、その内の最もよく出来たものが「孫六貳代であらう」参代であらう「別人であらう」と極く簡単にあてハメる風がないでもない、この問題はもつと深く、正確にしたい事である、こゝに掲げた押形の兼元こそ、個性のある眞實の兼元と云へる、孫六貳代としたことは時代的からそう見るの他はないからである。



額銘、これは大摺上の場合、銘を切取つて磨上中心にハメ込む、手間のかゝつた工作である。

◇兼元 参代

〔元龜―美濃〕

この工(左圖)を三代兼元と認めたのは時代が元龜頃と見た爲に因る、双文三本杉は孫六初代に比して完全なる三本杉である。

刻銘「兼元」

末古刀 中上作



◇兼元 後代

〔天正―美濃〕

三代兼元と認めたものと殆んど同時代である、双文三本杉又は直が多い。

刻銘「兼元」

末古刀 中上作



孫六初代兼元は赤坂に住し、後代は關町へ合流したか。



【か】 金行・金光・景依

九

◇ 金行

〔至徳―美濃〕

中古刀 中上作

金重子、父金重が貞治頃の作品あることより見て、木工はそれ以後の時代至徳頃と見  
たい、先反短刀あり、五ノ目双淋しき双文。

刻銘「金行」

◇ 金光

〔至徳―美濃〕

中古刀 中上作

金重子と云ふ、先反短刀を造る、後備後に移ると云ふ、双文五ノ目砂流交る。

刻銘「金光」



◇ 景依 長船

〔嘉元―備前〕

古刀 上作

景秀子、作品太刀多く、双文直小足入り匂縮りたるものが多い。(良業物)

刻銘「景依造」「景依」

作品を通じて極めて多く接する銘と、又跡い銘がある、嘉元前後の長船鍛冶でこれを考へて見ると、嫡系のもの、作品が多く、傍系のものが少ない、傍系が嫡系に比して作品が少いと云ふことは自作の他に嫡系の作品に協力したに相違ない、ゆへに長光景光と云へど優秀な協力が居なければよいものは造れなかつた。

◇ 景長 因幡

〔至徳―因幡〕

中古刀 上作

因幡小鍛冶の稱がある、古書によると粟田口吉正此の國に來りて景長と改む、是を初代とし時代正應頃(或は吉正子を初代となす)と云ふ、是によれば此の二三代ならんも本書は此説を採らず時代至徳頃のを最古いものとしてあげるに止める。(業物)

刻銘「因幡住景長」



◇ 景長 因州

〔應永―因幡〕

中古刀 中上作

備前にても造る、平造脇差多く直双なるは應永備前に似る、或は至徳景長の晩年か。

刻銘「因州住景長」



【か】 景長

九

【か】 景則・景國・景安・景政

◇ 景則 吉井

〔貞和―備前〕

中古刀 上作

吉井爲則子、刀及び先反短刀あり、小五ノ目刃揃ひて焼巾狭い。

刻銘「景則」「備前國長船住景則」

◇ 景國 粟田口

〔建保―山城〕

古刀 上作

粟田口久國門、後鳥羽院隱岐國の御番鍛冶と云ひ傳ふ。

刻銘「景國」

◇ 景安 長船

〔永仁―備前〕

古刀 上作

光忠弟と云ふ、作品太刀多い、双文丁子又は元丁子にて順次直足入となるもの、地映りつく。(良業物)

刻銘「景安」



◇ 景政 進士三郎

〔文保―備前〕

古刀 上作

長光子、景光弟、進士三郎、右衛門尉と稱すと云ふ、その作品丁子は切先へかけて順次淋しくなる、短刀は筒反、鋸刃になる、是古長船派獨特の双文と云ひ得る。(大業物)

刻銘「備前國長船住景政」「備前國長船住右衛門尉景政」



◇ 景眞 長船

〔正中―備前〕

中古刀 上作

刻銘「景眞」「備前長船住景眞」

◇ 景光 左兵衛尉

〔元應―備前〕

中古刀 最上作

長光子、左兵衛尉と稱した、一説左衛門尉と云ふ、作品嘉元頃より建武頃までを見る、約三十年間の鍛刀である、太刀無反短刀多く、双文元丁子、順次直丁子となりて足入る、短刀は鋸刃を最も得意とする、地映り盛んにつく。

刻銘「景光」「備前長船住景光」「備前國長船住景光」「備前國長船住左兵衛尉景光」

【か】 景政・景眞・景光

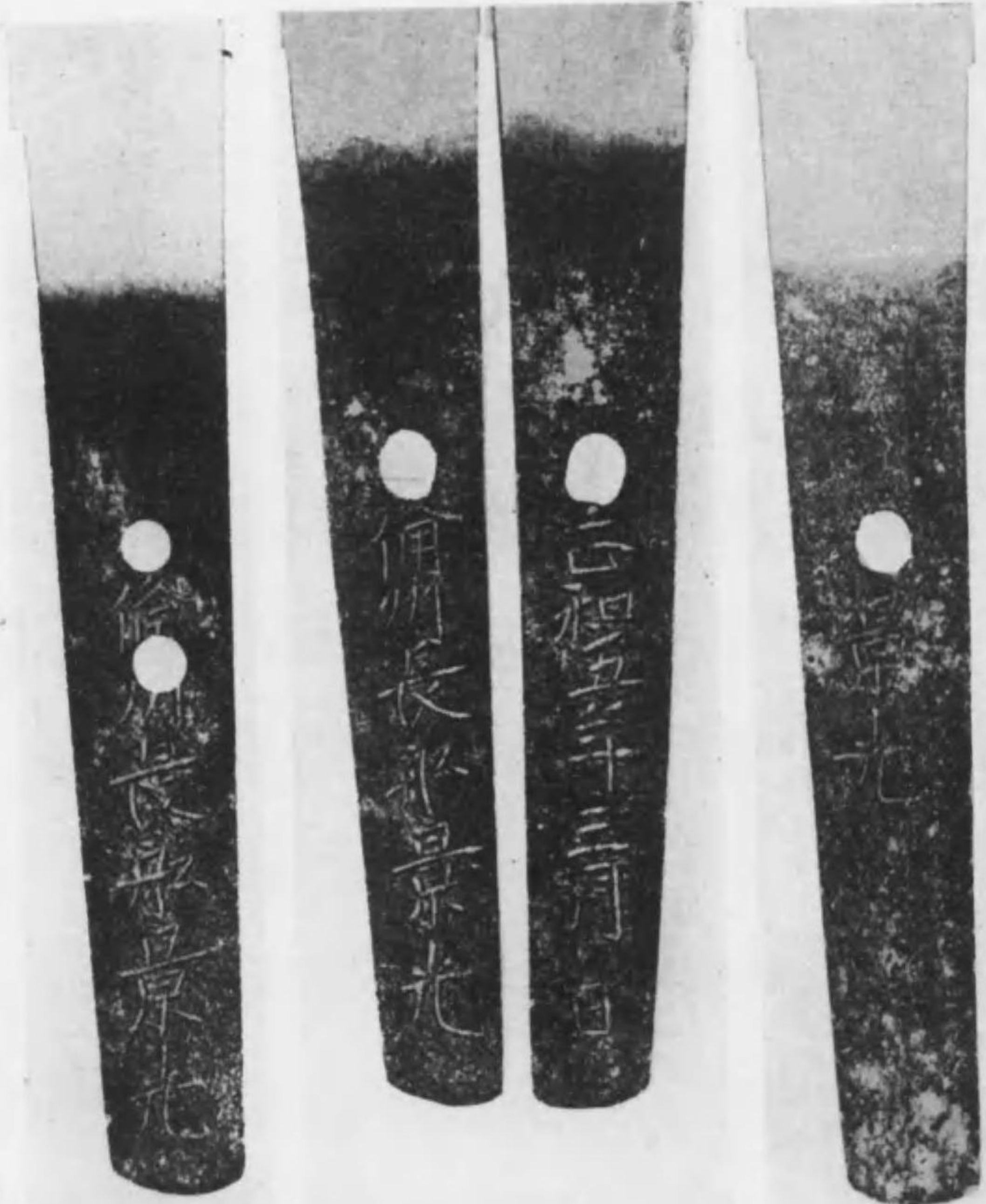


初期銘

101

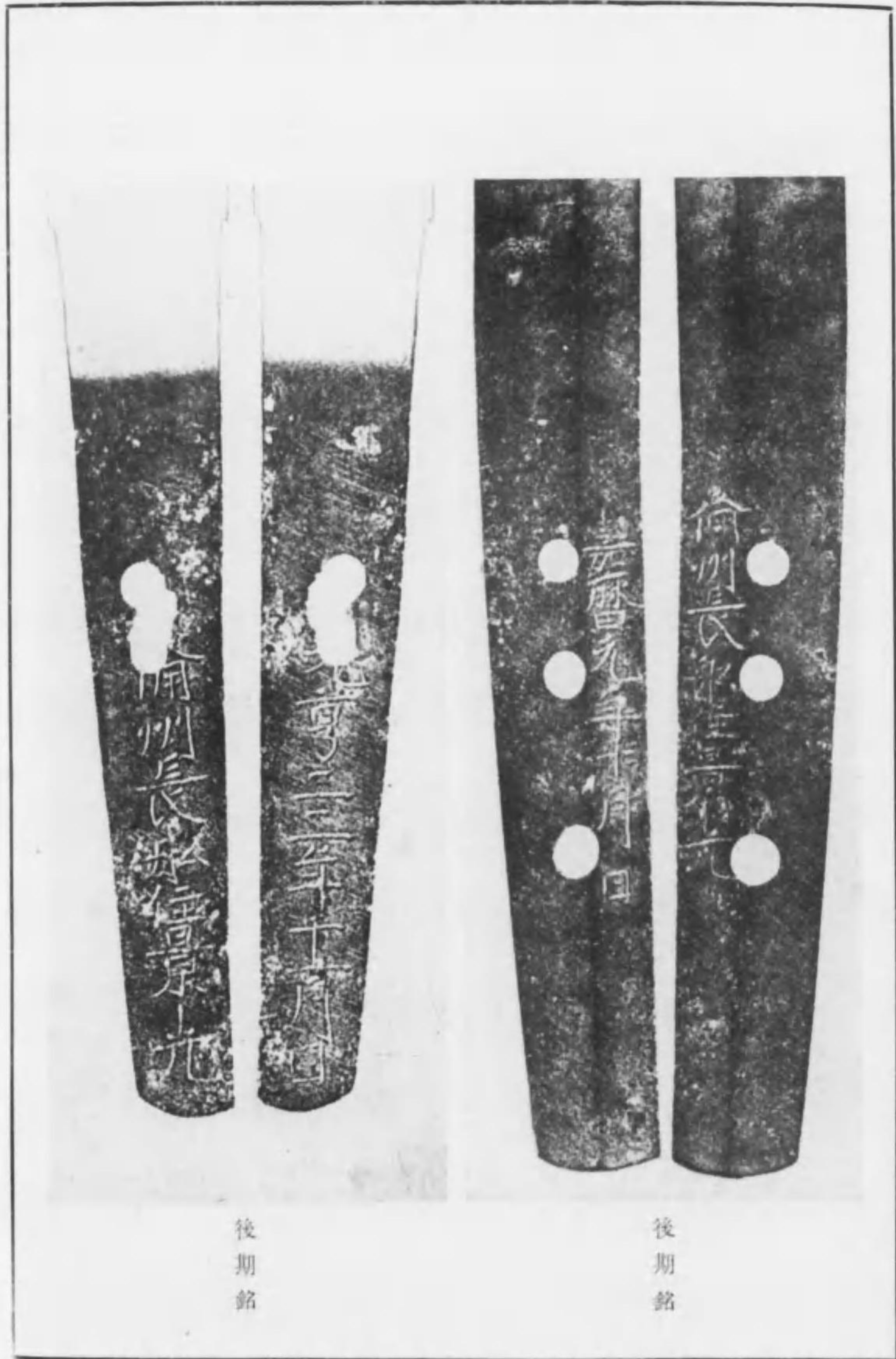
全國鍛冶中一番發達した國は備前である、現在目にふれる古刀名作の三分の一は備前刀工の作であるといつても過言ではあるまい、この備前刀工中で最も繁榮したるは光忠、長光、景光、兼光の長船嫡系四代である。

私は建武頃以前の刀工の襲名と云ふ習慣はなかつたと信じる、景光の子に景光はない、即ち親又は師より一字を譲られ、景光の子は兼光であるとの持説である、これを他の同時代一般諸系圖と對照して見てもそれが立證されると思ふ、以上の主張の下に次の如く長船鍛冶の主要工の系圖を掲げた。



正和以降

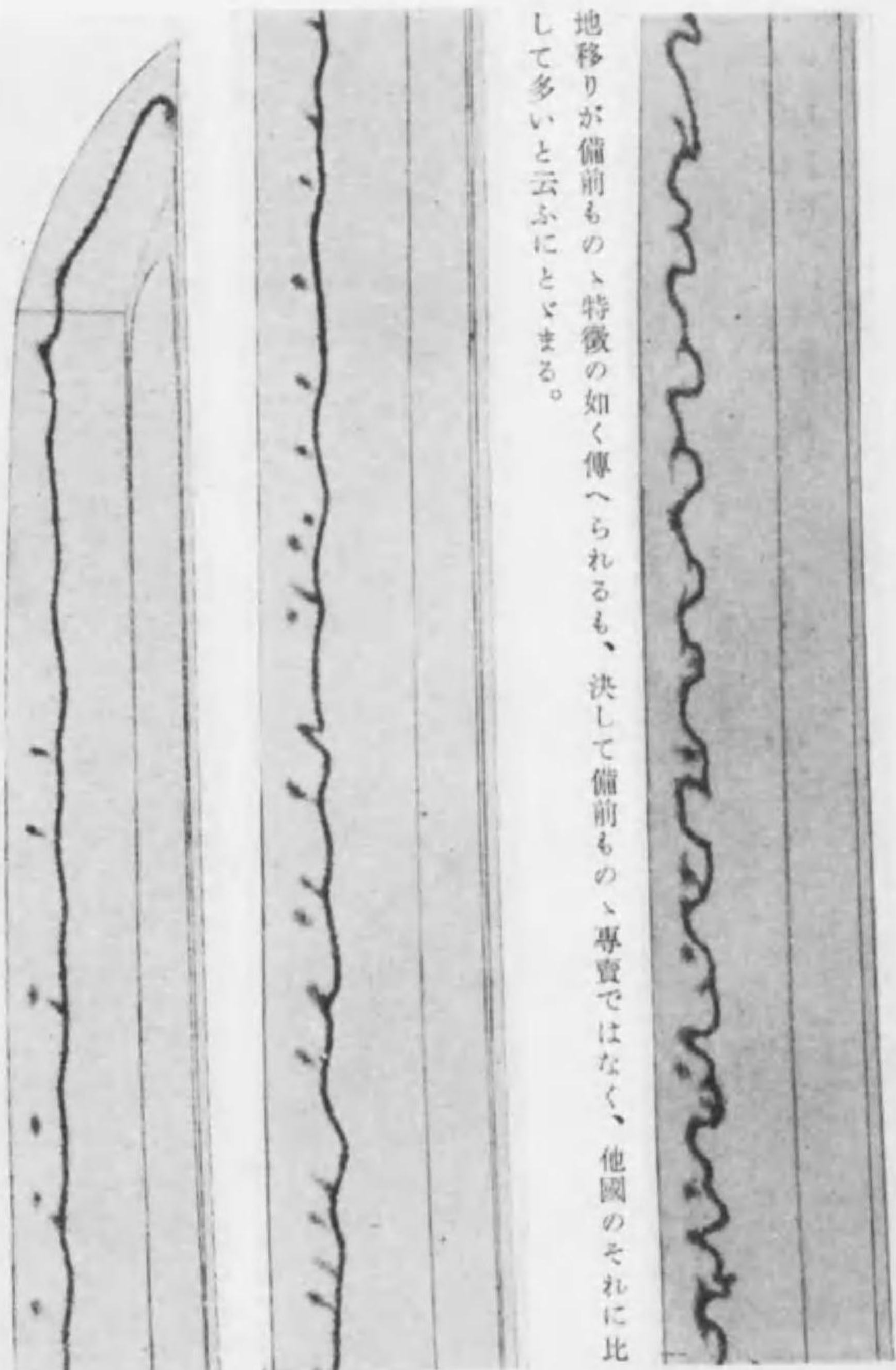
101



後期銘

後期銘

地移りが備前もの、特徴の如く傳へられるも、決して備前もの、専賣ではなく、他國のそれに比して多いと云ふにとゞまる。



直丁子

直丁子

逆五ノ目

景光の丁子刃、五ノ目等は逆心を持つことが特徴である、長光の後期にもそれがある、刃文が總じて逆になることは景光以降に多く發達したものの如くである、實用を第一と考へられたこの當時としてこの逆に焼くと云ふことは、切味の点から見ても、一つの進歩であつたらしい、逆丁子等が一文字にもあるがそれは長光、景光に近い時代の一文字派作風であると考へる。

◇景光 加州

〔文明—加賀〕

末古刀 中上作

眞景の流れ、橋爪派と云ふ、姿優しく刃文小五ノ目あり古井備前を徳ばしむ、往々に備前景光の後代で通つてゐる場合がある。

刻銘「景光」「景光作」



質景子に「加州住藤原景光」と切る刀工がある、本工はこの續きたらん。

◇景重 上州

〔天文—上野〕

末古刀 中作

長谷部國重の末と云ふ。

刻銘「上州住景重作」



◇景秀 長船

〔弘安—備前〕

古刀 上々作

光忠弟と云ふ、太刀多く丁子双華やかなるものが多い、一書に時代康元とあるも、弘安時代を中心として作品が造られしと思はれる。

刻銘「景秀」



◇岩捲 氏信

〔天文—美濃〕

末古刀 中作

菅浦造り脇差多く作風嵐風の五ノ目刃又は若狭守氏房に似る。(業物)

刻銘「氏信岩捲」「岩捲」



岩捲が姓であつたか、新刀期に續き單に岩捲とも切つてゐる。

◇吉家三條

〔寛弘—山城〕

古刀 最上作

三條宗近子、小粥又は刈田丸、鳥井とも銘すと云ふもその作品は見えない、作品姿優しく地板目肌、双文直小亂又は小亂、「吉家作」の三字銘が無條件にて三條吉家とされてゐるが、附に落ちない点がある。

刻銘「吉家」「吉家作」

◇吉家一文字

〔承久—備前〕

古刀 上々作

一文字宗吉子、作刀姿優しく地鐵板目、双文小亂又は小丁子、丁子がある、父宗吉が宗吉作と切る場合の多いのを考へて通常「吉家作」も一文字吉家であると考へたい。

刻銘「吉家」「吉家作」



この二字銘吉家を一文字吉家に定めたのは宗吉一家の嫡流であり吉家前後の刀工が盛んに鍛刀してゐた、三條吉家の場合と違つて可成り實際的であると考へたからである、即ち「宗吉—吉家—吉平」上みの出来に於ても立証することが出来る。

◇吉家岩名一文字

〔元徳—備前〕

中古刀 上々作

正中一文字吉氏の一派、備前岩名住、左兵衛尉と稱す、作品双文直に足入逆心になる。刻銘「備前岩名住人左兵衛源吉家」

◇吉包古備前

〔永承—備前〕

古刀 上々作

古備前永包子、作品太刀のみ、時代に見て双文小亂鈍つく。

刻銘「吉包」

◇吉包一文字

〔建長—備前〕

古刀 上々作

是助子、左近將監と稱す、太刀のみ造り、双文丁子匂出来のものが多い。

刻銘「吉包」



問題は同銘が古備前と一文字とにあることである、「古備前吉包」はよく聞くが「一文字吉包」は余り聞かない、吉包と銘がある場合無條件に古備前へ持つて行くのが人情であるらしいが、こゝは充分その相違点を比較すべきである、双文小亂鈍付の場合は古備前、丁子匂出来の場合は一文字と見ることが穩當であると同時に斯くするの他はない、銘字に因つて云々せられるも確實な根拠は認められない。

◇吉包信國

〔大永—豊前〕

末古刀 中上作

京信國の末、信國を姓の如く用ひたらしい、豊後にても造る、作品姿やさしく、双文小五ノ目揃ふ又は直ほつれ双。

刻銘「信國吉包作」「信國」



右「信國」は吉包と推定、筑前の「信國」であることは確い。

◇吉次鞍馬

〔明應—山城〕

末古刀 上作

本國美濃なるも山城に移り、愛宕郡鞍馬村に住す、故に鞍馬關と稱せらる。(良業物)

刻銘「吉次作」「鞍馬住吉次」



◇吉次右衛門尉

〔嘉暦—備中〕

中古刀 上々作

右衛門尉と稱す、中青江前期の作者、作品刀及笈反短刀多く、双文直に足入り青江特有の作風である。(大業物)

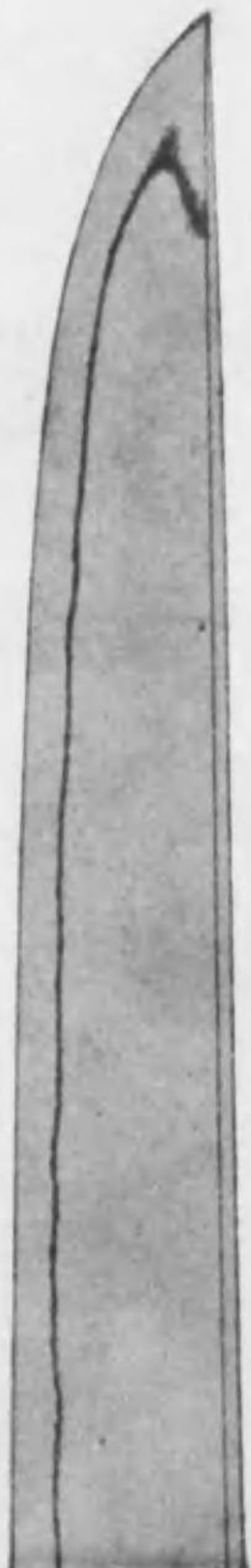
刻銘「備中國住吉次」「備中國住右衛門尉平吉次」



右押形は「右衛門尉平吉次」とあり上部磨られて幾分消ゆ。

「右衛門尉」とは一つの官名である、これのある刀工は生存當時に於て一權式があつたことが想像される。

青江の作としてその特徴を最もよく現はした刀工は中青江である、中青江は文保、元應頃から永徳、至徳頃に及んでゐる、これを建武中興を界とし前期、後期に分つことが出来る、作品の實際から見ると次の如くである、中青江前期Ⅱ吉次、守次、久次、中青江後期Ⅱ次吉、次直、貞次。



直刃

匂の締つた直刃、逆心の足入り交りたるもの、交らざるもの有り、地鐵李強き内に澄んだ無地鐵現る、青江の澄肌として心鐵の現れが、中青江全体の特徴とされてゐる、類似工として、來國俊國光、了戒等がある。

◇吉宗 一文字

〔承久―備前〕

古刀 上々作

宗吉子、左衛門允と號すと云ふ、その作刀反ありて姿よく双文丁子華やかなるものが多い。

刻銘「吉宗」



◇吉氏 正中一文字

〔元弘―備前〕

中古刀 上々作

左衛門尉と云ふ、作品正中間を中心とするため正中一文字の名あり、吉氏はこの派の祖をなす、作品稀れにて、双文直足入り又は直小丁子烈しきもの。

刻銘「一備州岩名莊住地頭源吉氏」

◇吉則 三條

〔明應―山城〕

末古刀 上作

平安城長吉一派と思はる、後和泉にても造る、作品脇差多く、双文直、樋も好みて掻く様である。(良業物)

刻銘「吉則作」「三條吉則」「平安城三條住吉則作」「三條吉則和泉國作」



この吉則が建武前の吉則に納まつてゐる場合がある。

◇吉則 吉井

〔應永―備前〕

中古刀 中上作

吉井景則子と云ふ、寸延短刀多く双文直又は小五ノ目。(良業物)

刻銘「吉則」「備前國吉井吉則」





【よ】 吉則・吉安

◇吉則 吉井

〔永享—出雲〕

中古刀 中上作

父存命中は清則と切ると云ふ、短刀、脇差多く、双文直又は小五ノ目。(業物)

刻銘「藤原吉則」「清則」



◇吉安 一文字

〔寶治—備前〕

古刀 上作

福岡一文字の一派ならんと思はれる。

刻銘「吉安」



福岡一文字時代の銘字の多くは「大膽にして豪放」であると思ふ、それが正作としての生命なのである、その銘が「いかにもつましやかに座りのよい銘」即ち「大膽になれない銘」は偽物である。

◇吉安 波平

〔享徳—薩摩〕

末古刀 中上作

波平行安の末、作風細直の他に五ノ目亂双にして匂縮る。

刻銘「波平吉安」

◇吉正 栗田口

〔建長—山城〕

古刀 上作

栗田口吉光門、後因州に下りて景長と改めたりと云ふ、又景長の父とも稱せられるが不詳。

刻銘「吉正」

◇吉房 平安城

〔元龜—山城〕

末古刀 中上作

平安城長吉の一派、作風長吉の如く、特に短刀の作が多い。

刻銘「平安城吉房」



平安城何々と切る作者は文明以降に多い、これは地名を添記する一つの習慣が及ぼした結果と思へる、文明ウラ銘の信國の銘に曰く「平安城信國」と、ゆへに平安城と切つたから平安城長吉一派とは限らない。

【よ】 吉安・吉正・吉房

◇吉房 番鍛治

〔承久—備前〕

古刀 上々作

直宗弟子、後鳥羽院御番鍛治と云ふ。

刻銘「吉房」

◇吉房 一文字

〔寶治—備前〕

古刀 上々作

助房子、宗吉輩となる、古書に番鍛治吉房とは別人となつて居り、更にこの吉房三代  
續くと云ふ、思ふに是は比較的多く残されて居る吉房作品の推定時代と云ふものが種  
々唱へられる結果に因るものならんか、此の吉房と番鍛治と別人登録に付ても大いに  
研究の余地がある。

刻銘「吉房」



福岡一文字を初期、中期、後期と分つことが出来る、そして初期は小籠古備前同様のものが多く  
中期は丁子双、後期は直丁子が多いと考へる、吉房はその中期、後期に亘る作者である。  
實物に依つて吉房の區別は附し難い、私の見た範圍では一人である、古書に初代大銘、貳代小銘  
は私の持論を以てすれば、結局初期大銘、後期小銘の同一人である。



丁子

丁子双小模様である、畠田守家の如き風がある。(類似工、福岡一文字、長船長光、景光、景秀  
等、畠田守家等)

◇吉貞 石州

〔永正—石見〕

末古刀 中作

刻銘「石州吉貞作」

◇吉貞 左

〔正平—筑前〕

中古刀 上々作

安吉子とも大左の子とも刀劍書に兩様あり、左の一門中最作品の多い刀工である、先  
反短刀多く双文小五ノ目丁子である。

刻銘「吉貞作」「筑州住吉貞」

【よ】 吉定・吉光

二八

◇ 吉定 信國

〔寛正—豊前〕

末古刀 中上作

豊前宇佐住信國と切る刀工の孫と云ふ。(業物)

刻銘「信國吉定」

◇ 吉光 藤四郎

〔嘉元—山城〕

古刀 最上作

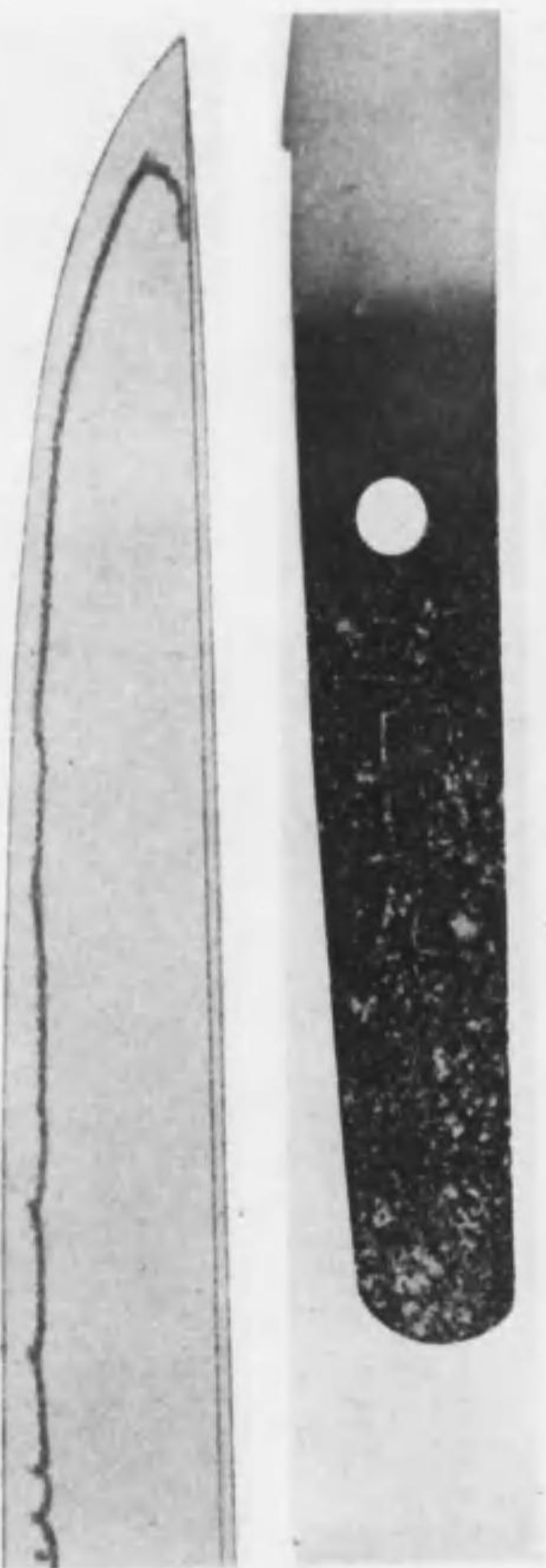
粟田口國吉子、藤四郎と稱す、時代正元と云ふも父國吉に弘安七年作の立派なものがあつたゆへこれは當らないと思ふ、古刀銘盡大全に「吉光、ウラ徳治元年三月日」の鶴の首造りの短刀が載せてあり、註に「土佐吉光に極る」とあるが、これも粟田口吉光の作品であると考へられる、而してこゝにも時代釣上が考へられる、此の工には刀稀有にして、短刀のみ多い作者である、無反短刀、双文直小足入り、小亂刃もある、日本三作にあげられ、古刀期第一位に置かれる名工である。

刻銘「吉光」「藤四郎吉光」



吉の口の字に大口と小口がありてそれに依つて作品の優劣を論じられてゐるが、勿論これは時代的差違、即ち銘の變遷に依るものである、何れが先で何れが後であるかは作品に多く接しないから、こゝには輕斷を避く。

吉光は國吉子とも弟子とも云ふが、私は「國吉子」であると固く信ずる、當時は親が刀工の場合、子も刀工である、二子も三子も刀工である、弟子なども一族のものなどが成る場合が多く、一職同族と云ふ風な大きい團體の様なのがあつたのではないかと思ふ、他國ものが弟子入りすると云ふことは極めて珍しいことである。



直刃

吉光はなぜ短刀のみ多く造つたか、大和保昌、常麻、新藤五國光等と同様その頃の刀匠は時代の要求に応じて短刀を多く造り出したものである、決して吉光自身が短刀を好むがゆへに短刀を造つたのではない。

◇ 吉光 土佐

〔大永—土佐〕

重ね厚め無反短刀、双文直のものを造ると云ふもその多くは粟田口吉光を偽せたものが土佐吉光の正作と考へられる場合が多い。

刻銘「吉光」

【よ】 吉光

二九

◇ 吉光 信國

〔大水―筑前〕

信國吉包等の一族、作風吉包同様にして小五ノ目刃など。

刻銘「信國吉光作」



末古刀 中作

筑前信國は信國の名稱を姓或は姓の如く用ひてゐる。

◇ 吉弘 左

〔正平―筑前〕

左文字の子、作品先反短刀多く、南朝年號を用ひたるは南朝方の刀工でありしためである、又又小亂、小五ノ目亂ありて左文字に似る。

刻銘「吉弘」



中古刀 上々作

◇ 吉廣 相州

〔康安―相模〕

相州廣光門或は秋廣門とも云ふも不詳、作品を見ない。

刻銘「相州住吉廣」

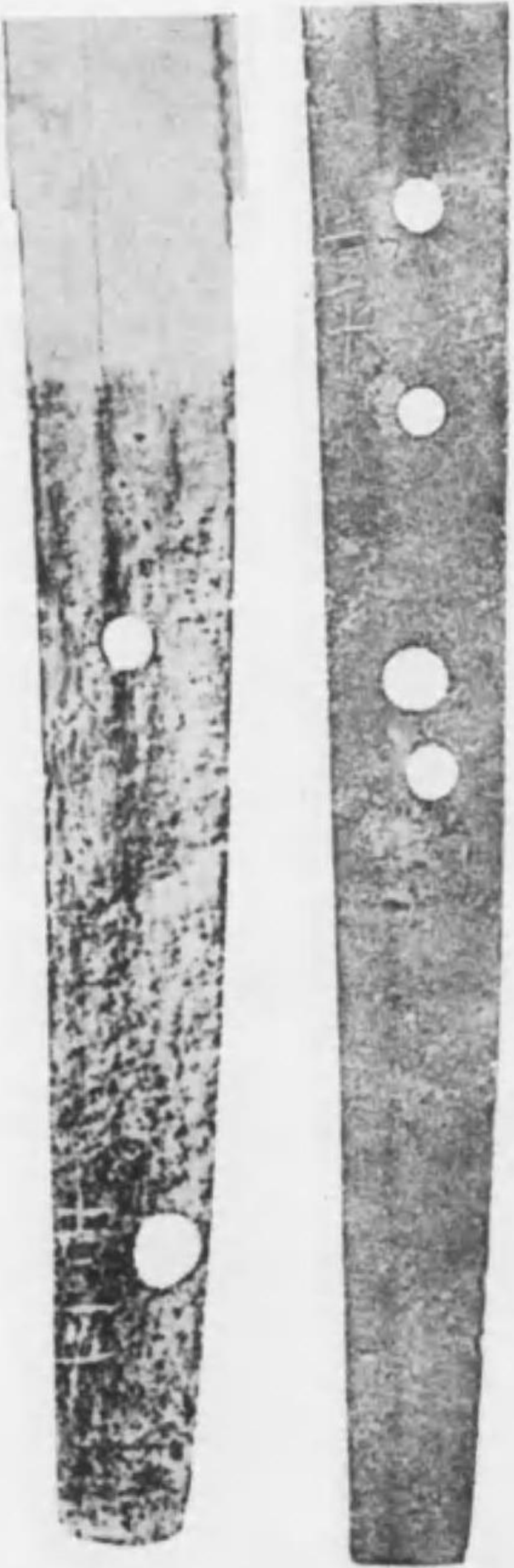
◇ 吉平 一文字

〔建長―備前〕

福岡一文字派、吉家子、この頃の一文字派は技術に於ても精鍊されたと考へられ、吉平の華やかな大丁子が想像せられる。

刻銘「吉平」

古刀 上々作



◇ 吉元 一文字

〔暦仁―備前〕

一文字助吉養子と云ふ、直丁子が多い。

刻銘「吉元」

古刀 上作



◇吉用 一文字

〔文曆―備前〕

古刀 上々作

一文字助吉門、作品に小丁子、直丁子がある。  
刻銘「吉用」



福岡一文字に二字銘が多いと云ふことは時代が長船光忠、長光以前であるからである、福岡一文字の後期は長船へ移ったものもあつて、福岡から長船へと備前刀工の發達経路と云ふものがあると思ふ。

◇吉守 正中一文字

〔延文―備前〕

中古刀 上作

正中一文字吉氏子と云ふ、時代既に延文頃である關係から作風この頃の備前ものと大差ないと考へられる。  
刻銘「備州長船住吉守」

◇義景 長船

〔應安―備前〕

中古刀 上作

長義掣とも云ふ、作品延文、應安頃に多く、大切先豪壯なる刀多きは長卷又は豪刀の磨上多き爲めにして、双文は五ノ目丁子である。(大業物)

刻銘「備前國長船住義景」

◇義清 長船

〔貞治―備前〕

中古刀 中上作

長船義次門、作品先反短刀多く、重ね薄くして反あり双文鋸刃。

刻銘「備州長船義清」



貞治、延文頃の長船ものを小反と云ふ、その境界、人選と云ふものは明瞭には行かない、木工も小反備前と見ることが出来る。  
備前長船もの、銘字が各工共に同じ様に感じられる所より銘切師と云ふものが別にあつたと云ふが決してそんな事はない。

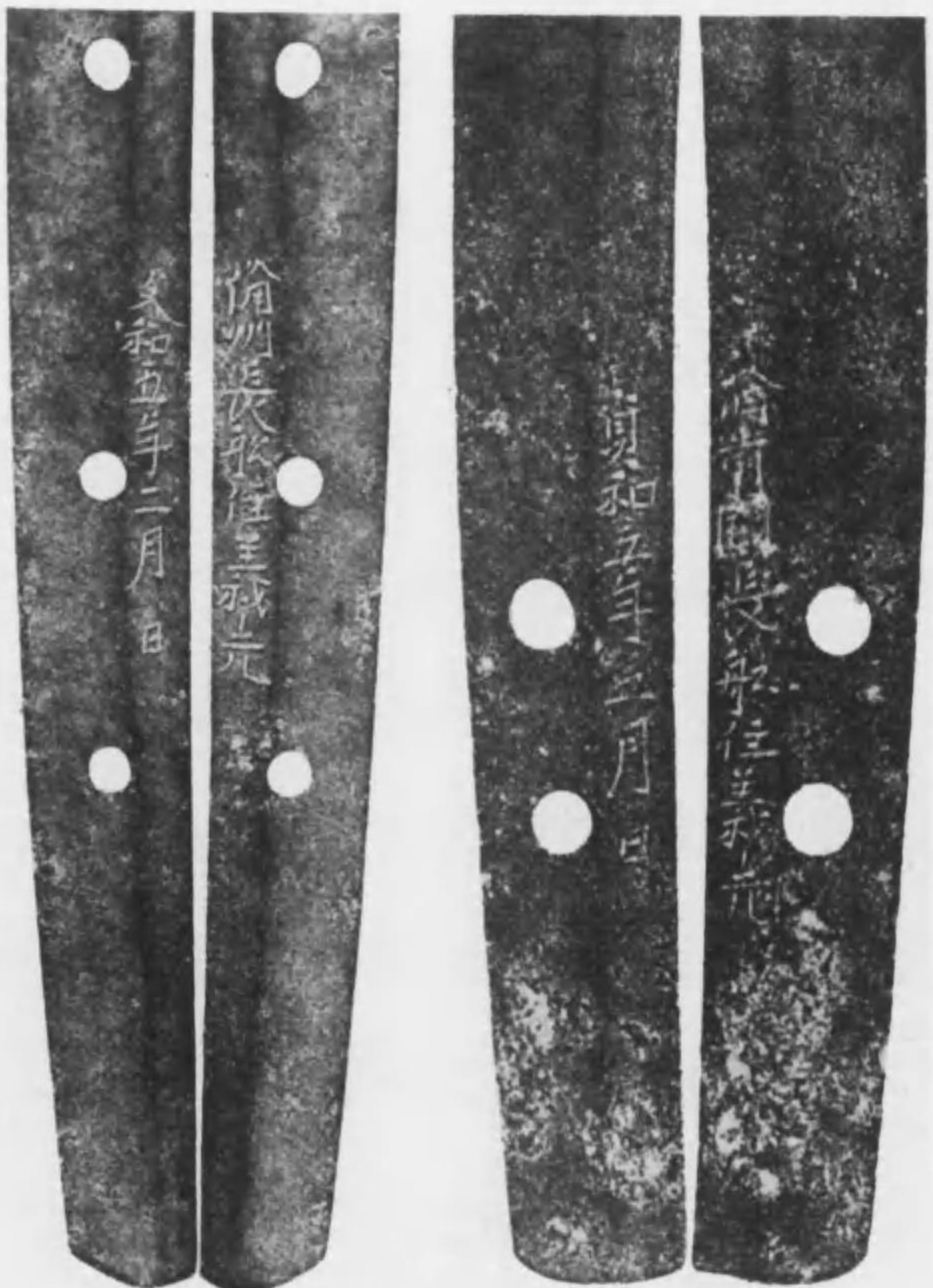
◇義光 長船

〔貞治―備前〕

中古刀 上々作

備前景光二男左兵衛太夫と稱す、作品元享、延文の間(三十數年)に及ぶ、兼光に似たる作風にして幾分五ノ目丁子小模様である。(業物)

刻銘「備前國長船住義光」「備州長船住義光」「備前國長船住左兵衛太夫義光」



古刀銘盡大全に義光は「弘安四生、文和四死七十五歳」とある、が右押形は何れもそれ以後の作品であり、大全の記述は當つてゐない。

◇義弘郷

〔建武―越中〕

松倉郷石馬丸と稱し正宗十哲の一人と云ふ、初め義廣又は善弘後義弘と改むと、郷は江とも云ふ、此の義弘は正宗弟子中隨一の工とされてゐるが其の反面「郷と化物は見事がない」と云ふ俗説がある、江の金象眼入り無銘刀は多くあるが、其等は砂流交りの派出なもので眞の相州傳とは信じ得ない、勿論在銘刀に至つては一本も見えない、自分は江の在刀は信じないものである。

刻銘「松倉郷住義弘」「義弘」

中古刀 上々作

◇義弘千手院

〔文和―大和〕

初銘善弘と云ふ、郷義弘と混同し易い名乗である、今迄の作品では木工は大和國云々の長銘に限られてゐるものゝ如くである。

刻銘「大和國添上郡千手院義弘」

末古刀 上作

◇義助烏田初代

〔大永―駿河〕

作品小縮りした短刀が多い、双文皆焼、亂刃返り深きもの、又細直尋常にて、新藤五國光の如きものもある。

刻銘「義助作」「義助」



刃長五六寸の細い短刀、中心は刀身の割合としては長い、こうした作品の造られたその用途は、突くに便なためか、寛年號から見て大永前後に多い。

◇ 義助 島田貳代

〔弘治—駿河〕

末古刀 中上作

相州上位を偲しむる造込の先反寸延短刀が多い、皆焼刃、五ノ目亂刃等がある。

刻銘「義助」「義助作」



巾廣く寸延先反短刀、これは吉野朝時代に多く造られたものであるが、この頃に至つて再び造られ出したことは戦亂毎の不足から補充の爲めか、吉野朝時代に比して巾が更に廣いこと、寸が延びたことなどは必要に應じそれだけ改革されたわけであろう。

\* 善弘 千手院義弘參照

◇ 能定 了戒

〔文安—豊後〕

中古刀 中上作

山城から豊後に移りこの地にて一門榮ゆ。

刻銘「了戒能定」



豊後了戒一門は了戒と二字に切るものと了戒何々と切るものがある、こゝに掲げた了戒は豊後了戒として古きもの、部類である、能定の作であるとはハッキリ云へない。文明以降山城鍛冶が他の地へ移つたもの、轉々したもの、名を上げると、平安城長吉が三河伊勢、三條吉則が和泉、信國が豊前、了戒が豊後に及んで居る、これは應仁の亂に京都の市内が戦禍に遭うて、鎗土と化し多くの人々が難を逃れて他國に移つたと云ふ時である、山城刀工も安住な鍛刀地を求めたことが考へられる。

◇ 能眞 了戒

〔應仁—豊後〕

末古刀 上作

刻銘「了戒能眞作」

◇ 能秀 了戒

〔永享—豊後〕

末古刀 中上作

従來時代永享とあるが實見に依れば永正頃である。

刻銘「了戒能秀」

【よ】 能定・能眞・能秀

◇ 賀正 加賀四郎

〔貞治〕和泉

加賀を生國とする光正より出、加賀四郎の流派名稱あり、越中、越後にても造ると云へど作品を見ない。

刻銘「賀正」

◇ 賀光 長船

〔寛正〕備前

則光、祐光等と共にこの寛正前後に作品を造る、この時代註文打も俗名を見ない。

刻銘「備前長船賀光」



註文打

末古刀 上作

◇ 賀光 彦右衛門尉

〔文明〕備前

寛正賀光子、多く造らず、數打ものもない様である。

刻銘「備前國長船彦右衛門尉藤原賀光作」「備前長船賀光」

末古刀 上作

◇ 祥貞 石州

〔天文〕石見

長濱は今の那賀郡濱田港に在る。(業物)

刻銘「石州長濱住祥貞」



註文打

末古刀 中作

◇ 祥末 石州

〔天正〕石見

祥末三代續くと云ふ、木工はその三代目、短刀、直刃がある。

刻銘「祥末作」



末古刀 中上作



【よーた】 仍久—大知・大進房

一三〇

◇仍久三條

〔文龜—山城〕

末古刀 中上作

三條吉則子、直又は細直刃尋常なるもの。  
刻銘「仍久作」「三條吉則子仍久作」



京鍛冶として、時代の若い刀工である、京鍛冶が古刀末期に至つて俄に刀工が減少したのは、京の町が戦亂に困り至る所焼土と化し他國へ難を逃れしものが多かつたことなどが影響せし様に思はれる、仍久も父吉則同様和泉へ移りしならんか。

◇大知關

〔天文—美濃〕

末古刀 中上作

安藤長左衛門と號す、大道の祖。(業物)  
刻銘「濃州關住大知作」

◇大進房

〔永仁—相模〕

行光兄と云ふ、又一説には藤三郎行光同人にして豊後行平子とも云ふがこれなどは時代に矛盾がある、又初め法師後刀鍛冶となる、彫物の名人とも云ふ、何れにしても正宗、貞宗等と共に作品が見られない刀工の一人である。  
刻銘「大進房」「大進房師祐慶」

◇高平古備前

〔應和—備前〕

包平、助平と共に備前三平と稱せらる、但作品見えない刀工である、従つて時代も正否は検討出来ない。

刻銘「高平」

◇忠吉油小路

〔建武—山城〕

中古刀 上作

油小路は西洞院の西、醒ヶ井の東にあると云ふ。  
刻銘「忠吉」

◇忠貞雲州

〔天文—出雲〕

末古刀 上作

備前吉井の流れにして作品又文直小亂、五ノ目等、出雲は地理的から備前とは關係が深い。(業物)

刻銘「雲州住忠貞」「忠貞」



忠貞同銘三代ありて初代文明、武代天文、三代永祿に區別されてゐるが實見の範圍では天文永祿の間である。

【た】 高平・忠吉・忠貞

一三一

◇ 忠光 長船

〔延文―備前〕

長船倫光弟子、先反短刀がある、出来は兼光、倫光風のものである。

刻銘「備州長船忠光」

中古刀 上作

◇ 忠光 彦兵衛初代

〔文明―備前〕

文明の初めから長享頃迄作品あり、双文直双足入りが多い。(良業物)

刻銘「備州長船忠光作」「備州長船忠光彦兵衛作」

末古刀 上作



註文打

應永以降や、天下泰平續きたりしも、應仁の亂となり、こゝに再び戦亂時代に入る、文明頃より右京亮兼光、彦兵衛祐定、彦兵衛忠光等刀工興りこれより備前鍛刀界は活氣を呈す。

◇ 忠光 彦兵衛武代

〔長享―備前〕

彦兵衛初代忠光子、文明頃中河彦三郎と稱す、後彦兵衛を襲名す、中河は忠光の姓ならん、俗名なき作にも良作を見る。

刻銘「備州長船忠光」「備州長船忠光彦兵衛作」

末備前には特に銘切師と云ふものが居て、そこで銘を切つてもらつたと云ふ説が十年ばかり前に傳はつた、著者もそれに關しその當否が決せられなかつたが、今日に至りこの説の間違であることがわかるやうになつた、銘切師の起りとしては「銘が余り似てゐる」「銘がどの工も上手である」ことが原因であるらしい。

末古刀 上作



註文打



註文打

「銘が余りにも似てゐる」と云ふことは銘に對する研究の深さがないからである、「銘がどの工も上手である」と云ふことは末備前刀工が最も多く(數打ものを含む)の作品を造りしためである、「銘が似てゐる」以上に「上みの出来も似てゐる」のであつてこれ等は同時代の同流派に於ける一つの法則である。

◇忠光 九郎左衛門尉

〔天文—備前〕

末古刀 上作

勿論彦兵衛忠光の一族、作劣るものが多い。

刻銘「備前國住長船九郎左衛門尉忠光作」

「備州長船忠光作」

◇忠光 修理亮

〔文明—備前〕

末古刀 上作

刻銘「備州長船忠光」

「備州長船修理亮忠光」

◇雄安 舞草

〔應和—陸奥〕

舞草安房子と云ふ、この時代刀書の記録に因る應和が眞なればおそらく作品は實在すまいと思ふ。

刻銘「雄安」

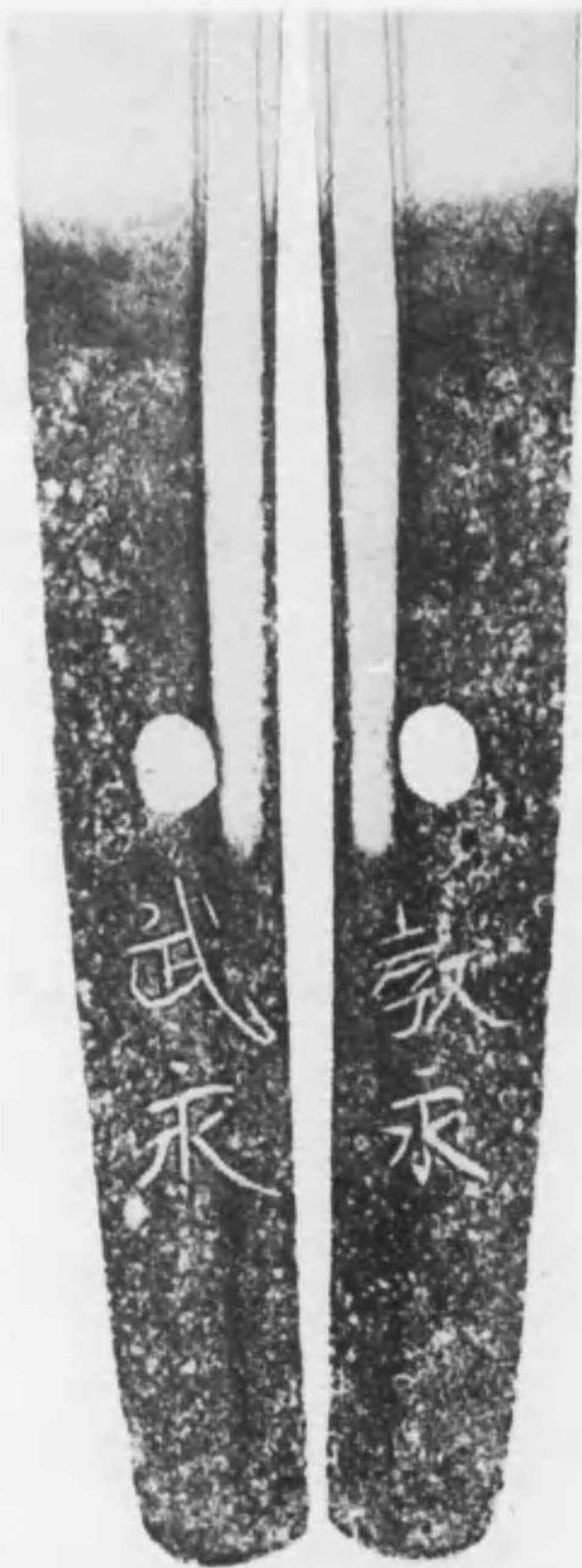
◇武永 大石

〔文明—筑後〕

末古刀 中上作

家永子左の末流と云ふ、作品脇差短刀多く双文小亂、又は直ほつれ刃、浮羽徹大石村に住す、左の末なるを以てこの一派が大石左と稱せらる。

刻銘「筑後住大石武永」



武永、教永には合作銘が多い、此處に掲げた切銘は各自であると思はれる。

◇ 爲 吉 大 原

〔永延—伯耆〕

古刀 上々作

有綱子と云ふ、大原一派が比較的多く世にあると云ふことは時代が永延と云ふそんな古いものではないからである。

刻銘「爲吉作」

◇ 爲 繼 越 中

〔應安—越中〕

古刀 上々作

松倉郷義弘門、後美濃に移ると有るも、師義弘と共に疑問の存在である、二三實在する短刀も私には正作とは感じられない。(業物)

刻銘「濃州住藤原爲繼」「藤原爲繼作」

◇ 爲 次 青 江

〔建暦—備中〕

古刀 上々作

青江守次子、古備前の如き作風、それだけに兩者時代の接近して居ることを感ずる。

刻銘「爲次」

◇ 爲 清 一 文 字

〔承久—備前〕

古刀 上々作

福岡一文字派と云ふ、古備前にも、文保頃の長冊にもある、この區別は明瞭でない。

刻銘「爲清」



◇ 恒 遠 古 備 前

〔天喜—備前〕

古刀 上々作

古備前正恒子、奥州次郎と稱し遠近父と云ふ。

刻銘「恒遠」

◇ 恒 次 左 近 將 監

〔嘉暦—備前〕

中古刀 上々作

銘字大きく太刀銘に切る、双文は景光風のもの。

刻銘「備前國住左近將監恒次」

◇ 恒 次 青 江

〔承元—備中〕

古刀 最上作

守次子、後鳥羽院光榮の御番鍛冶にして備中守に任せらると云ふ、作品は太刀多く、

双文は小亂鈍付く。

刻銘「恒次」



青江恒次で通つてゐる刀、こゝには掲げてゐないが銘振り左近將監恒次に似てゐる、青江恒次と決する前には研究の余地があらう、それは青江の刀は多く刀銘(差表)との教へあるためにも斯く考へられるのである。

◇ 恒次 萬壽莊

〔元徳―備中〕

中古刀 上々作

萬壽莊行次子、時代天福とある、時代釣上げも甚しい、この作には文保、嘉暦、元徳等の年號入りの多い事によつて證明せられる、作品太刀多く、短刀は無反、双文は直足入り又は逆心のもの。(大業物)

〔刻銘〕「備中國萬壽莊住人左兵衛恒次」

◇ 恒清 古備前

〔元暦―備前〕

古刀 上々作

古備前もの、作刀反高く双文丁子双。

〔刻銘〕「恒清」



恒清の時代が元暦は釣上つてゐると思ふ、古備前が必ずしも小籠ではなく、一文字にしても古き所は古備前風のものであり時代的にこの作風が共通する場合が多い、むしろこの丁子双の方が發達した作風と云ふべきである。

◇ 恒光 長船

〔應永―備前〕

中古刀 中上作

小反備前の一派と見られる、作品は地板目双文小五ノ目丁子。

〔刻銘〕「備州長船恒光」



應永初期は作品の極めて減少した時代である、吉野朝時代の戦亂がこの頃全く治まつたことに大いに關係が深い、そして應永の甲頃より亦刀工の復活を見たが、それは備前の盛光、康光などが起つたままで、吉野朝時代に比較して余り全国的には振はなかつた、これが應仁の頃迄續き應仁の亂以降を契機として亦刀工の活躍時代となつた。

◇ 恒弘 長船

〔應安―備前〕

中古刀 中上作

小反物の小反とは反淺きものを云ふか、即ち長船長光、景光等の時代のものと同じにして反の淺くなつた處からかく稱したものであらうか、勿論明らかではない、先反寸延短刀多く双文は概ね鋸双である。(良業物)

〔刻銘〕「備州長船恒弘」

◇ 常遠 青江

〔寶治—備中〕

古今銘盡には則常子、時代寶治とあるが、古今銘盡大全には則高子、時代元暦とあるこの訂正の眞意が不明である、本書は前者に依る、この作も正作の見えないものゝ一つである。

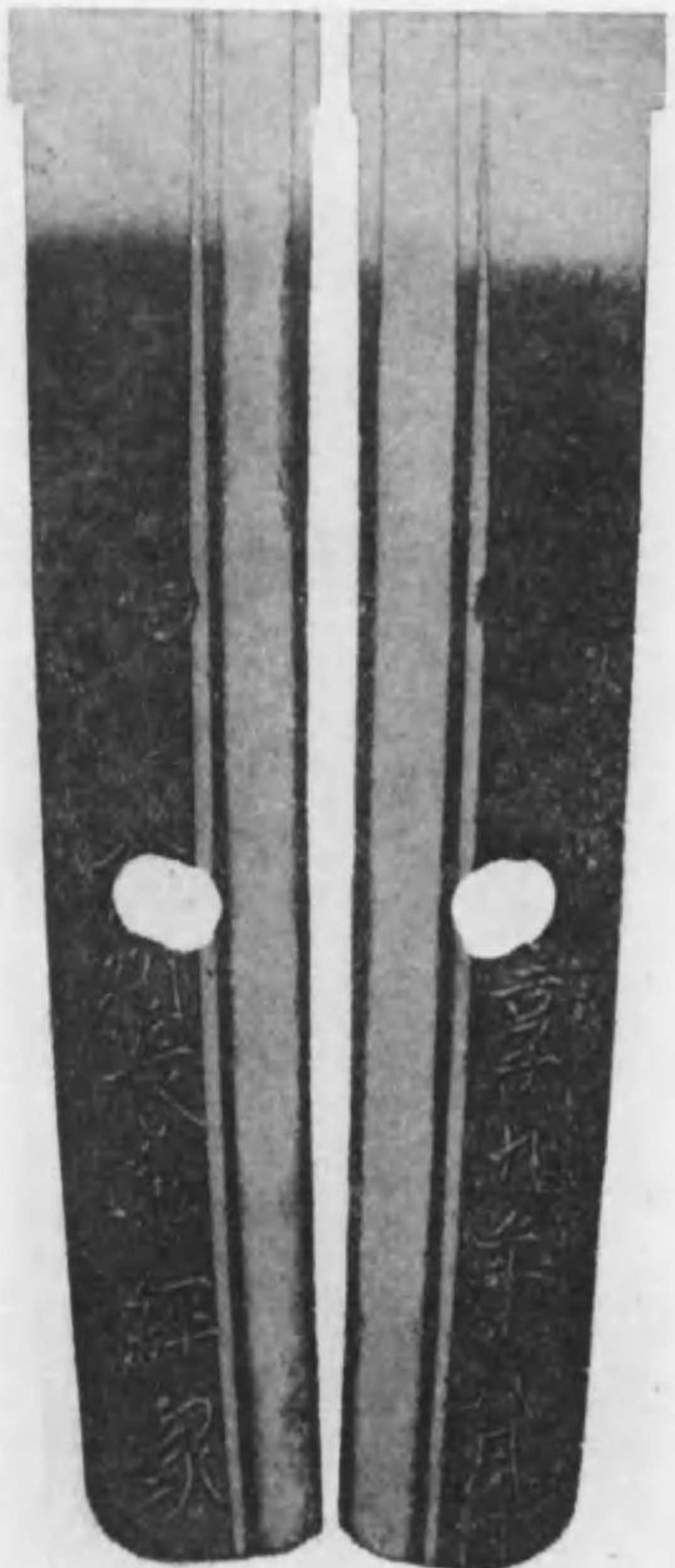
刻銘「常遠」

◇ 經家 長船

〔永享—備前〕

長船光久子と云ふ（古今銘盡）、應永から永享に至る、作風本造平造の脇差多く、双文直又は五ノ目丁子。（良業物）

刻銘「備州長船經家」



中古刀 中上作

◇ 經家 長船

〔文明—備前〕

作風銘字共に祐光に似る、備中にも造る。（業物）

刻銘「備州長船經家」「備前國住人長船經家」



末古刀 上作

◇ 綱家 相州

〔天文—相模〕

初代綱廣門、北條氏の刀匠となりて小田原へ移る、作品亂刃皆焼など多く、劍卷籠の彫刻もある。（業物）

刻銘「綱家作」「相州住綱家作」



末古刀 中上作

相州鍛冶の末期は綱廣一家の他は余り、この地で發達してゐない、これは鎌倉の衰亡に基因するものならんか。

◇ 綱家 奥州

〔文祿―陸前〕

陸前田村郡小野住、相州綱家續きならんか、奥州に榮ゆ。

刻銘「奥州住綱家作」

末古刀 中作



◇ 綱善 相州

〔天文―相模〕

綱善弟子ならんかと考へられる、短刀が多い。

刻銘「綱善」

末古刀 中上作

◇ 綱宗 相州

〔天文―相模〕

綱家弟子と云ひ小田原刀工、師との合作ありと云ふ、總宗とも切る、作品勻縮りたる

五ノ目亂短刀が多い、美事なる劍卷龍の彫物を見る。

刻銘「綱宗」「總宗」「相州住總宗作」

末古刀 上作



末相州の彫刻は素晴らしい、とりわけ綱宗は優秀である、額の内へ劍卷龍は緻密である、新々刀の名彫工義胤などもこの彫刻の模倣に過ぎない。

◇ 綱廣 初代

〔天文―相模〕

山村姓、初銘正廣と云ふも作品見えない、後小田原の北條氏綱鶴岡八幡宮へ奉納の太刀を造り、此時一字を賜りて綱廣と改銘すると云ふ、對馬守受領と云ふも不詳、小縮りした短刀多く、劍卷龍、梵字、素劍の彫物あり、双文は亂又は皆燒刃。(良業物)

刻銘「相州住綱廣作」

末古刀 上作



◇ 網廣 貳代

〔永祿―相模〕

末古刀 中上作

山村姓、法名宗臺と云ふ、作品脇差多く、双文亂双、皆焼、行の俱利迦羅などと云ふ。  
刻銘「相州住網廣」

貳代と思はれる作品を見ない、ゆへに「新刀篇」には古刀網廣を二人として通算し三代目から始ま  
つてゐる、御含み下さい。

◇ 網廣 參代

〔文祿―相模〕

末古刀 上作

山村宇右衛門と稱す、鎌倉扇ヶ谷に住す、後津輕藩主の招きによりその地へ移り大小  
三百刀を打ち、慶長十一年業終りて歸國す、作品亂双、皆焼双、直小亂双あり、彫物  
もあり、作品極めて多い。

刻銘「網廣」







五ノ目亂

比較的匂鈍の締つた五ノ目亂、末相州一体の作風、新刀期の所謂相州傳の方が匂鈍が深く華やかである、概して古刀は締つたもの、新刀は深いものと見て間違はない。

◇ 貫光長船

〔長享—備前〕

末古刀 上作

作品稀れなるも銘字など立派なものがある、即ち右京亮勝光の銘字と殆ど同一である故同工との關係が有つた事を知る。

刻銘「備前國住長船貫光」



◇ 次家青江

〔承元—備中〕

古刀 上々作

守次子、後鳥羽院御番鍛冶にして、權介と稱すと云ふ、予あり本工同様に次家と打ち本工(父)の名代に御番を勤めるとも云ふ、然るに作品は見られない、兩者共何等かの事情で表面に現はれなかつたと考へられる。

刻銘「次家」

◇ 次吉中青江

〔貞治—備中〕

中古刀 上々作

この時代の青江物を中青江と稱す、小足入りの青江特徴はこの次吉、次直等に多く見られる、又直逆足入り、逆丁子などあり、太刀、長巻、長刀、先反短刀など、地鐵は全板目強く、澄み肌が交る場合が多い、心鐵の異稱を以てせらる。(大業物)

刻銘「備前國住次吉作」



貞和頃(吉野朝時代)は三尺二三寸の豪刀が多く造られた、長ければ長いだけ得な武器であるが、動作が敏捷を欲くことはまぬがれない、要は敵を威壓するにあつたらしくこれも戦法變遷の一つである、その豪刀作者の名を上げれば、備前では兼光、元重、倫光、備中では次吉、次直がある志津及び左文字系にもある、以上の刀工に無銘大磨上の多いのもこのゆへである。



古青江は多く二字銘であり、中青江は「備中國住」と長銘である、次吉が何代も継ぐ如く記されてゐるが私の見る範囲ではこの貞和を中心とした次吉一人である、又古い次吉は實物の年號入りにて決したのではないであらう、若し右掲載の次吉に年號が添記してなかつたならば容赦なく時代は高められたであらう。

◇次直 中青江

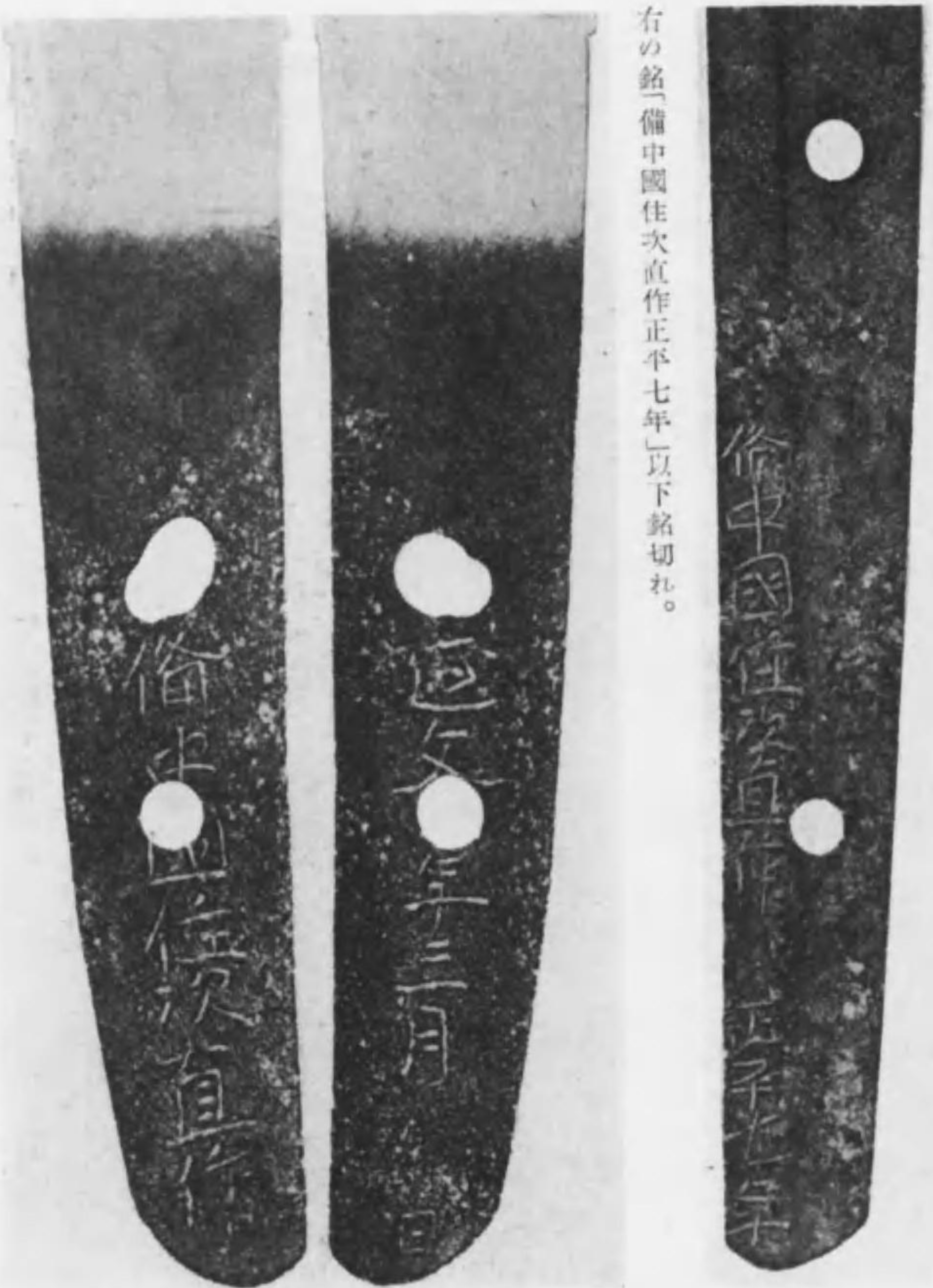
〔延文—備中〕

中古刀 上々作

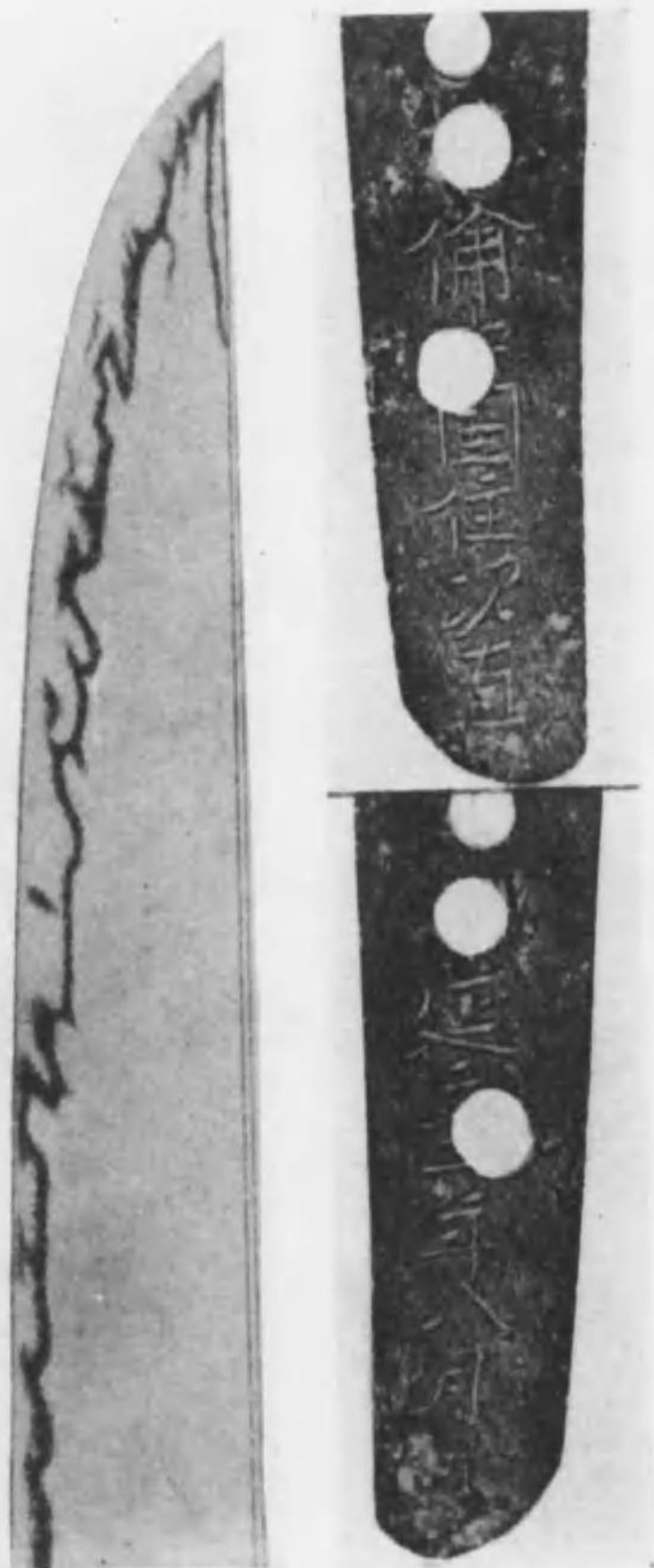
この時代青江鍛冶の興起發達を見る、この次直は中青江の第一人者にして、作品に太刀、長卷、豪刀あり先反の短刀特に多い、双文直逆足入り、又は逆丁子華やかなり、地鉄全板、澄肌交り多し。(良業物)

刻銘「備中國住次直作」「備中國住次直」

右の銘「備中國住次直作正平七年」以下銘切れ。



先反、巾廣、寸延、重薄短刀は豪刀と共に吉野朝時代に造られた、元來この先反短刀が敵の首をあげるのに容易な武器であつてこの時代に積極的にこれが行はれたと考へられる。



逆丁子

逆丁子は片山一文字の特徴として知られたが寧ろ次吉、次直の最も得意としたものである、見た目にも又實際的に切味の点も上々である。

◇次有 常麻

中古刀 上々作

有法師と稱す、假名にて「アリホウシ」とも、短刀多く造込から考へ案外時代は若い様である。

刻銘「次有」「有法師」「アリホウシ」

◇次光 長船

〔正長—備前〕

中古刀 中作

刻銘「備州長船次光」

◇次廣 小濱

〔天文—若狭〕

末古刀 中上作

冬廣門、樋を好み、双文直縮る、脇差が多い。(業物)

刻銘「若州小濱住次廣作」

◇續吉 桃川

〔永正—越後〕

末古刀 上作

刻銘「桃川住續吉」

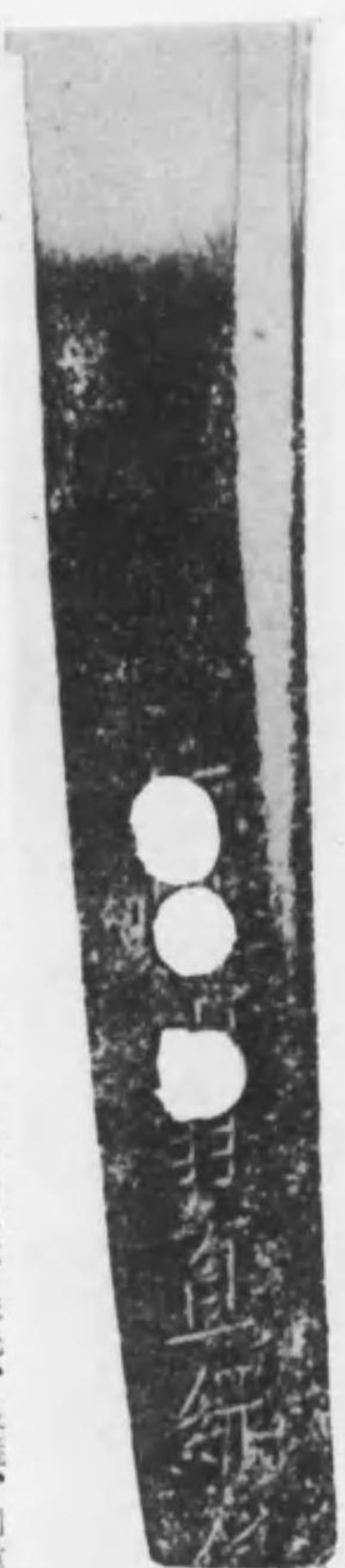
◇直綱 石州

〔嘉慶—石見〕

中古刀 上々作

石州盛綱子と云ふ、左文字貞吉に鍛冶の傳授されると有り、作品應永頃までに及んだと思はれる、作品刀多く、先反短刀有り寸延びる、双文五ノ目足入り、初代友重に似たるものもある、作品妙い。

刻銘「直綱作」「出羽直綱作」「石州住出羽直綱作」



古今銘盡(慶長十六年版、元禄十五年發行)に正宗弟子を、義弘、金重、國重、兼光、長義、則重、左、兼氏、盛高の九工を上げてゐる、古刀銘盡大全(寛政版)には盛高の一工が除かれて、來國次と直綱の二工が加へられた、正宗十哲の名稱もこれより始まつたわけである、古刀銘盡大全が何を理由として來國次、直綱の二工を後世新に正宗門としたかは疑はしい。



亂刃  
(この刀薙  
刀樋、棟筋  
落)

吉野朝時代から應永年間にかけて薙刀樋、棟筋落の刀が多い、これは長巻からヒントを得た刀の造込みと見ることが出来る、記憶の範囲では青江次直、藤島友重、長州顯國等にこれがある。

◇直次 左兵衛尉

〔建武―備中〕

中古刀 上作

嘉暦、元徳、建武、康水、觀應の間に作品があり、太刀、短刀(無反)が多い、匂縮りたる直刃返り深いもの、又は逆丁子。(大業物)

刻銘「直次」「備州住左兵衛尉直次作」「備中國住人直次」



亂刃  
(この刀薙  
刀樋、棟筋  
落)

吉野朝時代から應永年間にかけて薙刀樋、棟筋落の刀が多い、これは長巻からヒントを得た刀の造込みと見ることが出来る、記憶の範囲では青江次直、藤島友重、長州顯國等にこれがある。

◇直次 左兵衛尉

〔建武―備中〕

中古刀 上作

嘉暦、元徳、建武、康水、觀應の間に作品があり、太刀、短刀(無反)が多い、匂縮りたる直刃返り深いもの、又は逆丁子。(大業物)

刻銘「直次」「備州住左兵衛尉直次作」「備中國住人直次」



◇成家 長船

〔康安―備前〕

中古刀 中上作

守光子と云ふ、小反備前の一派、双文小五ノ目丁子匂縮る。(良業物)

刻銘「備州長船成家」



額銘

◇成近 伯州

〔應安―伯耆〕

中古刀 中上作

備前元重子の子と云ふ。

刻銘「成近」



折返し銘

◇成包 古備前

〔仁平―備前〕

古刀 上々作

古備前高綱子、双文小亂鈍付、地大板目。

刻銘「備前國成包」

【な】直次・成家・成近・成包

【な】成宗・業高・業宗

◇成宗 一文字

〔承元―備前〕

一文字則宗子、丁子双焼巾に廣狹がある。

刻銘「成宗」

古刀 上々作

一五



この福岡一文字の丁子は焼巾の廣狹のあるものでその變化は非常によいものである、吉野朝時代に至ると焼巾が比較的一定せられ、又丁子の一つ／＼の變化はなくなつて揃つた刃になる、丁子が丁子でなくなり、五ノ目丁子又は五ノ目亂と云はれる様になる、進歩的ではあるかも知れないが、丁子の妙味は全然なくなつてゐる、そうした考への下に古刀期の双文全体を通じて福岡一文字の丁子刃が焼刃の最高位であると斷言出来る。

◇業高 青江

〔貞永―備中〕

古刀 上作

古青江一派、知遠子と云ふ、双文小亂。

刻銘「業高」

◇業宗 三州

〔文明―三河〕

末古刀 中上作

三河國綱子、中原姓と云ふ。(業物)

刻銘「業宗」

◇長俊 濃州

〔明德―美濃〕

中古刀 中上作

刻銘「長俊」

◇長勝 濃州

〔文明―美濃〕

末古刀 中作

關一派か不明、作風尾州兼延に似る。

刻銘「長勝」

◇長吉 菅原

〔曆應―山城〕

中古刀 上作

平安城光長孫と云ふ、作品妙い。

刻銘「京都住人菅原長吉」

◇長吉 平安城初代

〔文明―山城〕

末古刀 上々作

初代永享頃と云ふが私の見る所にては此の作が最古い様である、従つて世上長吉の名聲も本工に始まると考へられる、梵字素劍等の彫刻あり、双文直腰亂刃、又は矢筈亂灣刃など。

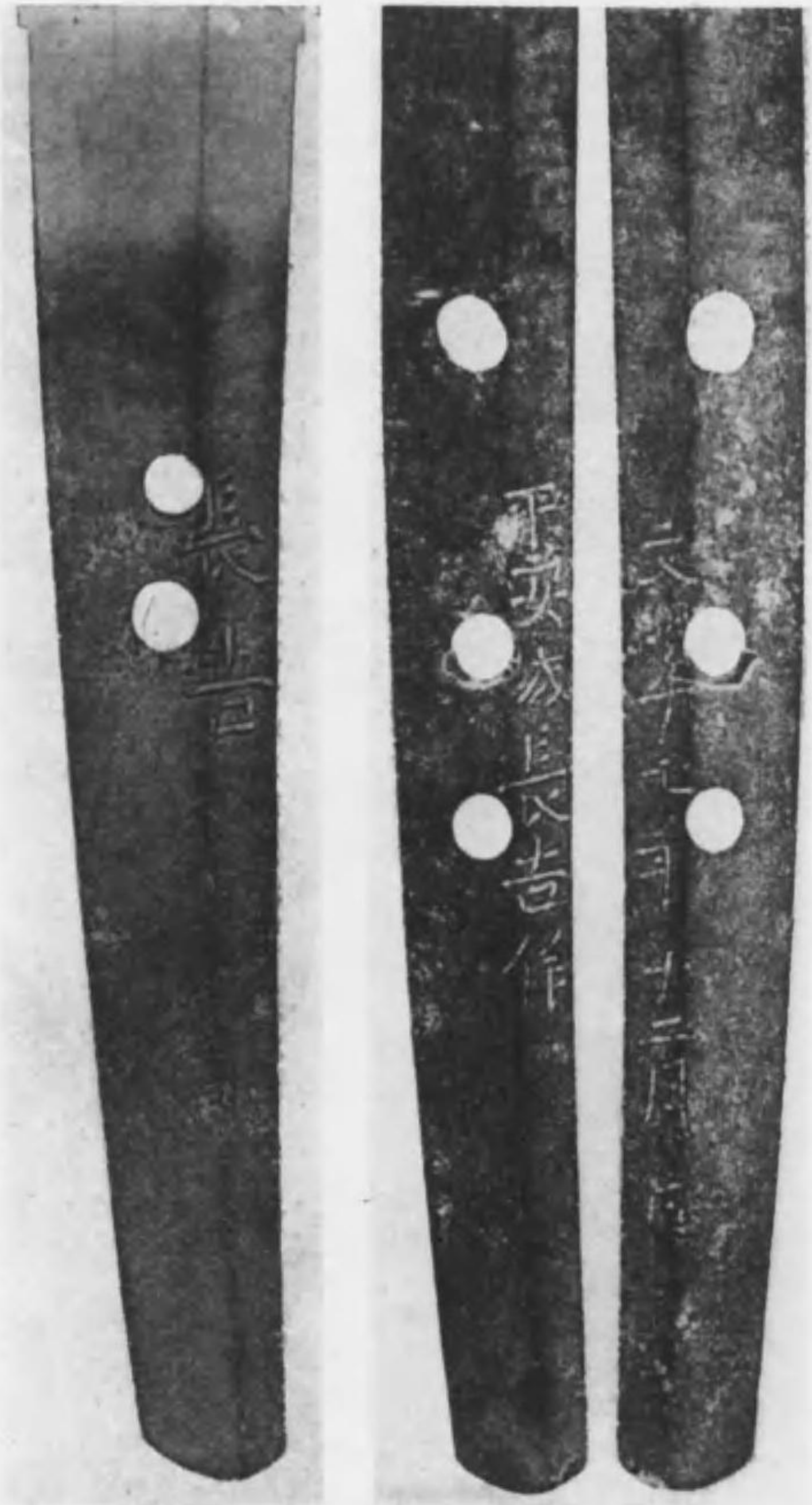
刻銘「平安城長吉作」「長吉」



文明年間の銘ならんと思はれる。

【な】長俊・長勝・長吉

一五五



文明後

長吉が三河、伊勢と轉々して鍛刀したことは焼土と化した京から雜をのがれたことに原因を發してゐる。

◇長吉平安城武代

〔文龜—山城〕

末古刀上々作

通説伊勢村正の師と云はれるのは此の長吉であらう、伊勢にても鍛刀したと云はれてゐる、作品重ね薄く、双文直に腰双を焼く又は灣双、行の俱利迦羅を彫る。

刻銘「平安城長吉」



各自切銘

文明長吉とこの文龜長吉が別人であることは古來の説に従つて記す。



直小灣

長吉得意の双文、村正にもこれがある、東海道筋の各工に比較的この作風を帯びたるものが多い。

◇長吉桃川

〔貞治―越後〕

中古刀 上作

甘呂俊長門と云ふ、作品平造脇差多く重ね薄、地板目双文直足入り。  
刻銘「桃川住長吉」「長吉」



◇長吉桃川

〔永正―越後〕

末古刀 中上作

作品地鉄全目に綾杉肌交る、双文直又は小五ノ目。  
刻銘「桃川住長吉」



◇長義長船

〔貞治―備前〕

中古刀 最上作

光長子、正宗十哲と稱せられる一人であるが、この工に相傳の色彩の有ると云ふことは建武以降に行はれた作刀の改革に因るものである、本工が南朝年號(正平)を用ひたと云ふことは備前鍛冶中の異彩であつて慶すべきことであるが後貞治、應安、永和、康曆(北朝)に移つてゐる、作品身巾廣目の太刀、長刀、長卷多く、又先反短刀もある双文大五ノ目丁子、直双等がある。(大業物)  
刻銘「備前國長船住長義」「備州長船住長義」



初期作



額銘

銘「備州長船長義」一應安六年十月日」



銘「備州長船長義」一應安七年六月日」

長義の細い銘は左文字、志津の如くである、兼氏の項に説明せる如く、それには立派な理由があると思へる。



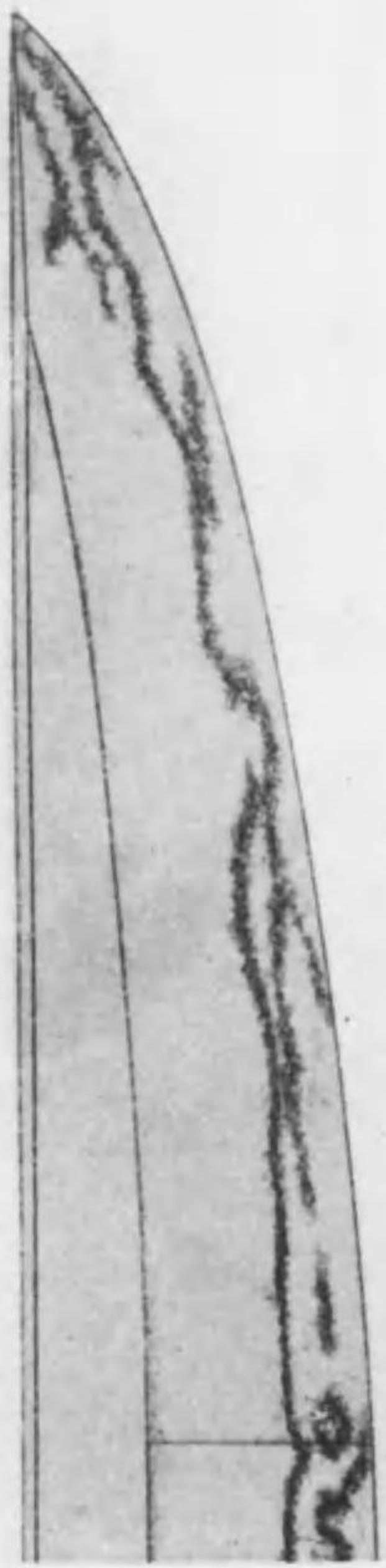
五ノ目丁子

長義は三尺前後の豪刀が多く又長巻も多い、それ等は今日生中心では傳はつてゐない、ゆへに始めから二尺四五寸に造られた刀より何れも巾廣の豪壯なものである、兼光、元重にもそれがある。



五ノ目丁子

匂の締つた五ノ目丁子、兼光より双文が大模様である長義獨特である。



銚子の部分  
分亂崩れ

實大の押形、大銚子、焼詰、巾廣である、この型こそ長巻直しなるがためである、原型は双長二尺七八寸よりなる長巻で刀に直されたものである。

◇長義 秦

刻銘「秦長義」

〔文和〕越後

中古刀 上作

◇長 則 左兵衛尉

刻銘「備前國福岡住左兵衛尉長則造」

〔弘安〕備前

古刀 上作



◇長光長船

〔弘安—備前〕

古刀最上作

光忠子、長船鍛冶の嫡系であり、備前鍛冶の大なる存在である、左衛門尉と稱し左近將監は通説二代目と云はれてゐる、作品太刀多く、老後に於て順慶と號すと云ふもその銘字、更に作風の古備前風なるものに對して腑に落ちない点がある、初代長光の順慶同人は後日に俟ちたい、作品初期時代光忠の如き大丁子を焼き後期直丁子又は小丁子直刃などの淋しき刃文に替る、地映りは盛んにして最も得意とせり、劍卷龍の彫物などあり。(大業物)

刻銘「長光」「長船長光」



初期銘



初期銘

光忠の丁子、これを長光が直刃を配しての直丁子に變へたことには立派な理由があると思ふ、(後章刃文参照)これに因つて長光は日本刀の一大進歩を爲したものと思はれる。



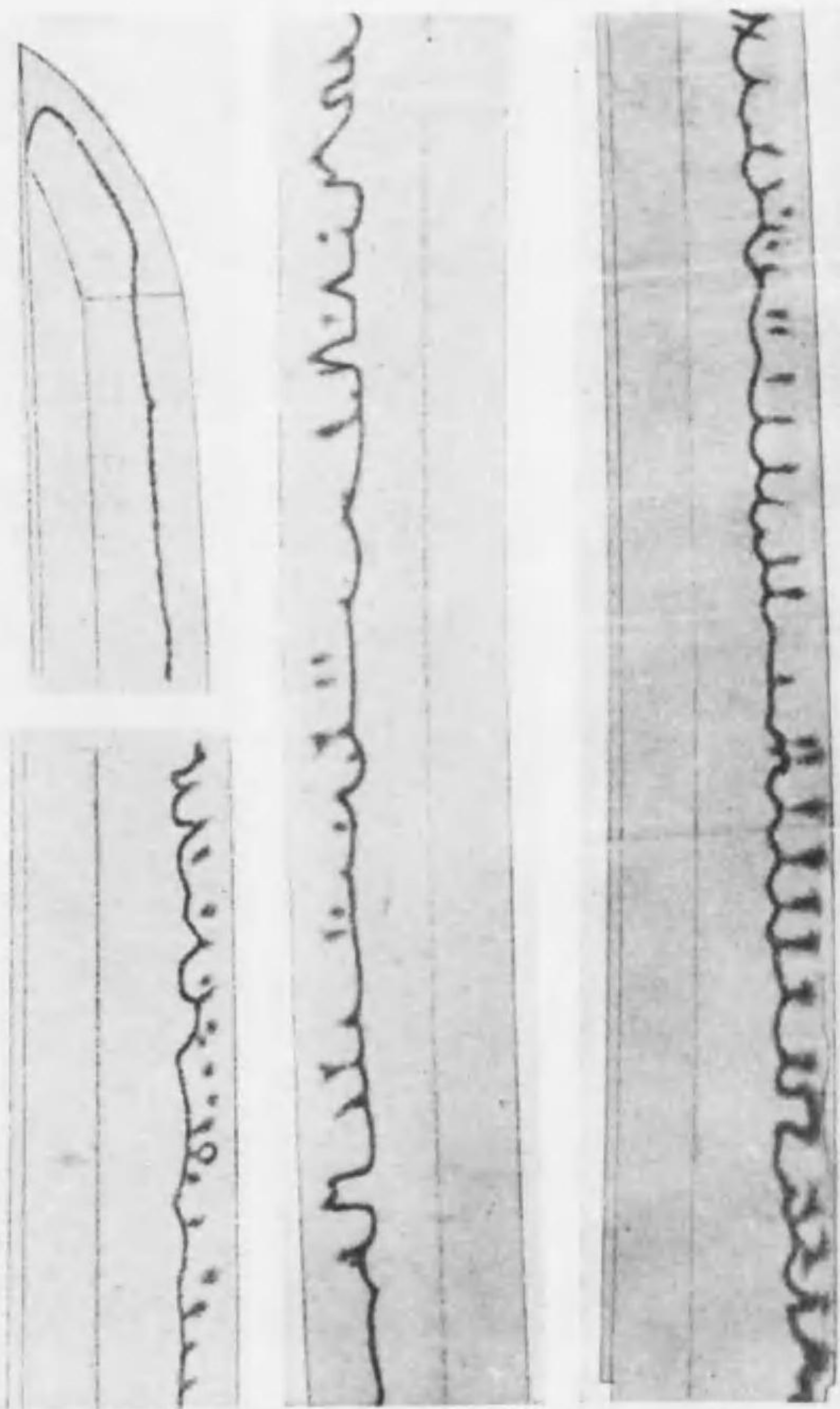
後期銘



後期銘

肩上りの勢のよい、細い銘が後期の銘と思はれ、同時に左近將監の銘字に近い。

鎌倉時代に書かれし源平時代の武者繪に長卷(兼刀)を持てる人物を配してある、が實際に作品を基礎として見るにこの源平時代には長卷なるものが見えない、そして源平時代の武者を畫いた鎌倉時代に、長光、景光、兼光等が盛んに長卷を造つてゐると云ふことを考へ合せると畫かれた時代、即ち鎌倉時代には當時の風俗が取入れられてあると云ふ氣持がする。



直丁子

直丁子

直丁子

一文字、光忠等の最も華やかな大丁子は長光初期時代にはこれを見るが、以後直丁子即ち直刃を配しての丁子が多い、これは作風の變遷に違ひはないが、立派な理由がある、昔聞いた話「一文字等のあの華やかな大丁子、總じて焼巾廣く中には焼頭が鑄へ達したものなどは當時實戦に折れたと云ふ話である」と、長光の直丁子を靜かに考へて見るに、焼刃渡しするとき丁子の土取りに更に直刃の土取を加へた、そしてその直刃の境界より焼をのぼらせない、焼刃がそれ以上深くならないことに長光が意を注いだと考へることが出来る。

◇長光 左近將監

〔永仁〕備前

古刀 上々作

初代長光子、左近將監と稱すと云ふが通説である、古刀銘書大全に「正和五年六十八歳没」とありこの説の眞偽は不明ではあるが、作品がこの正和年間に迄及ぶを見る、双文小丁子、又は直刃を焼く。(大業物)

刻銘「長光」「備前國長船住左近將監長光造」



初代長光と左近將監は同人であると思ふ、即ち初代長光が晩年に至つて「左近將監」を受領したのではあるまいか、武代三代説の多い雲智明集にも同人説を引用してゐる。

◇長重 長船

〔康永〕備前

中古刀 上々作

光長子(光長は眞長の子と云ふ)長義の兄、建武、康永の年號入り作品から見てこの説が正しい、作品太刀、短刀は無反である、これは時代的にも説明が出来得る。

刻銘「備前長船住長重」



◇長廣赤坂

〔文亀—美濃〕

末古刀 中作

美濃赤坂に住せりと云ふ。(良業物)

刻銘「長廣」

◇長基濃州

〔壽永—美濃〕

刻銘「長基」

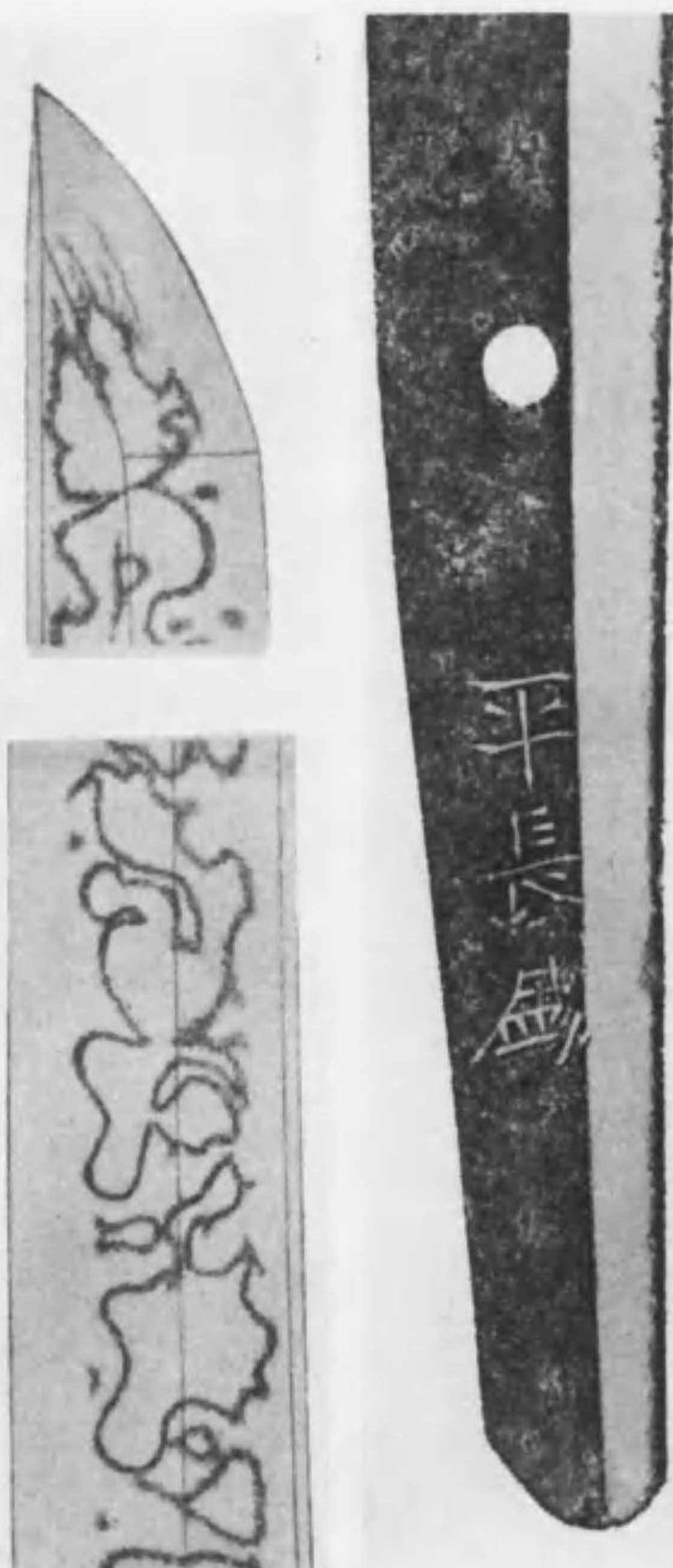
◇長盛平

〔永正—豊後〕

末古刀 上作

高田ものゝ一族、作品勻縮りたる直小亂又は皆焼がある、又時に小縮りした額内に劍卷龍の彫物があり、九州地で斷然光つてゐる。

刻銘「平長盛」「豊州平長盛」



皆焼

◇長守長船

〔延文—備前〕

中古刀 上作

長義系に屬す、長義の如く初め南朝年號を切る、嘉慶に至る、作品三十五年間、先反短刀、長卷などが多い。

刻銘「備前長船長守」「備前國長船左近將監長守」

◇長守平

〔寶徳—豊後〕

中古刀 中上作

刻銘「平長守」

相州物でなく共皆焼はある、末關、末備前等にも皆焼がある、これ等古刀末期の皆焼は匂出來のハツキリしたものが多い。

【な】 長助・永則

一六

◇長助 一文字

〔承元―備前〕

古刀 上々作

後鳥羽院御番鍛冶奉仕と云ふ。

刻銘「長助」

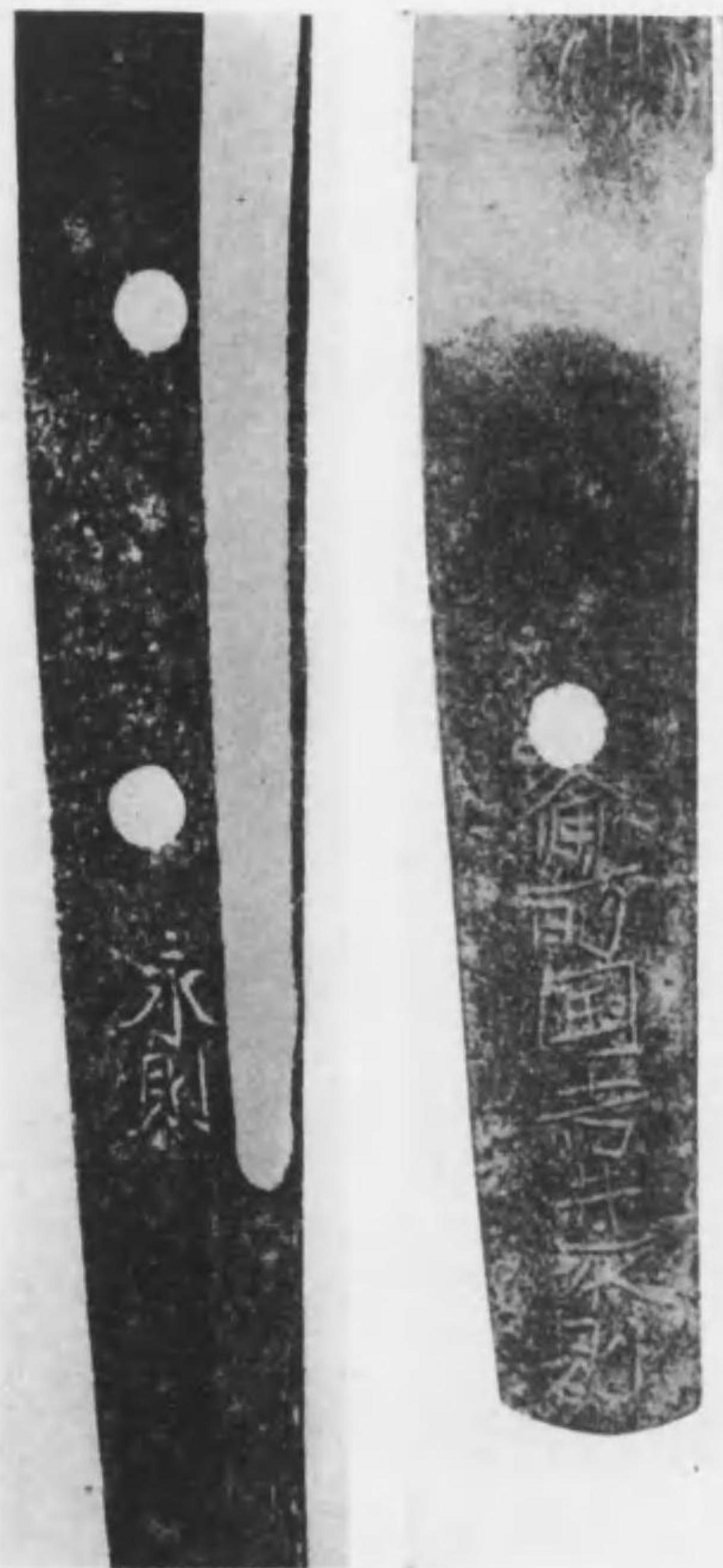
◇永則 吉井

〔永享―備前〕

中古刀 中上作

吉井清則子、作應永頃より永享に至ると思ふ、後出雲へ移る、作品短刀又は平造脇差  
多く双文小五ノ目揃ひ又は直双。

刻銘「永則」 「備前國吉井永則」



◇永光 次郎左衛門尉

〔大永―備前〕

末古刀 上作

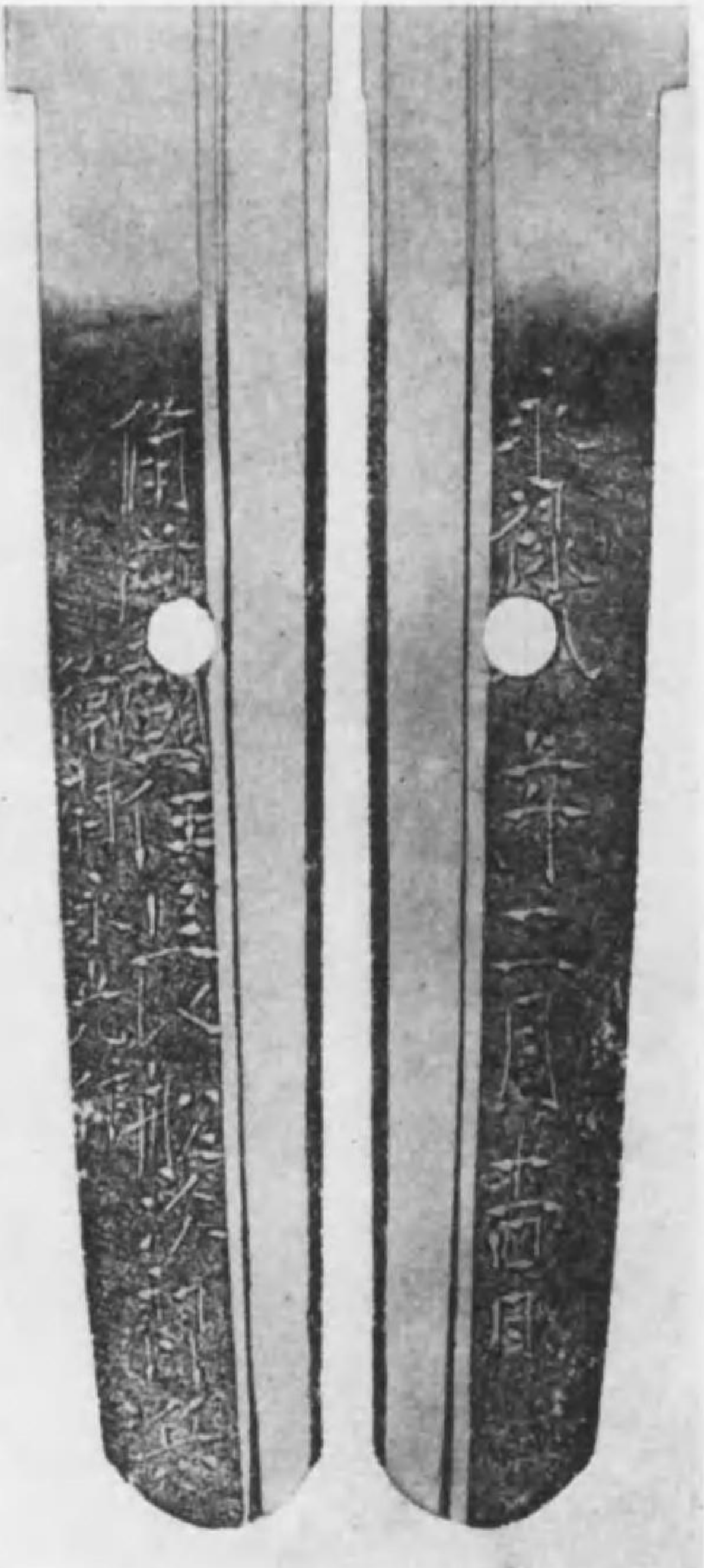
刻銘「備前國住長船次郎左衛門尉永光」

◇永光 次郎兵衛尉

〔永祿―備前〕

末古刀 上作

寸の延びた短刀が多い、双文直小亂匂縮りたるもの。  
刻銘「備前長船永光作」 「備前國住長船次郎兵衛尉永光作」



註文打

元來末備前は長銘なるために短い作には全部切れない場合が多い、この場合行を改めて切加へると云無造作な点もある、下書をしない現れである、元來古刀期の刀工は下書などはして居ないのが本當である。

【な】 永光

一六九



俗名のないものは先づ仕入れ物と見て差支へない、註文打と仕入打とは快心作と粗製作の違があつて價值の上からの雲泥の差があることを認識して戴きたい。

◇ 仲眞 和州

後紀州入鹿住。

古刀 上作

刻銘「仲眞」「大和國住仲眞」



◇ 宗家 畠田

〔嘉禎—備前〕

古今銘盡に畠田守近子、守家の父と記されてある。

刻銘「宗家」

◇ 宗利 三條

〔長久—山城〕

三條宗近子、銘盡に名を留むのみ、作品は見られない。

刻銘「宗利」

◇ 宗近 三條

〔永延—山城〕

古刀 最上作

本國河内、有成同人と云ふ、上洛して永延元年宗近と改むなどの傳説もある、三條小鍛冶と稱せらる、狐の助力を得て小狐丸の劍を造つたと云ふ、その眞偽は讀者の御批判に任せよう、作者の時代が余りに古い爲め又作品も信すべきものを見ないから何も論じられない。

刻銘「宗近」

◇ 宗近 伊賀

〔建武—伊賀〕

作品を見ない刀工の一人であるが往々に三條宗近の偽銘をこの作と想像される場合があるらしい。

刻銘「伊賀阿拜郡住宗近」

◇ 宗吉 越前

〔大永—越前〕

末古刀 中作

加賀より移りたるか。

刻銘「越前住宗吉作」「宗吉」



この宗吉の中心先劍形は磨上るとき造られたもので宗吉自身ではない、又新たに造られた目釘穴は上にある二ツで磨上げも二度行はれたことになる。

◇ 宗吉 一文字

〔承元—備前〕

古刀 最上作

備前則宗、刑部丞と稱し、後鳥羽院御撰抜の御番鍛冶の一人、これ一事でこの鍛冶が名工であることを證明されて居る、作品姿優しく反高い、双文丁子亂。

刻銘「宗吉作」「宗吉」



◇ 宗忠 一文字

〔承元—備前〕

古刀 上々作

福岡一文字の一族、一文字宗長子。

刻銘「宗忠」



◇ 宗次 青江

〔建長—備前〕

古刀 上作

古青江に屬す、青江行次子。

刻銘「宗次」

◇ 宗長 若州

〔永享—若狭〕

中古刀 中上作

刻銘「若州住宗長」

◇ 宗長 小濱

〔永正—若狭〕

末古刀 中上作

樋を好む、双文直小亂、比較的上手な刀工。

刻銘「若州小濱住宗長」「宗長」



◇ 宗安 古備前

〔寛弘—備前〕

古刀 上々作

刻銘「備前國宗安」

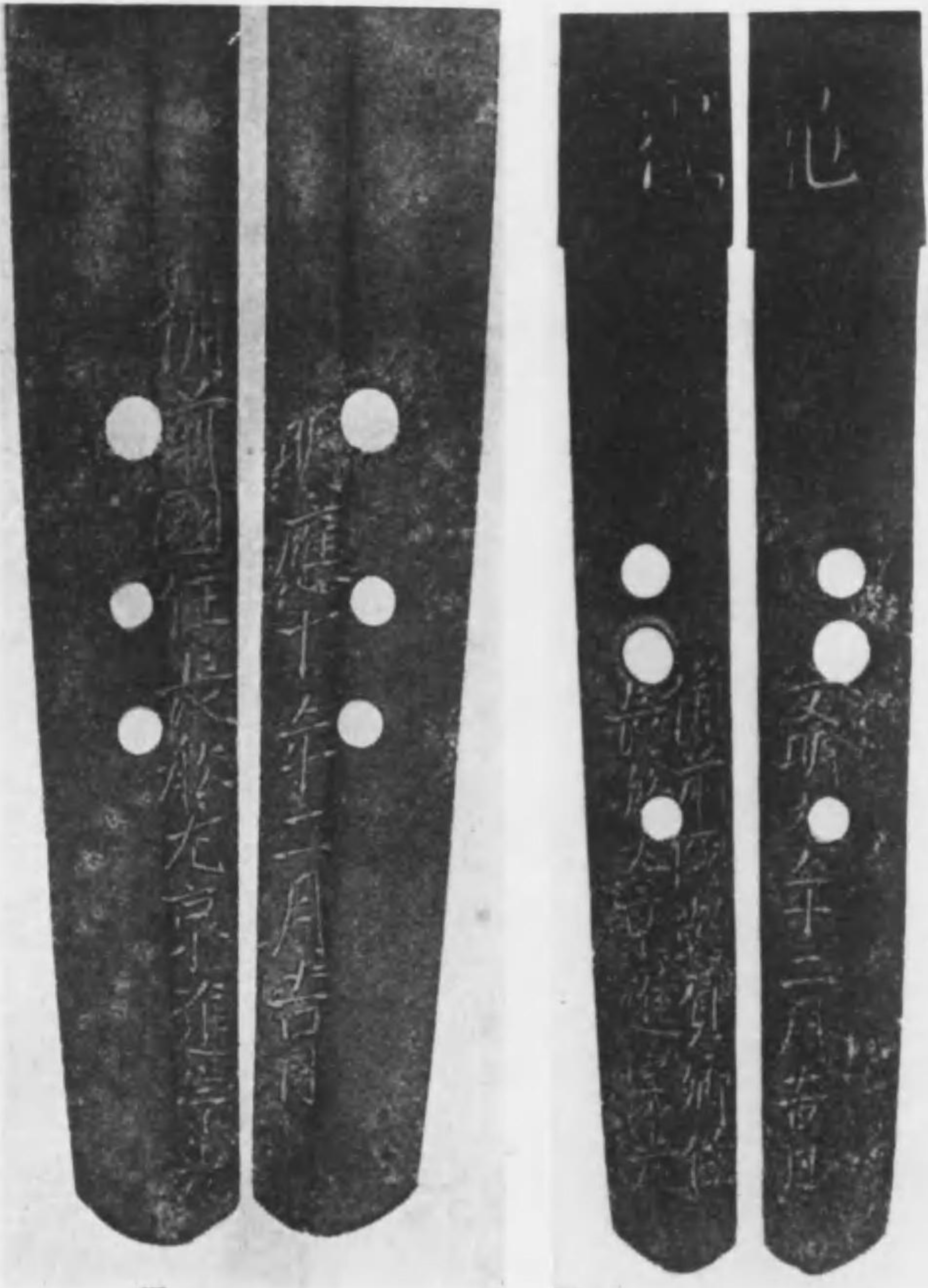
◇ 宗光 左京進

〔文明—備前〕

末古刀 上々作

兄右京亮勝光と諸國巡遊して合作を殘す、兄没後其の嫡子次郎左衛門尉勝光を授けて鍛刀に努む、又美作城主赤松政則に刀劍鍛錬を教授せしはこの宗光ならん、作品寸詰りたる刀多く、双文五ノ目丁子、直双、彫物をも見る。(良業物)

刻銘「備前國住長船左京進宗光」「備前國靱負郷住長船左京進宗光」



註文打

註文打

長船は土地の名であるが、備前國住と切りその上に長船と切つて居る点から考へ、長船を苗字の如く用ひてゐるわけである、他の末備前にもこの例がある。

赤松政則(播磨、美作、備前領主)が宗光に鍛錬を學び刀劍を造つてゐる、又後年浦上家(赤松に替つての勢力)が源兵衛祐定、五郎左衛門清光等に鍛刀を命じてゐる、末備前と赤松、浦上の兩家は縁が深いわけである、結局末備前の初期は赤松家に中期以降は浦上家の支配の下にあつたらしい。



註文打

この宗光は中心が精進である、刃鋼を用ひたためであり、銘も非常に神妙に切られてゐる、普通の場合、俗名のないものは仕入打であるが註文打にも僅かに俗名のないものがある(仕入打)中心に心臓を使ふため朽込み易い、手数を省くために總ての工作が粗である、銘字の神妙になれないのもその現れである)

◇ 宗 光 作州

〔明應〕美作

末古刀 中上作

左京進宗光の一族ならんか。(業物)  
刻銘「美作國住宗光」

◇ 宗 重 若州

〔永祿〕若狭

末古刀 中作

宗次子、越前又は播磨にも住す。  
刻銘「若州住宗重播州於飭西郡爲徳四郎作之」



◇宗重 藝州

大山に住し、彦三郎と稱す。  
〔天正―安藝〕

末古刀 中作

刻銘「藝州大山住宗重延道彦三郎作」



◇宗久 豊後國

豊後行平の末流ならんか、今迄の銘鑑にも現はれてゐない。  
〔應永―豊後〕

中古刀 中上作

刻銘「豊後國住人宗久作」



裏銘「應永二十年」に八の字が加へられ「應永二十八年」になつてゐる、これは勿論本工自身の手になるものであつてその無造作な追加が面白い、又銘字が豊後國定秀を偲ばせてゐる、若しこの刀に應永の年號が付いて居なかつたら推定時代はぐんと上つたあらう。

◇統景 高田

高田行長等と共に新刀高田ものゝ初祖をなす。  
〔文祿―豊後〕

末古刀 中作

刻銘「豊州高田住藤原統景」





表銘「豊州」の州の最後のタガネが二重になつてゐる、切損じを切直したためである、寧ろこんな無造作が正真正刀に多い、高田住は西國東郡高田町と云ふ。

◇ 村正 正千子

〔大永 伊勢〕

末古刀 最上作

關兼村の子であると云ふ、法名妙臺、俗名を右衛門尉と稱せしか、古書に時代貞治などあるは時代釣上げも甚しい、作品年號から見れば文亀、永正、大永頃に多い、平安城長吉弟子説がある、正宗弟子説は問題にならない、徳川時代同家に崇るものとして妖刀視され、この刀の佩用を禁じられた、岩崎航介氏が談に「地理的に見て三河國と近い……三河武士の手に入る機會が多い」ことに因ると云ふ、爲めに秘かに所持するもの往々銘を改作或は潰したるあり、作品短刀、寸延短刀多く、地板目、双文箱亂烈げしき双、刀は稀れである、彫物もある。

刻銘「村正」「勢州桑名住村正」



右刻銘の「十月十三日」は日蓮上人の命日である。

村正の中心の型、双文等から考へて時代は決して古書の云ふ如く古いものではない。



右圖は村正の「村」の字を潰して徳川家に秘して所持せるもの、一つと思はれる、又村の字を廣に改作して廣正として所持せる者も有つたと見え、現在それ等が残されてゐる。



箱亂

一見美濃關風で兼房などに似たるものがあるが刃文の烈しい点、地鐵の美しい点、勿論段違である、この刃は村正獨特と云へやう、弟子の正重になると五ノ目尖り又は銚子崩れたるもの多く相違を見せてゐる。

◇ 村正千子

〔永正―伊勢〕

末古刀 上々作

時代永正とすればこの村正が前述の大永村正の父に相當するか、その点不明である、箱亂刃を得意とせり。

刻銘「村正」「勢州桑名住村正」



本工が初代村正とするなれば本工が兼村の子と云ふわけになる、本工が假令初代であつても有名を馳せた村正は前述の大永村正であることは論を俟たない。

【むーう】 村正・村重―氏吉

一八三

◇村正參代

〔弘治―伊勢〕

末古刀 中上作

大永村正の子ならんか、作品極めて妙い様である。  
刻銘「村正」



昔、村正を妖刀扱ひをしたのは、一二の偶然の出来事に演劇、講談等が色々の材料で喧傳したもので有つて「刀に現れた迷信」の一つである、現在では余り問題にしない様であり、寧ろ好者間に鑑賞が厚い。

◇村重千子

〔天文―伊勢〕

末古刀 中上作

千子の族、大永村正子ならん。  
刻銘「村重」

◇氏吉海部

〔應永―阿波〕

中古刀 中作

那賀郡海部に住せしと云ふ、但し作品を見ない、世上切刃造にて刀身に「阿州住氏吉作」とあるものを見るがこれは新刀期の山刀用に造られた粗製品にて勿論木工の作品ではない。

刻銘「氏吉作」

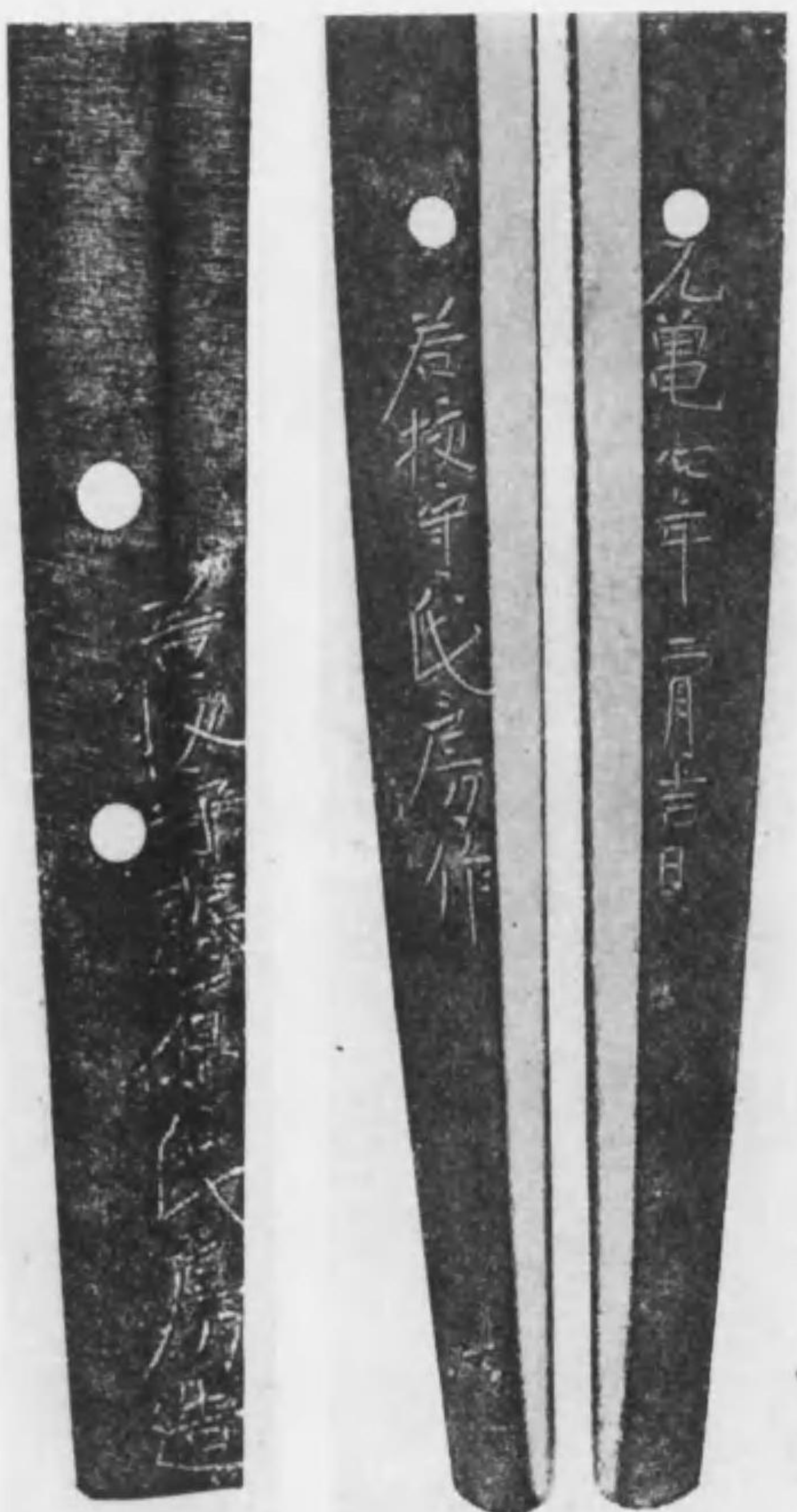
◇氏房若狭守

〔元龜―三河〕

末古刀 中上作

關兼房子にて、木工も初め兼房を襲名せしか、後三河尾張に移り氏房と改む、今川氏眞の一字を贈られたるならんか、作刀身巾廣く刃文灣亂、烈しき出来である。(業物)

刻銘「若狭守氏房作」「若狭守藤原氏房造」



若狭守氏房に貳代ありといへどその判別は決し難い。

【う】 氏房

一八三

◇ 氏貞 出雲守

〔天正—三河〕

末古刀 中上作

若狹守氏房弟。

刻銘「出雲守藤原氏貞」「權少將出雲守藤原氏貞」「氏貞」「濃州關住氏貞」

◇ 雲次 鶺鴒初代

〔文保—備前〕

古刀 上作

雲生弟と云ふ、後醍醐天皇の御劍を打ち奉りて雲生と共に雲次の名を賜はると傳へらる、太刀、長卷、先反短刀がある、双文は逆小丁子、直逆足入りがある、同銘二三代續くと云ふ。

刻銘「雲次」「備前國住雲次」



鶺鴒一族は比較的作品の有る方である、それだけに註文者も有り、この一族が存在當時から認められてゐたと思はれる。



小丁子

◇ 雲重 鶺鴒

〔貞治—備前〕

中古刀 上作

古今銘盡に因ると雲同子と云ふ、雲生の孫に當る、時代から見ても雲生子とは見難い、作品年號によれば文和、貞治、應安、作風は總て雲次の如くである。(良業物)

刻銘「備前國住雲重」

